

尾原ダム建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書1

いえ うえ いせき いわ つぼ いせき
家の上遺跡・石壺遺跡

1998年3月

建設省斐伊川神戸川総合開発工事事務所
大原郡木次町教育委員会

正 誤 表

頁	行	誤	正
押図目次		3 A 区平面図……1 1 4 A 1区土層図……1 1 5 A 2区土層図……1 2 6 A 3区土層図……1 3 7 A 4区土層図……1 4	3 A 区平面図……1 0 4 A 1区土層図……1 0 5 A 2区土層図……1 1 6 A 3区土層図……1 2 7 A 4区土層図……1 3
図版目次		2 A 4区の土層状況と 集石・配石状況 8 C 4区水路跡と石組・X-5 検出状況	2 A 4区の土層状況と配石状況 8 C 4区水路跡とX-5 検出状況
15		図8 A 4区遺構図の出土遺物の うち西側の高塗	环
36		(2) 遺物(図21参照)中の遺物番号8~15は1つずつ繋り上 がって7~14となる。	
図版5		写真番号22	写真番号21(押図番号と同じ)
図版24		43-2	43-4



上空から見た家の上遺跡周辺



家の上遺跡出土土馬と土器片（左から手捏土器・製塩土器・黒色土器）

序

建設省斐伊川神戸川総合開発工事事務所においては、『現代のおろち退治』といわれる斐伊川神戸川両水系を一体とした治水計画の一環として、斐伊川の上流に尾原ダム、神戸川の上流に志津見ダムを建設し、下流域の洪水の調節及び水道用水の確保等を目的とした多目的ダム建設事業を進めています。

ダムの事業用地内の埋蔵文化財については、文化財保護の主旨に則り関係機関と協議しながら必要な調査を実施し、記録の保存につとめています。

尾原ダム建設事業においても、島根県教育委員会と協議をし、同教育委員会や木次町教育委員会の協力のもとに平成9年度より発掘調査を実施しているところです。

本報告書は、平成9年度に実施した「家の上遺跡」、「石壇遺跡」他の調査結果をまとめたものです。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術及び教育のために広く利用されることを期待します。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力頂きました島根県教育委員会ならびに関係各位に対し謝意を表します。

平成10年3月

建設省中国地方建設局
斐伊川神戸川総合開発工事事務所

所長 藤山秀章

序

斐伊川は、その源を中国山地の船通山に発し、山間部を北流しながら簸川平野を貫流して宍道湖に注ぐ出雲部有数の一級河川であります。

奥出雲の斐伊川沿岸では、縄文の昔には人々の生活が始まり、奈良時代にはこの斐伊川は、「出雲大川」と称されて、「河口より河上の横田村に至るまでの間、五つの郡の百姓、河に便りて居めり。」と「出雲国風土記」に記されています。

このように斐伊川は、人々に大きな恵をもたらしてきた反面、豪雨による大洪水など、長い間には、人々に多大な被害も及ぼしてきました。

このような過去の被害や治水の重要性を背景として、建設省により本次町大字平田地内に尾原ダムが建設されることとなりました。

ダム建設に先立ち、平成4年度から5年度にかけて島根県により当該地域の埋蔵文化財分布調査が実施されたところであります、これに伴う発掘調査については、建設省、島根県文化財課の協議により、本次町教育委員会が建設省中国地方建設局の委託を受け、行なうこととなりました。

平成9年度に調査を実施した遺跡は、家の上遺跡をはじめ、調査継続中の上垣内遺跡等であります、中でも家の上遺跡からは律令期の祭祀関連遺跡、近世のたたら跡などが検出され、「出雲国風土記」の記述の一端を垣間見ることができました。この報告が郷土の歴史解明に多少なりとも役立てば幸いと存じます。

この度の発掘調査にあたり、建設省中国地方建設局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所及び島根県文化財課、島根県埋蔵文化財調査センター、さらには地元の皆様をはじめ、多くの方々にご協力をいただきましたことについて衷心よりお礼申し上げます。

平成10年3月

本次町教育委員会

教育長 橋本敏雄

例　　言

1. 本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、本次町教育委員会が平成9年度に実施した尾原ダム建設工事に伴う残土処理工事予定地内の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 本書で扱う調査報告は、大原郡木次町大字平田地内、大原地区に所在する家の上遺跡のほか、石壇地区の石壇遺跡及び下垣内地内の詳細分布調査である。なお、平成9年度に調査を開始した上垣内遺跡については調査継続中である。

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 本次町教育委員会 教育長 橋本 敏雄

事務局 本次町教育委員会 小林 憲司（教育次長）

　　同 大坂 敏行（文化財係長）

調査員 坂本 諭司（本次町教育委員会主幹）

蓮岡 法暉（島根県文化財保護指導委員）

杉原 清一（　　同　　）

藤原 友子（三刀屋町文化財委員）

調査指導 岩橋 孝典（島根県教育庁文化財課埋蔵文化財係主事）

錦田 剛志（島根県埋蔵文化財調査センター主事）

調査補助 川隅美代子（兼遺物整理）、鳥谷みゆき（同）

発掘作業 亀山 利夫、山本 一吉、荒砂 久男、川本 勝雄、亀山 英夫

藤原 由市、新田 嘉道、安立 一男、青戸 延夫、難波 隆

4. 調査にあたって次の方々に協力をいただいた、記して謝意を表します。（敬称を略す）

（有）荒砂土建、（株）亀山建設、亀山賢己、（株）古川コンサルタント

5. 遺跡の性格について検討を加えるため次の関係機関に分析を依頼し、分析結果についてレポートをいただいた。（敬称を略す）

鉄滓分析 日立金属株式会社冶金研究所・和銅博物館 佐藤 豊

¹⁴C年代測定 大阪府立大学先端科学研究所アイソトープ総合研究センター

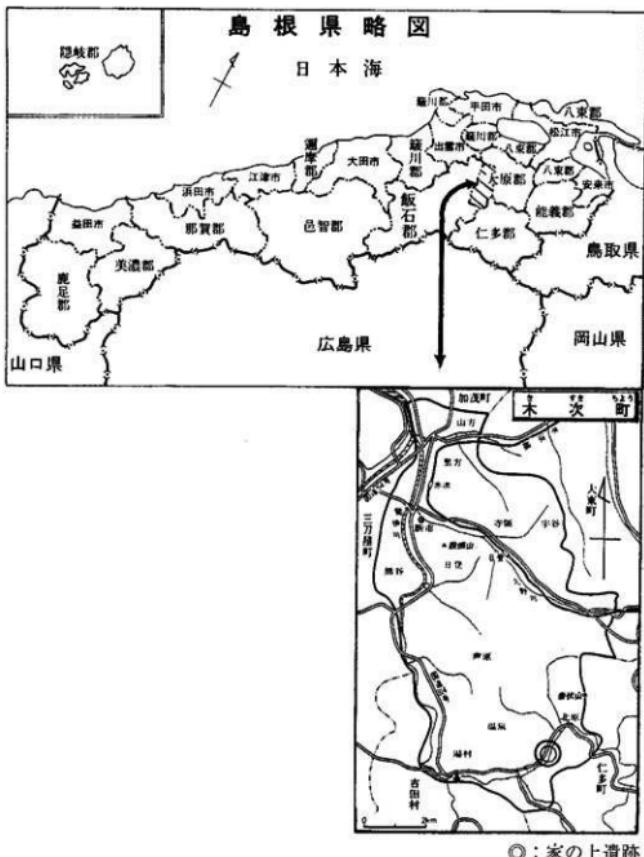
川野 瑛子・柴田せつ子

蛍光X線分析 奈良教育大学 三辻 利一

6. 図2と52は国土座標を記入した。座標軸に対する調査時磁方位の偏角はN7°10'Wである。そのほかの挿図中の方位は磁北を示す。

7. 本書の土層断面図中には縦横の縮尺比を変えて表現したものもある（図20・23）。

8. 第3章中、C4区、図39・40で用いた記号Xは集石を示す。
 9. 遺物の実測は蓮岡、杉原、坂本が行ない、浄写は蓮岡、藤原、坂本で行なった。写真撮影はB区の遺構、遺物については杉原が行ない、その他は坂本が行なった。また遺物のX線写真撮影については島根県埋蔵文化財調査センターの協力を得た。
 10. 本書の執筆、編集は蓮岡、杉原、坂本が行ない、編集には藤原が加わった。なお文末に担当者名を記した。
 11. 出土遺物、実測図及び写真類は木次町教育委員会で保管している。



目 次

序	山本秀章
序	橋本敏雄
第1章 調査に至る経緯	(坂本) 1
第2章 地理的・歴史的環境	(蓮岡) 2
第3章 家の上遺跡の概要と経過	8
第1節 遺跡の概要	(坂本) 8
第2節 A区の調査概要	(蓮岡) 9
第3節 B区の調査概要	(杉原) 34
第4節 C区の調査概要	(坂本) 42
第5節 D区の調査概要	(坂本) 68
第6節 A～C区採取鉄滓の検討	(杉原) 69
第7節 総括	(坂本) 70
第4章 石塚地区の調査	74
第1節 石塚遺跡の調査概要	(杉原) 74
第2節 下垣内地区的調査	(坂本) 76
付編Ⅰ 家の上遺跡出土鉄滓の調査	佐藤 豊 79
付編Ⅱ 家の上たら跡遺跡より発掘された木炭の ¹⁴ C年代測定	川野瑛子・柴田せつ子	85
付編Ⅲ 家の上遺跡出土須恵器の螢光X線分析	三辻利一	88

挿 図 目 次

図1 本次町遺跡分布状況	3		
2 家の上遺跡周辺地形図	4		
3 A区平面図	11		
4 A 1 区土層図	11		
5 A 2 区土層図	12		
6 A 3 区土層図	13		
7 A 4 区土層図	14		
8 A 4 区遺構図	15		
9 土馬出上状況	16		
10 A 4 区配石遺構断面図	17		
11 酸化鉄の沈着状況	17		
12 A 4 区下部の状況	17		
13 A 4 区出土上器 須恵器(1)	19		
14 *	*	(2)	20
15 *	*	(3)	21
16 A 4 区他出土上器 十師器(1)	23		
17 *	*	(2)	24
18 A 4 区他出土 その他遺物(1)	25		
19 *	*	(2)	27
20 B区土層図及びB2区第2遺構・B3区遺構	35		

図21	B区出土遺物	37	38	C4区石組遺構出土遺物	56
22	B2区第1遺構(たたら跡)検出状況	38	39	C4区水路跡石組遺構	57
23	C・D区地形測量図	41	40	タ X-5	58
24	C1区出土遺物	42	41	C4区水路跡出土 弥生土器・土師器	59
25	C2区出土遺物	42	42	タ 須恵器(1)	60
26	C4区東壁・6~7ライン土層図	43	43	タ (2)	61
27	C4区遺構全図	45	44	その他他の土製品	62
28	C4区土器滴り	46	45	鉄器	62
29	タ 断面図	47	46	石器	63
30A	C4区土器滴り出土 土師器	48	47	C4区包含層出土 弥生土器・土師器	63
30B	タ 土師質須恵器	48	48	土師器	64
31	タ 須恵器(1)	50	49	須恵器	65
32	タ (2)	51	50	その他他の遺物	66
33	タ (3)	52	51	D1・2区出土遺物	68
34	タ (4)	53	52	石壙地点地形測量図	74
35	タ (5)	54	53	下垣内地区地形測量図	76
36	タ 鉄器・石器	55	54	下垣内地区土層図	77
37	C4区石組遺構	55			

図版目次

- 巻頭上 上空から見た家の上遺跡周辺
 下 家の上遺跡出土の土馬と土器片
- 図版1 家の上遺跡全景・A区近景・A2区東壁土層状況
 2 A4区の土層状況と集石・配石状況
 3 A4区の配石と遺物出土状況
 4 B2・B3・C1区の遺物と遺構検出状況
 5 B区の遺物とB2区たたら遺構
 6 C4区の土層状況と土器滴り遺構
 7 C4区石組遺構と遺物出土状況
 8 C4区水路跡と石紅・X-5検出状況
 9 C4区遺物出土状況とX-1検出状況
 D4区の土層
 10 石壙遺跡
 11 A4区出土土器(須恵器)
 12 A4区出土土器(須恵器)
 13 A4区出土土器(須恵器・土師器)
 14 A3・4区出土遺物(土師器・土馬等)

- 15 A3・4区出土その他遺物・C4区土器滴り出土土器
 16 C4区土器滴り出土土器とC1・C2区出土土器
 17 C4区土器滴り出土土器(須恵器)
 18 C4区土器滴り出土土器(須恵器)
 19 C4区土器滴り出土土器(須恵器)
 20 C4区土器滴り出土土器(須恵器)
 21 C4区石組遺構出土遺物・包含層出土の弥生土器
 22 C4区水路跡出土土器(土師器)
 家の上遺跡出土鉄滓
 23 C4区水路跡出土土器(須恵器)
 24 C4区水路跡出土その他遺物
 25 C4区包含層出土土器(須恵器)
 26 C4区包含層出土その他他の遺物とD1・2区出土土器・家の上遺跡遺景
 27 家の上遺跡出土鉄器X線写真

第1章 調査に至る経緯

建設省中国地方建設局では尾原ダム建設に先立ち、まずダムサイト直下流域に位置する大原郡木次町大字平田、尾原地区の残土処理工事が計画された。

そこで平成4年度から5年度にかけて島根県が行なった尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財分布調査の結果に基づいて、平成8年9月9日本次町教育委員会に対し、建設省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所より当該地域における埋蔵文化財の確認調査の依頼があった。木次町教育委員会ではこれを受け、平成8年11月20日及び同年12月13日に工事予定地の試掘調査を実施した。

その結果、残土処理予定地の水田の数か所から、律令期の土器や鉄滓が検出され、遺跡の存在が確認された。建設省としては、国事業でもあり、尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財調査については島根県に依頼する予定であったが、県がおこなう埋蔵文化財調査事業量の増大により調査の調整がつきにくいくことや当該土木工事が急がれたため、やむを得ず建設省と島根県文化財課及び木次町で協議した結果、本遺跡の発掘調査については木次町で実施することとなった。

これにより、平成9年4月1日建設省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所より木次町長に対して家の上遺跡とその周辺の遺跡、試掘調査地の調査依頼があり、委託契約を締結した。工事計画では、前述した工事事務所との協議において工事予定地の水田は全て盛り土による嵩上げであり、またこれに伴って道路及び排水路を建設するというものであった。そこで木次町教育委員会では島根県文化財課の指導を受け、道路と排水路建設予定地及び盛土による嵩上げで今後発掘調査が困難な部分について調査を行なうこととした。

本町にとって、尾原ダムの建設は一大プロジェクトであり、地元の方々の埋蔵文化財調査に対する理解を深めていただくため、木次町教育委員会及び本町ダム対策室では平成9年4月11日、さらに4月24日と地元公民館において尾原地区埋蔵文化財調査説明会を開催し、地元の理解、協力を得ながら調査を行なった。

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 位置と地理的環境

1. 家の上遺跡

本遺跡は、南北に長い木次町の南縁、木次町大字平田337番地2外（大原地内）に所在する。場所は斐伊川左岸の台地上である。本遺跡の付近では斐伊川は北から南へ流れるがその東側の大きくなっている谷間にほぼ中央に龜山と称する比高約20mの独立低丘陵があり、その南西麓の川岸に「出雲國風土記」にその名が記されている石壺神社が鎮座する。遺跡は、龜山の北約150～250mの湾状谷間の北側、緩傾斜地（現水田）中腹以上の標高約145～150mの範囲に分布する。

このあたりはいわゆる中国準平原で、中国山地背梁部の仁多郡横田町に源を発する斐伊川は、木次町の南縁を嵌入蛇行を繰り返しながら流れる。本遺跡付近は、その上流域にあたり、浸食作用によって深い峡谷が形成されている。

現在最も低い位置にあるC4区と本流河原との高差は約5mであるが、浸食が進行しない過去においては川底は現在より浅かったと考えられ、洪水時には台地中腹まで浸水することがあったと思われる。谷間に北側端付近に位置するB区、C区やD区下方の範囲では砂の堆積が見られた。水流は、山裾に沿って谷間に流入、龜山あたりで本流に戻ったものであろうか。やや谷奥に位置するA区では顯著な砂層は見られなかった。

遺跡の分布する台地上には、東側の山裾から何筋もの谷川が本流に向って流れている。調査の結果C4区の遺構は、この谷川と密接な関係をもつものであることが判明した。また、A4区も谷川（水）と深い関係があることが考えられる。

2. 石壺遺跡

家の上遺跡の西約200m、斐伊川対岸の山麓で、下方国道からの高さ約20mの地点である。遺跡の位置は龜山榮吉氏宅裏（屋敷地内）で、昭和40年代初めに崩れた土の中から磨製石斧1個が出土したものである。

龜山氏宅の後は自然丘陵下方の急傾斜地で、土質は主に風化した岩礫層であり、一帯には後世の土木工事による擾乱も認められた。

調査溝を設けて確認した結果、後述するとおり右斧出土土地付近には遺跡は存在せず、遺物は上方からもたらされたものと判断されるに至った。

3. 下垣内試掘調査地

本調査地は、家の上遺跡の南西、斐伊川対岸の突出する急峻な丘陵突端、木次町大字平田1841番地外（石壺地内）に所在する。調査地下方、岩壁に接して国道314号線が走るが、

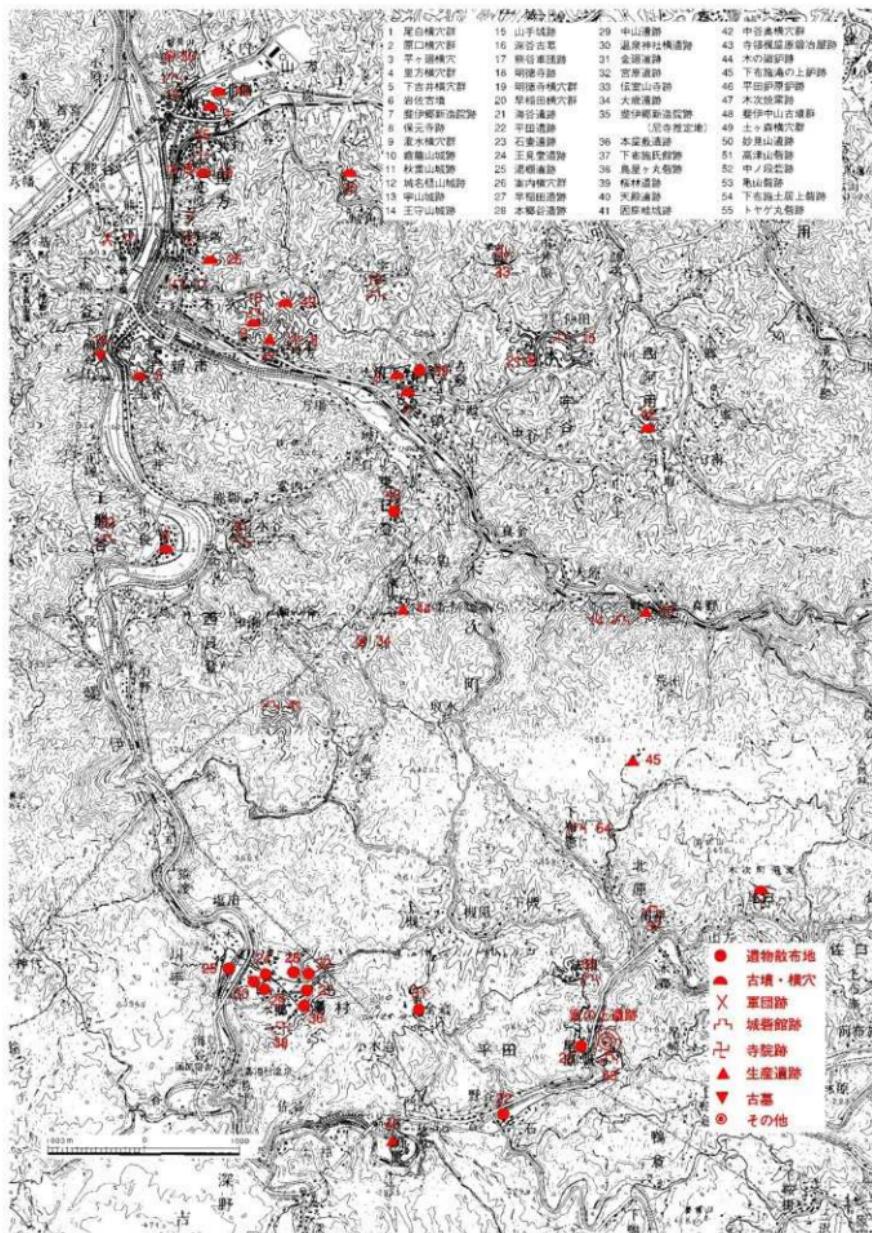


図1 木次町遺跡分布状況

図2 家の上遺跡周辺地形図



これからの比高は約20mである。この丘陵斜面に緩傾斜の段状の地形が存在する。城砦跡の可能性もあったので試掘調査を実施したが、後述のとおり遺跡は存在しなかった（畠地跡か）。

第2節 周辺の遺跡

いま木次町内の遺跡をあげれば図1のとおりである。後述するとおりA区、C区が奈良時代を中心とするものであり、B区のたたら跡は17世紀の所産である可能性が高い。ここではこれらと時期的に関係のあるものを中心にいくつかを紹介する。

7. 斐伊郷新造院（僧寺）跡

木次町大字里方、塔の村 JR木次駅構内

「出雲国風土記」の大原郡来次郷には次のように記している。「新造院一所。斐伊郷の中にあり。郡家の正南一里なり。巖堂を建立つ。僧五軒あり。大領勝部臣蟲麻呂^(虫)が造りし所なり」。

明治6年（1873年）に現在のJR木次駅構内（当時水田）から礎石が発掘された。花崗閃緑岩製で、上面平坦部は2.03m×1.45mの不整形、中央に径64cm、高さ6cmの納がつくり出されている。現在駅裏に安置され、塔の石と呼ばれている。^(塔)現在まで礎石出土土地付近の発掘調査等はされていない。また礎石以外の遺物については不明である。風土記に述べられている郡家からの方針、距離と尼寺の位置から塔の石出土土地は僧寺にあてるのが妥当である。

35. 斐伊郷新造院（尼寺跡）

木次町大字里方法華坊 正覚寺付近（推定）

「出雲国風土記」には、斐伊郷の他の新造院について次のように記す。「新造院一所。斐伊郷の中にあり。郡家の東北一里なり。巖堂を建立つ。尼二軒あり。斐伊郷の人、樋印支知麻呂が造る所なり。」この尼寺跡を比定するにあたっての確実な証拠はないが、推定の根拠となるのは一つは前に述べた礎石「塔の石」出土の僧寺跡から推定される郡家からの方針と距離である。二つには「法華坊」なる地名（字名）である。出雲国分尼寺跡に「法花寺前」という地名が存在することから「法華」なる地名が尼寺の所在に深い関係があると考えられる。このような理由から正覚寺付近の法華坊が尼寺跡としての可能性が高い。

50. 妙見山遺跡^(遺)

木次町大字里方 妙見山（標高172m）の支丘尾根上

平成5年（1993年）に調査がおこなわれ、3段に分れる加工段に数棟の掘立柱建物跡のは

か、凹穴や多数の遺物が出土した。遺物の土器類は土師器が主で須恵器は少なかった。

須恵器には山雲国第4形式に相当する壺や蓋が含まれている。この遺跡で注意されるのは、1万点を超える中世土師器で、その器種の分析からこの遺跡が山岳信仰に関わるものであることが判明した。

46. 平田鉢原鉢跡⁽²⁴⁾

本次町大字平田鉢原 山丘斜面下方

旧国道（現在町道）から山丘麓に沿って南にまわる道路（町道）との分岐点の付近斜面に鉄滓が堆積していたが、昭和15年頃の中電川平発電所関連のトンネル工事などの残土処理のため埋没して現在みることができない。したがって鉢跡の実態については不明である。現在山丘中腹には水路跡があり、この付近でかつて鉄穴流がおこなわれていたことがわかる。鉄穴流で出る土砂で斐伊川との間の土地が埋め立てられ、耕地ができるのでこのあたりを鉢原という。また山丘麓を走る道の傍には無縁墓があるが、これはこのたたら関係者の墓と伝えられている。

第3節 石壺神社

石壺神社は、家の上遺跡が所在する大原の谷間の中央に起立する独立丘陵の亀山の麓に鎮座する。当神社は、「出雲國風土記」にその名がみられるものである。即ち仁多郡の条に、「石壺社 以上八所は並びに神祇官にあらず。」と記され、漆仁社（湯村の温泉神社に合祀）などとともに國社として扱われていた。

また「雲陽誌」には、仁多郡尾原の条に「石壺大明神 風土記に載る大原の社なり。武雷命斎主命、天津兒屋根命、姫大神をまつる。本社一間に四尺、拝殿二間梁三間。永正十三年飯島為光建立棟札あり。祭日九月十九日、祠官社籠して祓神樂を奏す。」と記す。飯島為光は、信州から仁多郡に移った三沢氏の正統で、その三沢氏が造営に関与していることが注意される。

当神社所蔵の棟札で最古のものは

棟上 己子 大權那源朝臣飯島為光代官

奉造立岩壺三社大明神

遷宮 義子 神主橋朝臣重清

旨永正十年丙子五月初□（旨は豈、永正十年は、1516年）

このほか古い棟札写しに明応十年（1501年）（神主橋重清）、永正2年（1505年）、天文3年（1534年）（大權那飯島為幸、神主橋重清）、永禄7年（1564年）（檀地頭為清）などがある。

このような記録にみられるとおり石壺神社は少なくとも14世紀以降三沢氏の厚い庇護を受けており、この地域において一定の力を保っていたことが推定される。

石壺神社の鎮座する亀山は、斐伊川岸にある風化した花崗岩でできた独立丘陵で、谷頭に起立する20mの山容は神の依る環境としてふさわしい景観である。これとよく似た例として、近くでは飯石郡三刀屋町大字古城の、三刀屋川沿いにある独立丘陵、奈倍山に建立された奈倍山神社がある。また石壺の名称の由来は何か。これについては、亀山のこんもりと盛り上った山体から、伏せた壺を想像することができ、これが神社の名称に関係していると考えることはできないであろうか。

このような観察から、当石壺神社は創立当初（奈良時代あるいはそれ以前）から亀山に依って造営され、この地域の神の社として崇敬されていたものと考えられる。三沢氏が当社を厚く保護したのもこのような歴史性にあったのかもしれない。

第4節 前の舞の古井（山本一吉氏宅庭の池泉）

「雲陽誌」には、「多郡尾原の条で石壺神社の記事の後に「古井 三澤氏鴨倉在城の時元朝の若水汲たる井の跡なり」と記す。

A 4区の北西20m、石壺神社の北北西200mにある屋号「前の舞」、山本一吉氏家の庭にある池泉がこの古井であるといわれる。乾元元年（1302年）に信州伊那から三沢に移った三沢氏は石壺神社を厚く信仰し、そのすぐ近くにあるこの泉の水を若水として用いたと伝えられる。

山の麓に設けられた築庭の池には、山側の岩の間から清冽な地下水が湧き出ており、夏でも枯れることがない。山本氏の説明によると、以前は湧水量多く子供が水遊びをするほどであったという。また夏には西瓜などを浮べて冷したという。なおこの池は「前の舞の古井」の名称で、島根名水百選に選ばれている。

この泉の水が古くいつから注意され用いられていたか不明であるが、石壺神社に付属する聖泉として奈良時代には使用されていた可能性がある。

（蓮岡法暉）

註

1. 出雲国風土記の読み下しは、加藤義成校注『出雲國風土記』（今井書店、平成4年）による。
2. 『木次町誌』（昭和47年）
3. 木次町教育委員会『妙見山遺跡』（1995年）
4. 勝部辰巳温泉公民館主事から種々御教示をいただいた。
5. 『雲陽誌』（雄山閣、昭和46年）
6. 旧島根県史編纂資料「石壺神社御由緒書」（陶山重丸蔵本写、大正2年）

第3章 家の上遺跡の調査の概要と経過

第1節 遺跡の概要

平成9年度に調査を行なったのは、家の上遺跡、石壙遺跡、下垣内地点（試掘調査地）、上垣内遺跡の4つの遺跡等である。

このうち上垣内遺跡については平成9年8月18日より、調査範囲のうち畑地部分の調査に入り、試掘を行なった。この結果黄白色のブロックを多く含んだ黒色土中から少量の須恵器片が検出されたものの遺構は検出されず土器の出土状況から流れ込みと判断された。

続いて山林斜面部及び平坦部の試掘を行なったところ鉄滓が検出され製鉄遺跡が存在することが確認された。

ところが、本調査は、本年度中に終了困難であることがわかったので、協議のうえ現場をいったん埋め戻して平成10年度に調査を実施することとし、9年度の調査を中断した。詳細については現地調査終了後に報告することとしたい。なお、石壙遺跡、下垣内地点については後段で述べることとする。

家の上遺跡の現地調査は準備や調査範囲の設定、地元への説明等に時間を要し、平成9年5月26日から遺跡周辺の地形測量を開始した。家の上遺跡は谷奥のA区から左回りにB、C、D区と順次調査を進めることとした。

A区は本遺跡の東側水田部にあたり、6月5日より表土除去を開始した。試掘調査の時点では現耕作土下には近代の整備による客土が認められたため、この客土層までは重機を使用した。A区のうちA1区からA3区までは旧耕作土下から少量の遺物が出土したが遺構は何ら認められず土層状況を記録して調査を終了した。

A4区については、発掘を進めたところ、鉄滓、鉄器を検出したため調査を拡大して精査を行ない、これらの遺物の他集石群や土器、羽口を検出した。ところが遺跡の性格を知るに足りる資料が少ないまま精査を終えようと8月19日に礫を取り上げたところ、右下から土師質の土馬が出土した。その後遺構面下層の土層状況を精査、確認して結局10月8日に調査を終えた。

B区は本遺跡の北に位置する山本氏宅前から後背の山丘を斐伊川に沿って所在する水田と畑地部分である。6月13日から調査を開始し、B1区及びB5区では遺物包含層が認められたが遺構は確認されなかった。また、B2区ではたたら跡、B3区でもたたら状遺構をそれぞれ確認、精査を行なって8月19日調査を終了した。

C区は本遺跡で斐伊川に沿って南北にのびる調査区である。調査は6月17日より開始しC1区では畑地耕作土下から石列を検出した。調査区中央部一帯は湿地となっており重機

で掘削を試みたものの地下水が湧出するため、遺跡はないものと判断してこの湿地帯については調査を打ち切った。C4区では元水田耕作土下より土器片が出土したため掘り下げていったところ土器溜りや水路、また水路内から石組みを検出した。

C4区精査中の8月10日には地元を中心し現地説明会を開催し、埋蔵文化財への関心を深めてもらう契機とした。その後の精査では水路からの湧水や降雨による調査現場の浸水に悩まされながら10月28日に調査区の写真撮影を行ない調査を終了した。

D区は本遺跡の南側を東西に走る調査区である。第1次は調査区東寄りを6月26日から6月30日にかけて掘削を行なった。数点の土器の出土はあったものの遺構は検出されず土層状況を検討して調査区拡張には至らなかった。第2次調査は西寄りを11月6日から開始した。トレーナーを設定して掘削を行なったが遺物、遺構とも何ら検出されず、黒色土下層で斐伊川の堆積物と考えられる砂層と川石を確認したため地形測量、写真撮影を行なって11月19日に家の上遺跡の現地調査を終了した。

(坂本謙司)

第2節 A区の調査概要（図3）

A調査区は最も谷奥に位置する調査区で、水田中に設けられたものである。4区に分けて調査したが、最初に発掘調査した北側のA4区からは山石の配石遺構と多数の遺物が出土した。続いてその南側のA3区を発掘調査したが、ここでは遺構は検出されず土器などの遺物が少量出土しただけであった。このような状況からA3区に続くA2区とA1区については西側を除く三方の縁を帶状に発掘調査するにとどめた。

1. A1区の概要

南端の区で、発掘したのは東側9m×1.5m、北側6m×1m、南側7m×1.5mの変形コ字形の範囲である。調査の結果遺構は存在しないことが判明した。

（1）土層について（図4）

土質軟弱で、発掘した壁面の崩壊があり、東側は北寄5m、北側は東寄2.5m、いずれも深さ1.3mについてのみ記録をとることができた。その状況をみると、現在の耕土（水田）①の下方にも旧耕土の層③が観察され、いずれも酸化鉄の沈着したすき床⑦を伴う。現耕土下方には圃場整備の際に埋め立てたと思われる厚さ約0.3mの混疊の黄灰色土②、②'がみられる。

（2）遺物について

遺物は、旧耕土層付近から下方で少量の土器が出土した。

1) 黒色土器（18-6）

塊で、口径14.5cm、器厚0.3cm、口縁部は単純に外傾する。内面のみ焼したものである。

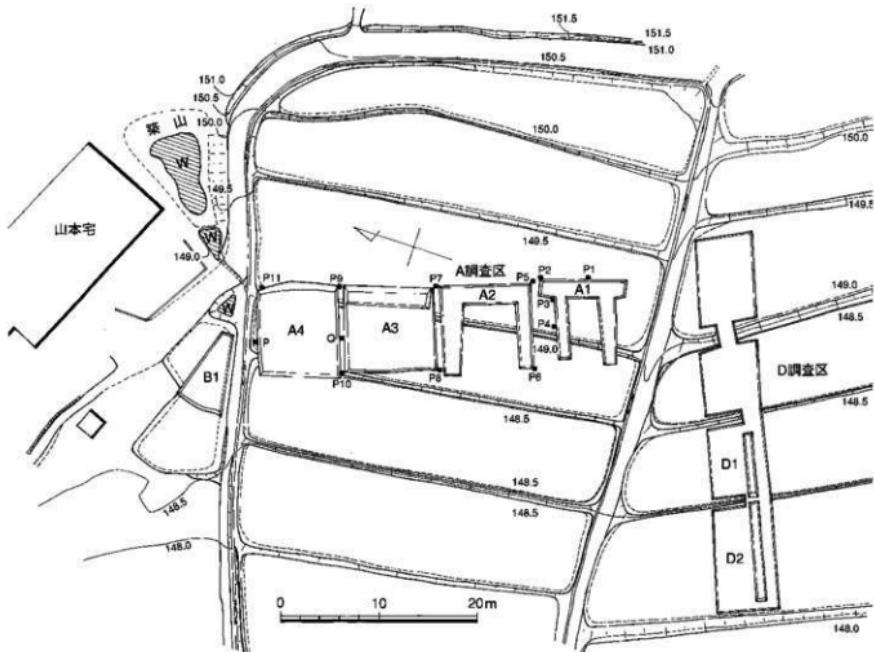


図3 A区平面図

出雲地方は黒色土器出土が希薄な地域で、わずかに松江、安来平野周辺で報告されている
 (註)にすぎない。これらはいずれも11世紀ないし12世紀に比定されている。

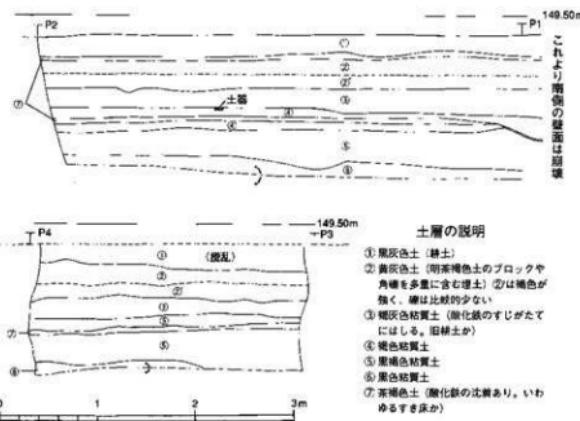
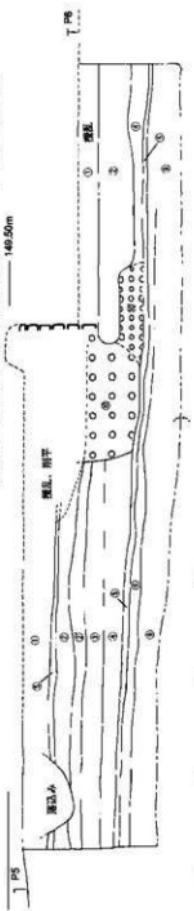
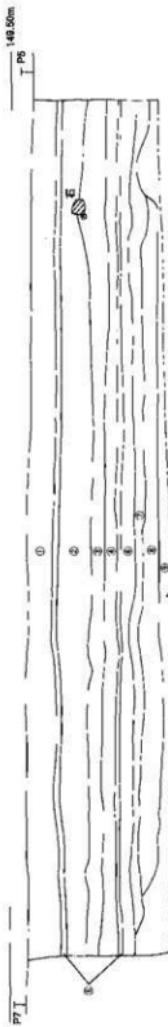


図4 A1区土層図



2. A2区の概要

A1区と同様北、東、西側の幅1.5m～2mのコの字形の範囲について発掘調査したが遺構は認められなかつた。

(1) 土層について（図5）

A1区同様、現耕土（水田）①のはか下層に旧耕土層③、④が認められ、いずれもすき床⑤がみられる。その間で旧耕土の上方には圃場整備の際に埋め立てたと思われる混疊層が認められた。東壁では旧耕土の下に更に混疊の固くしまった層⑦がみられたが、これも埋め立てに關係がある土層とすると、過去何回にもわたって埋め立てがおこなわれたことが考えられる。

遺物は、旧耕土③、④付近から下方で少量の土器が出土した。

3. A3区の概要

辺約10mの略方形の区画で、全体に約1.1m掘り下げ、

東壁沿いの幅2mの部分は更に0.2m深く掘り下げたが遺構は認められなかつた。

(1) 土層について（図6）

東壁については、現耕土（水田）①の下方に旧耕土層③、④があり、いずれも固いすき床と考えられる薄い土層①、⑤を伴う。そして現耕土の下には明るい異質の土塊を多量に含む褐色土②が存在し、過去に圃場の整備が実施されたことがわかる。⑥も疊を含んで

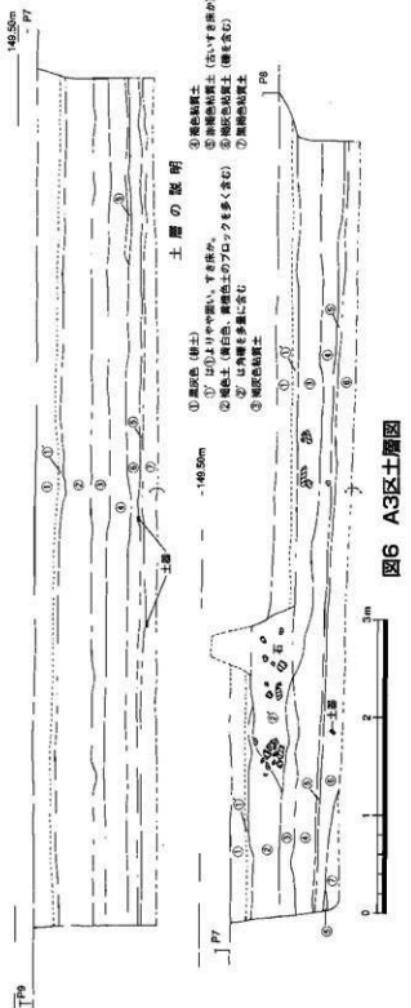


図6 A3区土層図

おり、埋め立て土の可能性がある。土層は概ね整合している。

東壁は、中途に畦畔があり段差ができるが、土層構成は東壁とほぼ同じである。東壁でみられた現耕土下方の褐色土②は段差をつけて整地するための埋め土であったことがわかる。

(2) 遺物について

A4区の周辺であり、かなりの数の土器や鉄器、ふいごの羽口などが出土している。土器はほとんどが細片であるが、土師器が主で須恵器は少量であった。これらは旧耕土④より下方から出土した。

1) 須恵器 (18-2・3)

2は小形壺で、胴径12.8cm、外面はカキ目仕上げ、内面は回転ナデ仕上げである。3は土師質の須恵器で高杯の脚部である。浅黄橙色を呈する。

2) 土師器 (16-1・5・8・15、17-3)

壺16-1・5・8はいずれも赤色塗彩で、口径14.9cm～16.5cm、暗文はない。1は口縁外反気味、体部内外面とも回転ナデ仕上げ。5は口縁部外傾、底部と体部との境に稜をつくり体部外面回転ナデ、内面ナデ仕上げ。8はやや低く、口縁部外傾し、体部内外面とも回転ナデ、底部はナデ(ヘラ)仕上げのものである。

甕15は小形のもので、底部は糸切りを粗くナデ仕上げしている。

甕17-3は口縁部がやや外反して開き、端部は丸くかつ少し薄くなり、内外面とも回転ナデ仕上げしている。体部内面の頸部以下はケズリ放しである。

3) 黒色土器 (18-7)

壊で、内面のみを焼したものである。底部はヘラ切りで、未調整である。

4) 鉄器 (19-13)

刀子の身で長さ10.3cm、劣化が進化して大きくねじれ曲り原形が確めにくい状況である。

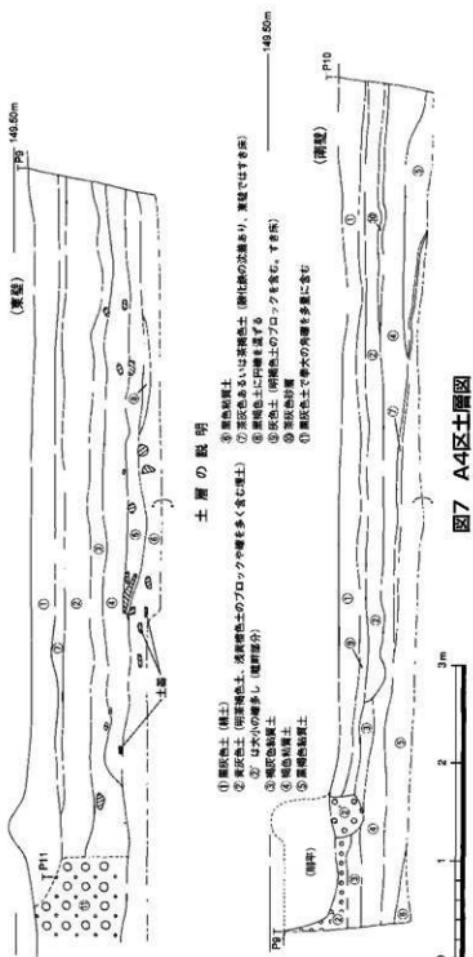
3. A4区の概要

A4区は、A調査区の北端の区で、東西約7.5m、南北約8.5mの区画である。A調査区ではこの区のみ配石遺構が検出され、多量の土器類や土馬その他の遺物が出土した。

(1) 土層について (図7)

区全体について、東壁で測って1.3mまで掘り下げた。東壁では、現耕土(水田)①の下には酸化鉄の沈着したすき床⑦があり、その下方には圃場整備のため埋め立てたと考えられる雑多な土や礫を多量に含む黄灰色土②がある。さらにその下には褐色系の粘質土③、④が重なっている。その下方標高148.20m付近には大小の礫を含む黒褐色粘質土⑤、黒色粘質土⑥がある。この高さは、遺構の上面にあたり、これらの礫群は遺構の周辺に散布する礫の一部と考えられる。③、④は、隣接するA3区のすき床を伴う旧耕土と同じ土質であり、これらも同様に旧耕土(水田)と考えるのが妥当であろう。

南壁は、東寄りに畦畔があり、それから西は一段低くなっていて、約0.8m掘り下げた現耕土(水田)①の下には灰色のすき床⑨があり、その下には埋め土②がある。この下方も



東壁とよく似た土層展開になるが、ただ西寄りに砂層⑩がみられることから埋め立て以前に水に洗われたことがあったことがわかる。狭い酸化鉄の沈着層⑦は⑤を切って斜行しておりすき床とは考えられない。同様の側は隣接のB1区でもみられ、ここでは全く不規律な線を描いて迷走していた。

以上のような観察から遺構はかつて耕土（水田）の直下に埋もれていたと推定される。したがって耕作の際に取り除かれた石もあったわけであり、後述するとおり遺構に攪乱の痕跡が認められるのはその証拠である。

(2)配石遺構について（図8・9）

風化した花崗岩の大小の角礫を敷き並べた配石遺構が、区の南半分に集中して6基確認された。遺構の構造は概ね次のとおりである。通観すると、これらの遺構は、標高148.30m～148.20mのほぼ同一平面上に分布しており、使用された角礫はほとんど頭大～拳大のもので、中に1、2個の大石が混じっており、それらを不整形な1.5m～0.6mの範囲に並べたものであるが中央部分や縁が空いたドーナツ形やC字形のものもある。遺物は礫の間や遺構周辺から出土した。

次に各遺構について観察する。1は、すでに石が散乱してしまっているが、中心はA2～B2ラインの中央やや東寄りにあたると考えられる。大石は少なくとも1個あったことがわかる。土器などの遺物も周辺に散乱して出土した。遺構全体が耕作の際に分解したものと思われる。

2は、1の西側に造られたもので、保存状態は比較的良好である。中央に空所があり、ドーナツ状に配石されている。大石は2個あり、北東縁と北西縁に置かれている。遺物は、土器が遺構周辺から散在的に出土した。また西側の石の下から土馬1体が出土した。

3は、1と2の中間の東側、A4区のほぼ中央にあり、東西約1.5m、南北約1mの範囲に角礫を密に並べたもので、保存状態は良好である。南北縁と北縁に大石があった。本遺跡で礫を総てはずして個数と置き方を調べたところ、大石を除く角礫は1、2層程度敷き並べられていて、何重にも積み重ねられた状態ではなかった。またその礫の個数は総数約80個で、このうち上層の並びの礫の下方にあったのは2、3個にすぎなかった。大石2個は深く埋め込まれていた。このような観察から、大石を除く角礫は基本的に1、2層に並べたうえで、その隙間を埋めるように、意図的に平均に積み重ねたものと推定される。（図9）断面図でみると、他の遺構も同様の意図で構築されたことがわかる。遺物は少なく、土器や土製支脚が出土した。

4は、3の西側にある東西約0.9m、南北約1.4mのものである。南西が大きく開くC字形に礫が並べられている。礫は比較的大きいものがそろっているが、特別に大きな石はない。

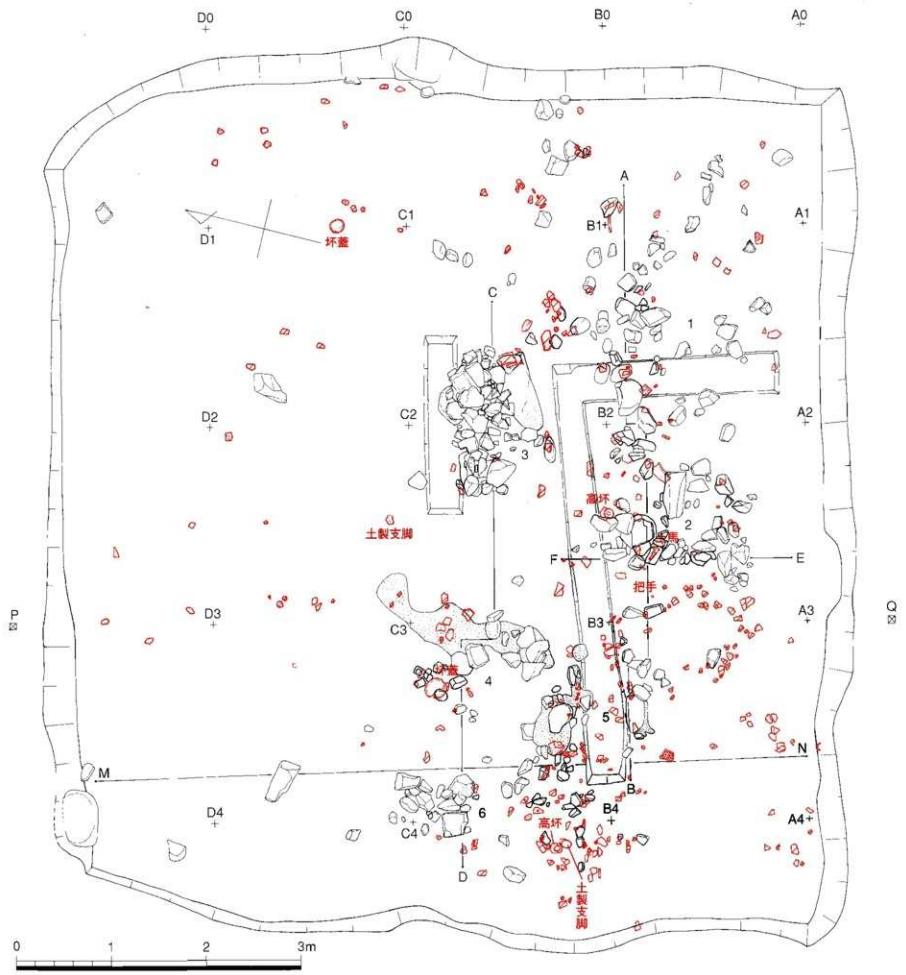


図8 A4区遺構図

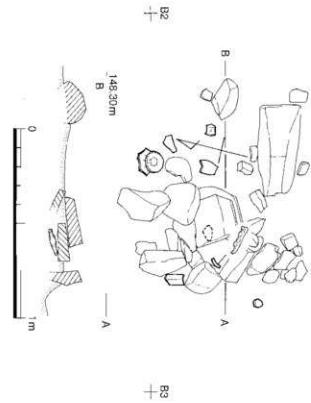


図9 土馬出土状況

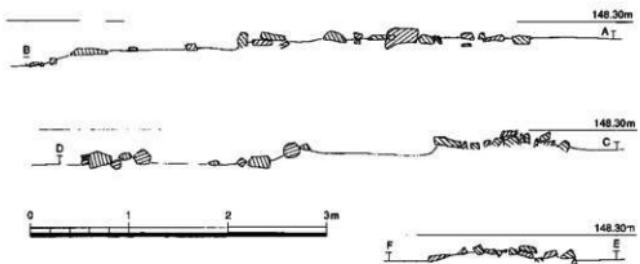


図10 A4区配石遺構断面図

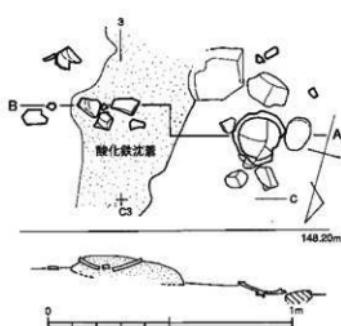


図11 酸化鉄の沈着状況

これらの礫の多くは酸化鉄の沈着層に包み込まれていた（図11）。礫の配置は粗く、原形とは認め難い。もとは一定のまとまった形に並べられていたと思われるが後世の耕作で多くの石が散逸したものと考えられる。周辺からは散在的ではあるがかなりの数の土器片が出土した。

5は、4の南にあり、東西約1.5m、南北1.2mの範囲に礫が配置されている。ここでも多くの礫が酸化鉄の沈着層に包含されていた。東側に大石が2個あり、西に開く構造であるが、西側の礫は小さくかつ散在的でまとまりがない。耕作

などで多くの石が取り除かれた跡と思われる。遺物は、遺構内側を中心にかなりの量の土器片や鐵鎌、土製支脚などが出土した。

6は、4の西にあり区の中で最も西に位置する。東西約0.7m、南北約0.6mの小さなもの

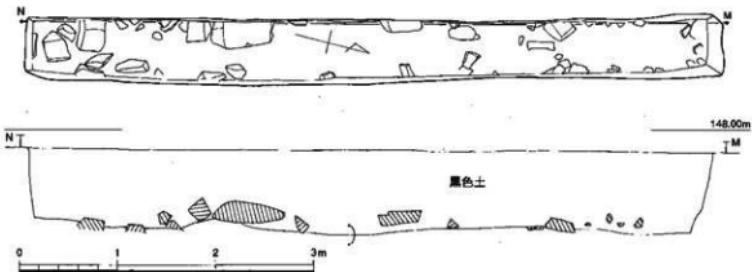


図12 A4区下部の状況

で、10数個の砾で造られている。南西隅に比較的大きな石が1個みられる。遺物も少なく、周辺から数個の土器片が出土しただけである。

これらの配石遺構より下部の状況については、遺構面から0.8mまで掘り下げて調査したが遺構は検出されなかった（大小の山石が出土）（図12）。

次にこれらの配石遺構の分布範囲について考えてみると、A4区の南半分にはほぼ限定するものと思われる。ただA4区外の東及び西側については存在の可能性は否定できない。

(3) 遺物について

A4区からは破片数にして約2700個の遺物が出土している。内訳は須恵器約200個、土師器約2450個、他に土馬、土製支脚、ふいごの羽口、鉄器、その他がある。

1) 須恵器（図13、14、15）

須恵器には壺、蓋、高壺、甕その他のがある。このうち壺、蓋、高壺については、その形態、調整手法などの特徴から次のように分類した。

① 壺

○壺A（13-3・4・5・6・7）

口縁のたちあがりがあるので、その高さは口縁端より高いもの、ほぼ同じものなどがあり時期的に区分できるが今一応一括しておく。口縁部の破片が多く底部の調整については不明であるが、完形の6でみるとヘラ切りの上を粗くナデ仕上げをしている。

○壺B-1（13-20・21・24）

底部をヘラ切りし、ナデ仕上げするもの。口縁部は内外面とも回転ナデ仕上げが多い。口縁は内湾気味で、端部が外反するものがある。

○壺B-2（13-25・27・29・30、14-19・21・26）

底部は糸切りで、粗くナデ仕上げをするもの。口縁部は内外面とも回転ナデ仕上げしているものが多い。口縁は内湾するもの、さらに端部が短く外反するもの、外傾するものなどがある。

○壺B-3（13-23・26・28、14-15・16・20・22・23・24・25・27・28・29・30・31）

B-2とほぼ同じ形態であるが、底部が糸切りのまま放置されているもの。

○壺C-1（14-6・7・8・10・11・18）

底部縁に外傾する高台をつけるが、口縁部と底部の境は丸くケズリ仕上げしている。底部は糸切りのあとを粗くナデ仕上げ、口縁部は内外面ともナデ仕上げしている。資料のすべてが先端部を欠くが口縁部は内湾するものが多く、外傾するものも若干あると思われる。

○壺C-2（14-12・13・14）

底部縁に短い高台をつけ、口縁部は底部から直線的にのびて外傾する。14は口縁部と高

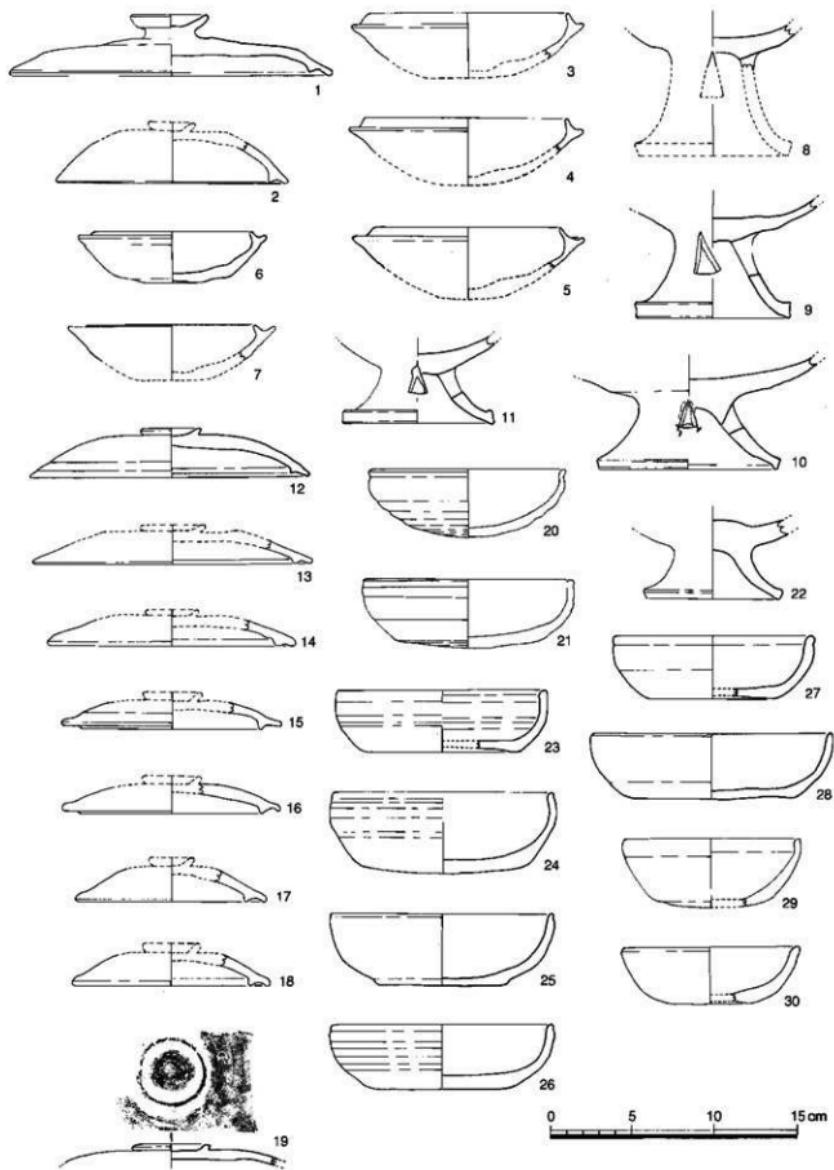


图13 A4区出土土器须惠器(1)

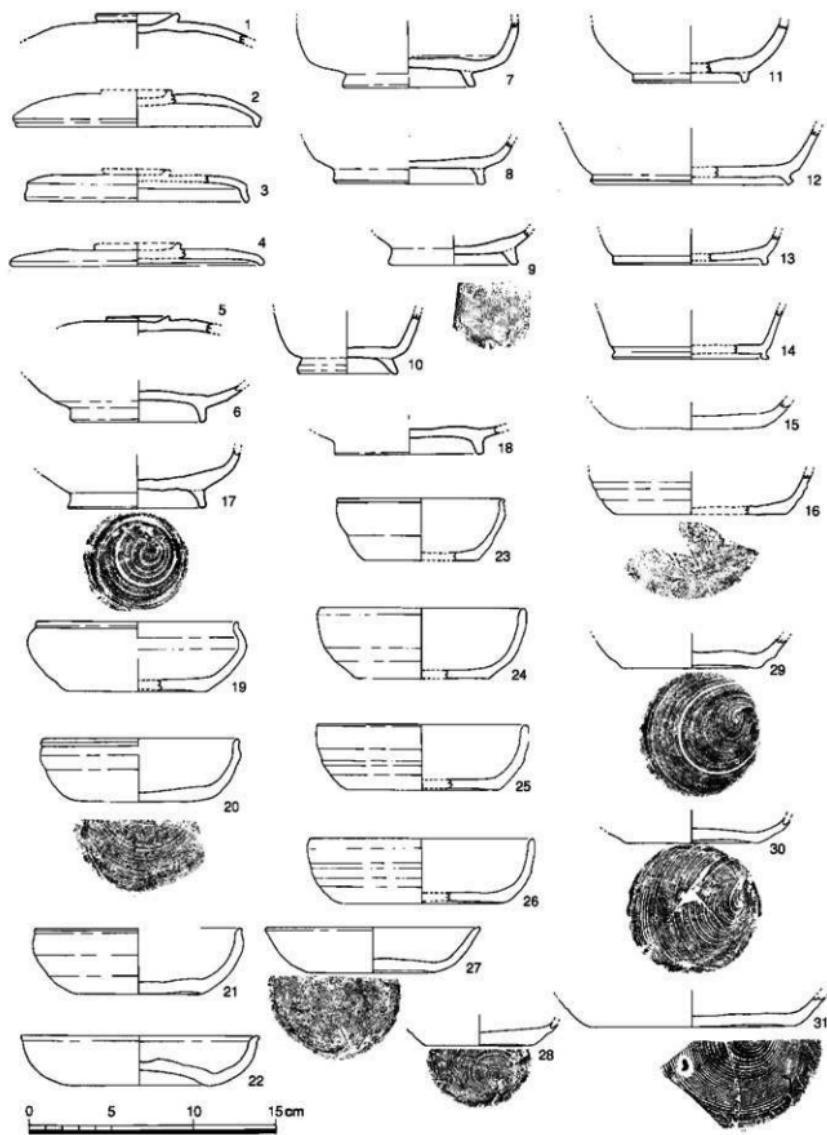


図14 A4区出土土器須恵器(2)

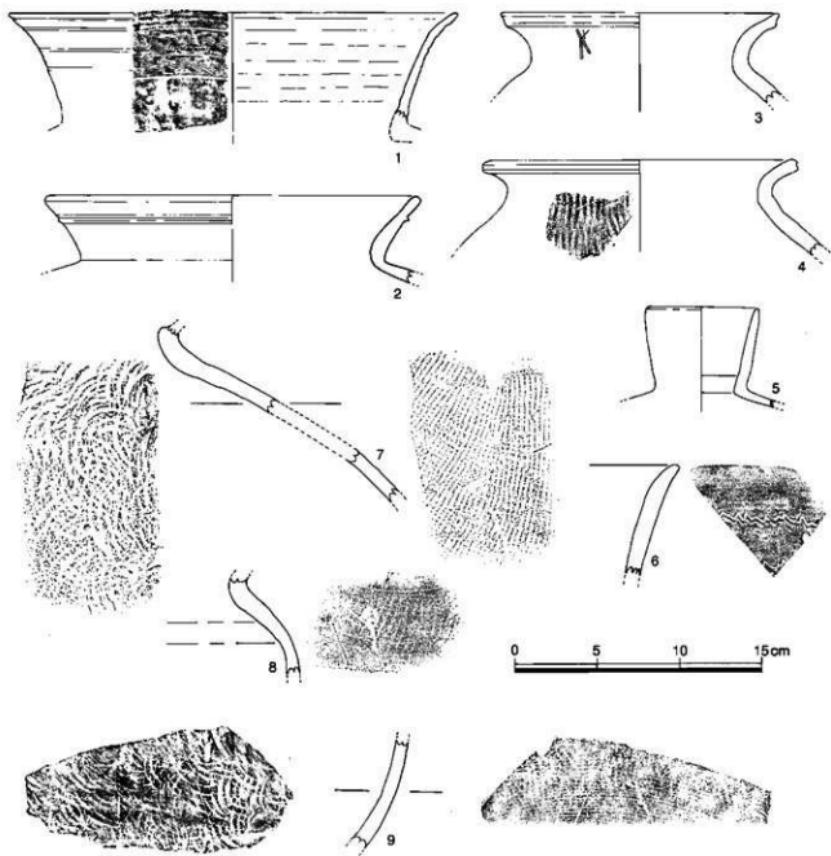


図15 A4区出土土器須恵器(3)

台が直結し境が不明瞭である。底部は糸切りを粗くナデ仕上げしている。口縁部は内外面ともナデ仕上げである。

○坏C-3 (14-9・17)

C-1とほぼ同形態であるが、底部が糸切りのまま放置されているもの。

②蓋

○蓋A (13-1・2)

器高が高く、かえりをもつ。頂部は広くけずり、粗くナデ仕上げして、環状のつまみを

つける。1は径19.5cmの大形で、しっかりした高い外傾する環状つまみがつく。

○蓋B (13-12・13・14・15・16・17・18・19)

高さはAに比して低く、かえりをもつ。頂部の平面狭く、粗くナデ仕上げし、扁平な環状つまみをつける。小型の16、17は擬宝珠つまみがつくかもしれない。19にはつまみの外の頂部平面に長さ8mmの三本角の图形がプリントされている。

○蓋C (14-1・2・3・4・5)

高さは低く、縁端部が短く屈曲または強く外傾する。頂部平面はケズリのあとを粗くナデるが、陥没したものもあり、そこに中が凹んだ低い環状つまみがつく。

③高坏

○高坏A (13-8)

脚基部、坏底部の破片であるが、透孔3方のものである。

○高坏B (13-9・10・11)

低脚で、粗雑な透孔2方のものである。

○高坏C (13-22)

低脚で、脚端も平面不明瞭、透孔がない簡便化の進んだものである。

○高坏D (18-15)

坏部口縁部と脚部の半分を欠くが、C4区の資料を参考にして復元すると図のとおりである。坏部は浅く、口縁端部が短く屈曲し、脚部は高くて大きく開き、端面はほぼ垂直になるものと思われる。これは土師質の須恵器で、浅黄橙色を呈する。

④壺 (15-1・2・3・4・6・7・8・9)

1は口径27cmで、器高は80cmを超える大形のものと推定される。凹線で区画した文様帶にはていねいな櫛描の波状文を入れる。3、4は口縁部が単純に外反し、端部に平面が設けられているが縁が丸くなっていてかなり簡便化の進んだものである。

⑤提瓶 (15-5)

体部は肩の張ったすんぐりした丸底で、肩に浮文を貼りつけるものであろう。

2) 土師器 (図16、17、18)

土師器には、坏、蓋、壺、壺、瓶などがある。このうち坏についてはその形態、調整手法の特徴から4種に区分した。土師器は破片の数は多いが細片が多く、特徴がつかめるものは少なかった。

①坏

○坏A (16-3・4・7・9)

赤色塗彩を施すが暗文はない。底部は糸切りのあとをナデ仕上げをしている。底部と口

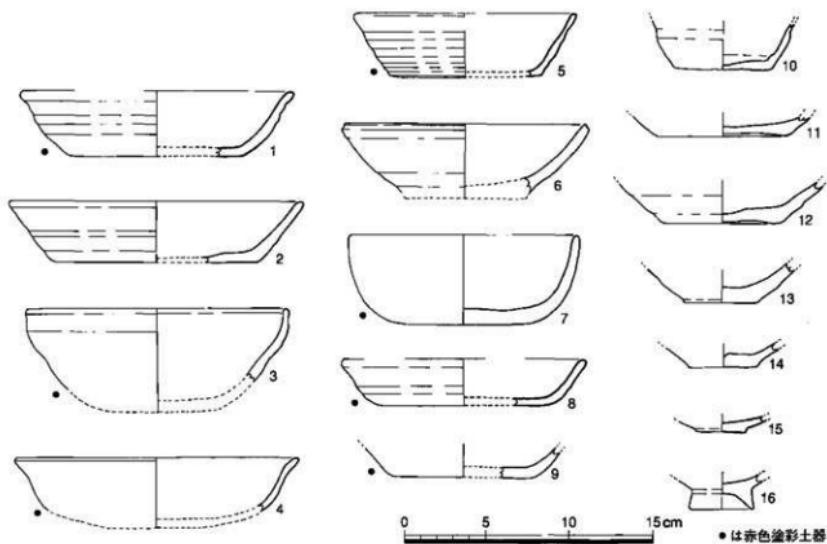


図16 A4区他出土土器土師器 (1)

縁部との境は丸味を帯びるものが多く口縁部は内湾して端部が小さく外反するものと外傾するものがある。

○坏B (16-2・6)

赤色塗彩を施さず暗文もない。底部は糸切りのあとをナデ仕上げしている。底部と口縁部の境が稜角をなし、口縁部は外傾する。

○坏C (16-10・11・12・13・14)

底径平均約11cmの小形のもので、赤色塗彩を施さず暗文もない。底部は糸切りを放置する。口縁部は外傾して大きく開くものが多い。14はいわゆるかわらけとして用いられたものであろう。

○坏D (16-16)

高台がつくものであるが、口縁部の形状は不明である。

②壺

○壺A (17-1・4・6・7・9・11・18・19・20・21・22・23・24・25・26)

口縁端を尖り気味あるいは丸くするもので、口縁部は外反あるいは外傾する。頸部以下の内面は強くけずられている。口縁部は内外面とも回転ナデ仕上げである。頸部以下の胴部にはハケ目を施したものもある。

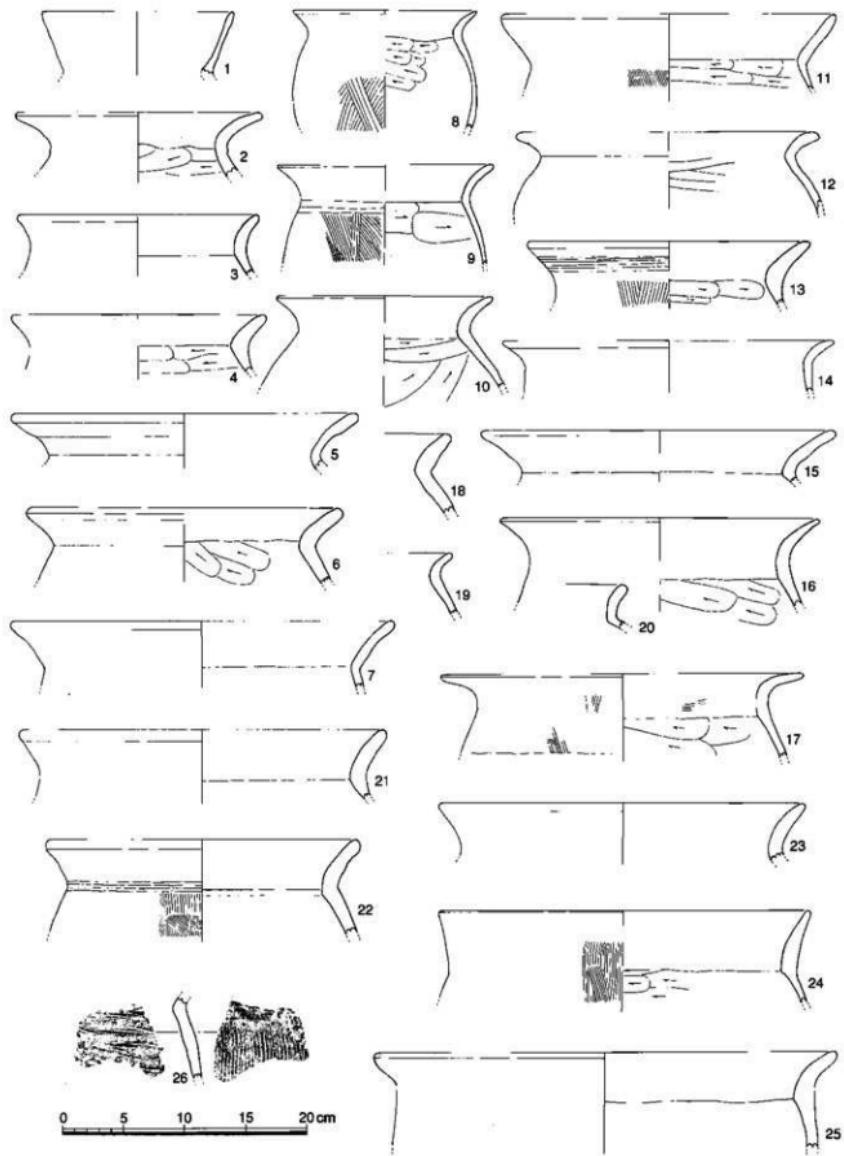


图17 A4区他出土土器土師器 (2)

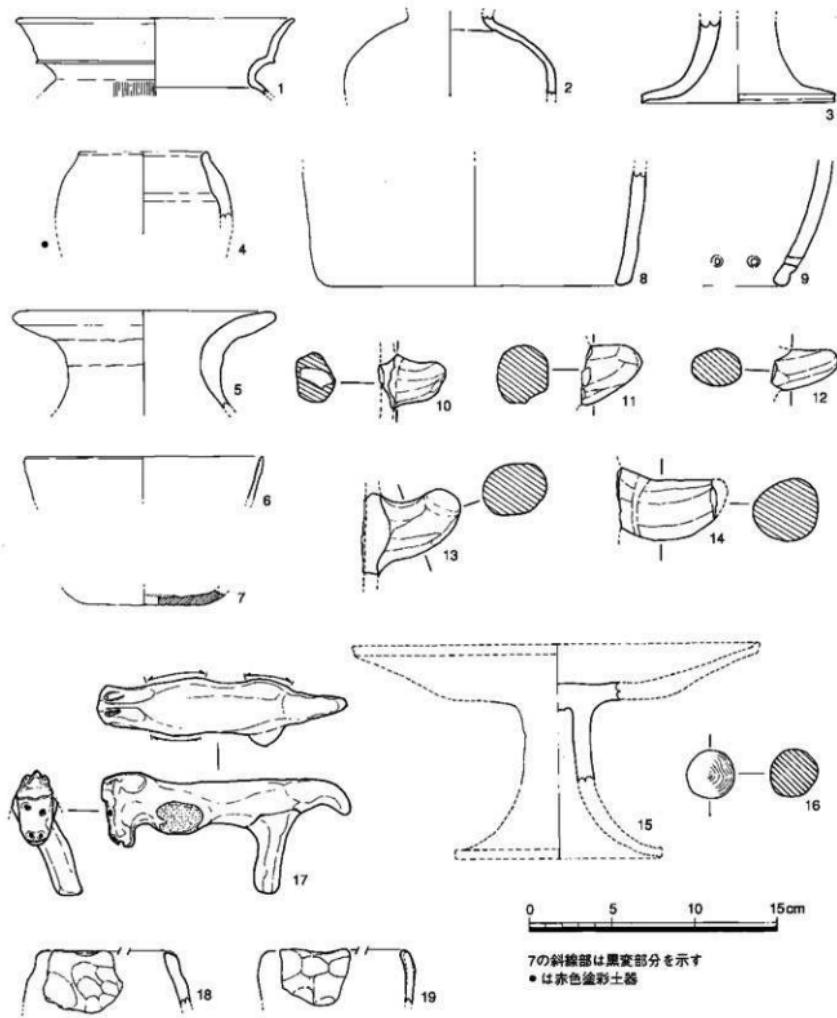


図18 A4区出土その他遺物（1）

○壺B（17-2・8・10・12・13・14・15・16・17）

口縁端部はA同様尖り気味や丸いものが多く、口縁部は強く外反して開く。A同様頸部以下の内面はけずり放し、口縁部は内外面とも回転ナデ仕上げをしている。

A、Bを通して口径は10cm～39cmである、最も頗度の多いのは30cm前後である。

なお複合口縁の壺（18-1）は、当遺跡出土の一般的なものとは型式が異なるものであり、他からもたらされたものと考えられる。

③壺（18-4・5）

4は短頸壺で、内外面ともに赤色塗彩がなされている。高さ11cm前後で、胴がふくらむ平底の小形の壺と考えられる。

5は口縁が大きく外反して開くもので、内外面ともナデ仕上げ、内面頸部以下はけずり放しである。高さ20cm前後の球形に近い胴部の小形壺であろう。

④瓶（18-8・9・10・11・12・13・14）

8、9は底部の破片で、9には穿孔があるが糞子をとめるためのものであろうか。10～14の把手は瓶に付属したものと考えられる。

3) 土製支脚（図19-6・7・8・9）

破片のみで、特に頸部の復元は困難であるが、概ね二又のものであろうと考えられる。

4) 祭祀関係遺物（図18）

土馬、手捏土器、土玉がある。

①土馬（18-17）（図9）

尾先端までの長さ15.0cm、高さ7.6cm、鞍などをつけない土師質の裸馬である。四肢を欠いて出土したが、後肢の1つが近くで発見された。顔面は目（やや上下にずれている）、鼻、口、耳（小さな孔を穿っている）をかなり適確に表現し、また筋肉の隆起についても配慮している。前肢を欠いていて姿勢が不明であるが、背はほぼ水平になるものと考えられ、尾も水平にのびて先端を垂れる。肛門などの表現はない。

出土状況について記すと、前述したとおり第2配石構造の南西部分の石の下方で、体を横にした状態で埋められていた。欠けた四肢のうちの1つが近くで出土したことから、四肢は埋納直前に埋納場所近くで折って捨てられ体部のみが埋められたものと推定される（他の3肢については発見できなかった）。

なお土馬と次に述べる手捏土器、土玉はセットで出土する例がある。

②手捏土器（18-18・19）

口径6cm～7cmのもので、底部を欠く。

③土玉（18-16）

直径2cmの球形のもので、穿孔などはない。

5) 製塙土器（図19-18・19）

薄手のつくりで深鉢様のものと考えられる。内面に細糸の布目の圧痕がある。^(註3)

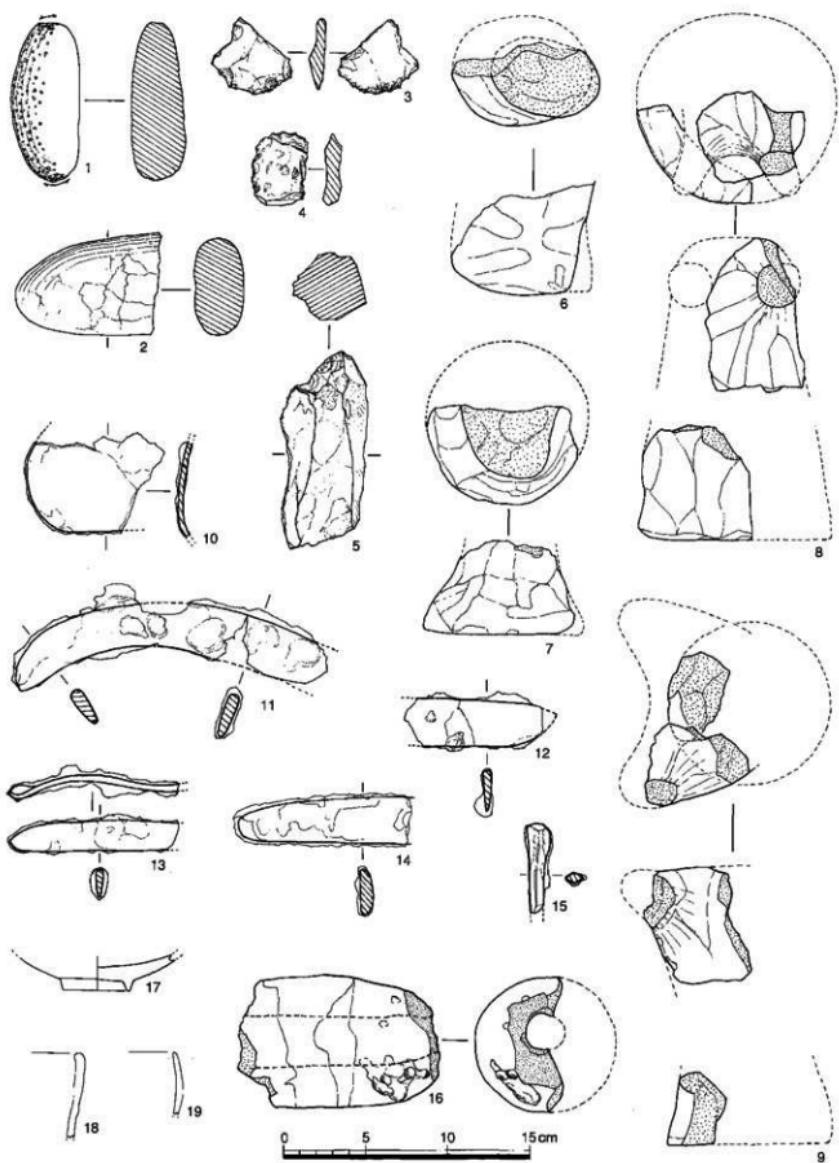


図19 A4区出土その他遺物（2）

6) 鉄器 (図19-10・11・12・14・15)

11は鉄鎌、12、14は刀子の類、15は鉄釘、10は薄い板状のものであるが使途、形状不明である。なおC4区では鉄鎌、鉄製紡錘具、刀子の類が出土している。

7) 羽口 (図19-16)

半分に割れているが保存状態は良い。鉄滓も出土しており、付近でたら製鉄がおこなわれていたことがわかる。時期については、当地方の多くのたら跡のそれから考えて中、近世である可能性が強い。なおB2区では野だたら跡が検出されたが、近世のものと推定されている。

8) その他 (図19-1・2・3・4・5・17)

1は花崗岩質の磨製のもので、両端に打痕があり、たたき石的用途に使用されたと思われる。時期については不明である。2は泥灰岩製のもので、ひび割れ状に亀裂が入っており、使途不明である。3は瑪瑙製の搔器（スクレイバー）である。4は良質の水晶片で、玉などの材料に用意されたものであろうか。5は柱状の石英片で使途不明である。17は糸切底径4.0cmの白色の陶磁の碗である。

4. まとめ

A調査区の調査の概要について述べたが、ここで若干のまとめをしてみたい。

(1)配石遺構について

この遺構の性格については、第2遺構で土馬が出土したこと、また手捏土器、土玉が発見されていることを注意したい。これらの遺物は祭祀関係の遺跡からセットで出土しており、このことからこの遺構群は祭祀に関わる遺跡であると判断される。この配石遺構群が祭祀遺跡とすると、その対象については至近距離にある前の舞の古井があげられる。前言したとおり三沢氏はこの泉の水を若水として汲んだと伝えられている。この泉は、この地方の神の社として古くから信仰されていた石壺神社に付属する聖泉として、水神の依る場所として丁重にあつかわれていたものと考えられる。これは土馬が水靈信仰に関わる遺物であるという通説に合致する。

(2)出土土器について

A4区出土の須恵器と土師器のうち壺、蓋、高壺などについては形態、調整手法の特徴などからいくつかに分類した。このうち須恵器については出雲国庁跡出土土器の形式区分を参考にしながら次のような区分を試みた。

1. 壺A、蓋A、高壺A、同B 2. 壺B-1、蓋B、高壺C

3. 壺B-2、同C-1、同C-2、蓋C 4. 壺B-3、同C-3、(蓋C)

土師器については、壺Aが3、壺Bが4に該当すると考えられるがなお検討を要する（前

旨したとおり土師器は細片が多く特徴が判明するものは少なかった)。

次に各区分について出雲国庁編年の須恵器形式区分を対応させると1は概ね第1形式に該当する。この区分の土器は木次町山方の簡便化が進んだ早稻田横穴などから出土しており、古墳時代終末期にあたることがわかる。土馬はこの区分の出土例が多いと思われる。つづいて2は第2形式、3は第3形式、4は第4形式に該当する。これを実年代についてみると、1は古墳時代終末期でおよそ7世紀(後半)、4はおよそ8世紀後半と考えられる。したがって出土した土器の時期はおよそ古墳時代終末期の7世紀から奈良時代と考えられ、配石構造もほぼこの時期に造成されたものと推定される。

(蓮岡法障)

註

1. 島根県教育委員会「徳見津遺跡・日廻遺跡・陽院寺遺跡」(1996年)、同「右台遺跡」(1986年)、同「大坪古墳群」(1976年)、鹿島町教育委員会「名分塚古墳遺跡」(1987年)
2. 才ノ岬遺跡(島根県教育委員会「才ノ岬遺跡」「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV」)(1983年))など
3. 近くでは森遺跡(飯石郡飯石町八神)で坏形土器が出土している。(島根県教育委員会「森遺跡」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書2」(平成6年))

島根県祭祀関係遺跡・遺物出土地一覧表

番号	遺跡・遺構名	所在地	道路・道傍の種類	時期	祭祀関係遺物	伴出遺物	文献
1	川角遺跡	安来市神谷町川角	不明	古墳時代後期	手握土器	須恵器(环) 土師器(蓋)	1
2	能枝遺跡	安来市能義町能義	堅穴住居跡	I区 茶生~古墳 II区 古墳時代後期	I区 手握土器 II区 手握土器	I区 磁土器,土器 II区 土器	2
3	上の台遺跡	能義郡太田町赤屋	不明	6世紀後半	手握土器	十輪器(蓋,坏) 須恵器(罐)	3
4	池ノ奥廻路群	松江市大井町904番地	土 墓	1.漢 6C後半~7C 2.漢 6C後半~8C	土馬,土鉢	須恵器,土師器 十輪文瓦,灰原	4
5	池ノ奥A遺跡	松江市大井町1286番地	土 墓	7C後半~8C	手握土器,土馬 十輪支脚模造品 須恵質土支脚	須恵器,土師器	5
6	鹿沢A遺跡	松江市大井町1118及び1124	堅穴住居跡 掘立柱建物跡	6C後半~7C前半	土馬,土師白玉 滑石,石製勾玉 めのう,勾玉	須恵器	6
7	別所遺跡	松江市朝鶴町555	不明	6C末~7C	土馬(13)	須恵器	7
8	イガラビ遺跡	松江市大井町931他	不明	7C中葉~8C初頭	土馬,ミニチュア土製支脚	須恵器,土師器 円鏡	8
9	堤通遺跡	松江市西川津町字堤通	堅穴住居跡	5C後半	滑石,玉 手握土器,メノウ白玉	須恵器,土師器	9
10	才ノ峯遺跡	松江市竹矢町110他		古墳時代後期 ~奈良時代	青衫玉,黑玉 木製品,零柱(火薙白)	須恵器,土師器	10
11	布出遺跡	松江市竹矢町	土壤・溝 旧河道	弥生時代中期 5C	土製模造品 石製模造品 (有孔円板),勾玉	弥生土器 土師器	11
12	矢田遺跡	松江市竹矢町	不明	5C後半	石製模造品(勾玉)	十輪器(高坏) 須恵器(高坏)	12
13	八重垣神社隣の池	松江市佐草町	池	飛鳥~奈良時代	土馬	須恵器(高坏,應 藍,青,蓋)	13
14	忌部中島遺跡	松江市東忌部町	玉作工房跡	5C中葉	石製模造品 (有孔円板,白玉)	土師器,勾玉, 曾玉未成品	14
15	原ノ後遺跡	松江市新庄町原	堤状の石積	古墳時代後期 ~奈良時代	手握土器	須恵器,土師器 十輪支脚	15
16	寺ノ脇遺跡	松江市手角町	不明	奈良時代	土馬	土師器(菱,瓶,罐) 須恵器	16
17	福音I遺跡	松江市乃木福音町	不明	古墳時代末期 ~奈良時代	土馬	須恵器(坏,高坏,菱) 円鏡	17
18	春日シヌン谷遺跡	八束郡東出雲町春日シヌン谷	掘立柱建物跡	6C後半~7C前半	手握土器,土玉 有孔土製品 円板状鉄製品	須恵器,土師器 土製文舞,施	18
19	半賀遺跡	八束郡東出雲町掛屋	不明	不明	絞繩車形土製模造品	不明	19
20	折原上堤東遺跡	八束郡八幡村西岩坂	堅穴住居跡		白玉,有孔円板	土御器(高坏,菱)	20
21	出雲玉作跡・宮ノ上地区	八束郡宍湯町玉造508他	土坑・構状遺構	古墳時代前期?	石製有孔円板 石製白玉	絞繩車形石製品 須恵器	21

22	出雲長作跡宮垣地区	八束郡三湯町玉造	玉作・石房跡	古墳時代中期	石製有孔円板 石製臼玉		22
23	美保神社境内遺跡	八束郡美保町美保岡	不 明	7C前半	土 馬	須恵器 土製支脚	23
24	上方林遺跡	仁多郡横田町下横田	木(石) 組	6C末~7C初頭	土 馬	須恵器、金銅製金具 布片・木片	24
25	カネツキ免遺跡	仁多郡仁多町都村	な し	奈良時代	木製人形	須恵器、土師器 壺物・陶瓶	25
26	大東高校グランド遺跡	大原郡大東町大東	不 明	古墳時代中期 ~奈良時代	石製有孔円板 手捏土器	土師器、須恵器	26
27	別所遺跡	大原郡大東町西阿用	不 明	不 明	土 馬	不 明	27
28	家の上遺跡	大原郡本次町平田	配石、水路、 石庭	奈良時代	土馬・手捏土器 壺・土玉	須恵器、土師器 土製支脚 鐵製訪輪車	28
29	飯石神社境内遺跡	飯石郡三刀屋町多久和	不 明	7C初頭	な し	須恵器	29
30	上組遺跡	出雲市下古志町	不 明	不 明	手捏土器		30
31	大船山遺跡	平田市多久町	不 明	古墳時代前期 ~後期		土師器	31
32	ひろげ遺跡	鏡川郡大社町日御崎	石組 土器盛り	6C時代後葉後半 ~奈良時代		壺生土器・七輪器 (赤影土器)・埴輪 壺・埴輪	32
33	大家八反田遺跡	大田市大代町大家	印 河 川 跡 溝 跡 、 石 犁 渠 、 土 器 潢		石製勾玉有孔円板 土製勾玉 手捏土器	土師質土器 陶磁器	33
34	島井南遺跡	大田市島井町	住居跡、石塀 石列	古墳時代	手捏土器、壺五 土製埴生品 (人形、武 器、武具類)、板瓦	須恵器・土師器	34
35	弥ヶ迫遺跡	邑智郡石見町矢上	不 明	6C~7C後半	手捏土器	土師器	34
36	落子遺跡	邑智郡石見町矢上	石組 ?	5C	石製有孔円板 土製勾玉 手捏土器	土師器(环、高坏)	36
37	風呂ヶ谷遺跡	邑智郡石見町中野	不 明	5C	手捏土器	土師器	35
38	伊吉神社脇遺跡	浜田市下府町	土 壤	古墳時代中期	手捏土器	土師器(壺、高坏、 壺部に穿孔した壺底)	36
39	大将軍遺跡	隱岐郡西郷町下西	不 明	不 明	石製有孔円板	不 明	37
40	仮殿遺跡	隱岐郡五箇村久見仮殿	不 明	古墳時代後期	動物形土製品	須恵器・土師器	38
41	兵庫遺跡	隱岐郡西ノ島町美田	溝、右の堆積 土器盛り、土坑 型 六 住 居	6C後半~7C前半	手捏土器・土瓦 土製白玉	土 瓦 壺・須 恵 器 (鏡、刀子、削盤) 動物埴生体・美化物	39
42	比志利岩	隱岐郡西ノ島町珍崎	不 明	5C	勾 玉	陶質土器	40

本表は島根県埋蔵文化財調査センター 松本岩雄氏の調査による島根県における祭祀関係の遺跡と遺物資料に近年の祭祀関係遺跡の調査報告例を加え表としたものである。詳しくは、第2回東日本埋蔵文化財研究会「古墳時代の祭祀・祭祀関係の遺跡と遺物」(1993年)を参照されたい。

文 献

1. 近藤正「山陰」「神道考古学講座」第2巻 1972年
2. 内田戈「原始・古代」「安来市誌」1970年
3. 東森市良「古代から中世へ」「伯太町史」1962年
4. 昌子寛光「池ノ奥廻跡群」「松江東工業団地内発掘調査報告書」第II巻 松江市教育委員会 1990年
5. 稲田獎「池ノ奥A遺跡」「松江東工業団地内発掘調査報告書」第II巻 松江市教育委員会 1990年
6. 鎌織慶樹・今岡一三「鷹沢A遺跡」「中国電力・北松江変電所造成予定地内発掘調査報告書」松江市教育委員会 1988年
7. 萩雅人「別所遺跡」「中国電力・北松江変電所造成予定地内発掘調査報告書」松江市教育委員会 1988年
8. 岡崎雄二郎「イガラビ遺跡」「松江東工業団地内発掘調査報告書」第I巻 松江市教育委員会 1990年
9. 岡崎雄二郎ほか「堤廻遺跡」松江市教育委員会 1986年
10. 広江耕史「戈ノ幹遺跡」「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」島根県教育委員会 1983年
11. 足立克己ほか「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」島根県教育委員会1983年
八幡賀一・萩雅人「一般国道9号線松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」島根県教育委員会 1991年
12. 松江考古学談話会「山陰地方における古墳時代の祭祀遺跡一覧表」「松江考古」第2号 1979年(文責松本岩雄)
13. 大場磐雄「祭祀遺跡」角川書店 1970年
14. 寺村光晴「古代玉作の研究」日本考古学協会大会研究発表要旨 1964年
15. 内田律雄「原ノ後遺跡出土の小形手握土器」「松江考古」第4号 松江考古学談話会 1981年
16. 近藤正「寺の脇遺跡」島根県文化財愛護協会 1969年
17. 「福富遺跡・尾形1号墳」「一般国道9号(松江道路西地区)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2」島根県教育委員会 1997年
18. 三宅博士「春日シマン谷遺跡」「北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」島根県教育委員会 1987年
19. 山本清「原始」「新修島根県史」通史篇 1968年
20. 川上昭一「折原上堤東遺跡発掘調査報告書」八雲村教育委員会 1994年
21. 勝部衛「史跡出雲卡作跡一宮の上地区一」「玉湯町教育委員会 1984年
22. 山本清・寺村光晴・近藤正「史跡出雲卡作跡発掘調査概報」「玉湯町教育委員会 1972年
23. 松本岩雄「美保関町の考古資料」「美保関町誌」下巻 1986年
24. 杉原清・横田・上方林遺跡」「島根県埋蔵文化財調査報告書」第XIII集 1986年
25. 蓬岡法暉・西尾克己「仁多・カネツキ免遺跡」「島根県埋蔵文化財調査報告書」第XI集 1985年
26. 東森市良「大東高校グランド遺跡」「日本考古学年報」26 1975年
27. 文化庁文化財保護部「全国遺跡地図」32 島根県
28. 坂本・蓬岡(家の上遺跡)…本書に所収…

29. 前島己基「出雲における石信仰」「季刊文化財」第37号 島根県文化財愛護協会 1980年
30. 松江考古学談話会「山陰地方における古墳時代の祭祀遺跡一覧」「松江考古」第2号 1979年
31. 大国晴雄・西尾克己「備後郡の神奈権とその祭祀」「山陰史談」15号 山陰歴史研究会 1979年
32. 杉原清一「ひろげ遺跡」「主要地方道大社日御崎線中山工区特別帳單(改良)工事に係わる発掘調査報告書」大社町教育委員会 1997年
33. 速藤浩巳「大家八反田遺跡の概要」島根考古学会例会紙 大田市教育委員会 1996年
34. 中田健一「島根県大田市島井南遺跡の祭祀遺構」「祭祀考古」第9号 祭祀考古学会 1997年
35. 吉川正「石見町・弥ヶ迫遺跡」「島根県埋蔵文化財調査報告書」第Ⅳ集 1981年
36. 前島己基「石見における祭祀遺跡の新例」「季刊文化財」第23号 島根県文化財愛護協会1974年
37. 石見町教育委員会「石見町の遺跡」 1983年
38. 勝部昭・石井悠「石見國府跡推定地調査報告」 島根県教育委員会1979年
39. 勝部昭「隱岐島の祭祀遺跡」「松江考古」第2号 松江考古学談話会1979年
40. 亀井正道・近藤正「穩地五箇村久美の考古学調査」「国学院大学日本文化研究所紀要」 1966年
41. 勝部昭・西尾克己「西ノ島・兵庫遺跡」「島根県埋蔵文化財調査報告書」第IX集 1982年
　　袖原恒平他「兵庫遺跡」 島根県西ノ島町教育委員会 1996年
42. 勝部昭「隱岐島の祭祀遺跡」「松江考古」第2号 松江考古学談話会 1979年

第3節 B区の調査概要

1. 地形と土層 (図2・20)

この調査区は張り出す尾根先の裾部で、ほぼ東西方向一列にトレンチを設けた。図のように民家のあるあたりが最も高所で西方へ緩斜して降る。さらにその延長は河岸を下り斐伊川本流に至る。B1トレンチは水田部分でA4トレンチに隣接するが他のトレンチは畠地部分である。

各トレンチの土層断面を継続して通観すると、地表の傾斜は台地上約65mで約3.6m下る -3° の勾配であるが、河岸部約25m間では約8m下り -18° である。土層は台地上では黒褐色の表土層が厚さ40~50cm被っていて、その下は粒度の揃った中~粗粒の河成砂質土であり、河岸段丘にある。河岸部は浸蝕により地山の砂質土が露出し川疊も含む。

台地上の表層土は腐植に富み砂を含む壤土で、深いほど粘性が強く黒色に近い。これはクロボク質の表土上へ後背丘陵斜面の同様な表土が年月をかけて雨水等により流下堆積したものであろう。B1区はこの表土層の上面に水田が拓かれたところで水田の滲透水により水田下層土が漸次分化し酸化鉄の集積層ができている。⁽²²⁾しかし本質的な土性の相違はなく、地山は粘質のクロボク土でやや深く川疊を包含している。

採取した遺物は表1のようにB5において最も多くB1において認められたが、いずれも黒褐色表層土中である。

2. B1区の概況と遺物

(1) 概況

B1区は上記のように厚いクロボク土をベースに地表の水田面に至るまで腐植に富む本来同質の土であり、陰地にみられる厚い自然堆積土である。土層の間等に遺構や人工面は認められなかった。しかし厚い表土層には若干の遺物を含有していた。

採取した遺物は土師器片が主で須恵器片や鉄滓も若干あった。これらは面をなすものではなく、表土堆積の途次に混入したものとみられる。約20m²の発掘面から合計46点の採取である。

(2) 遺物 (図21)

1は須恵器の坏身で底部を欠くが、受け部の立上りは高く器径15.5cmである。2は須恵器坏の底部で内外面ナデ、底はほとんど水平に回転糸切り。底面縁部には部分的に引摺状短線痕がある。底径9.7cm。3は踏張りのやや強い須恵器の高台付底部片で内外面及び高台裏も念入りにナデしている。坏形は大振りで高台径は8.1cmである。1は山本編年Ⅲ期に、2は陶邑のTK7に、3はMT21とそれぞれ並行であろう。

4は土師器甕形土器の口縁部でやや厚手造りである。強く屈曲して大きく外反し上面は

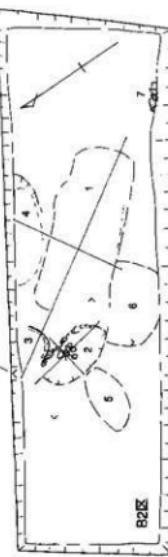
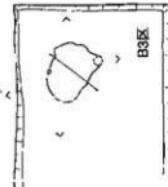
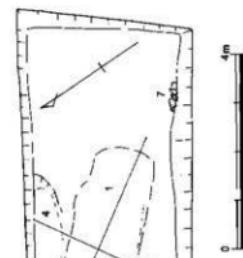
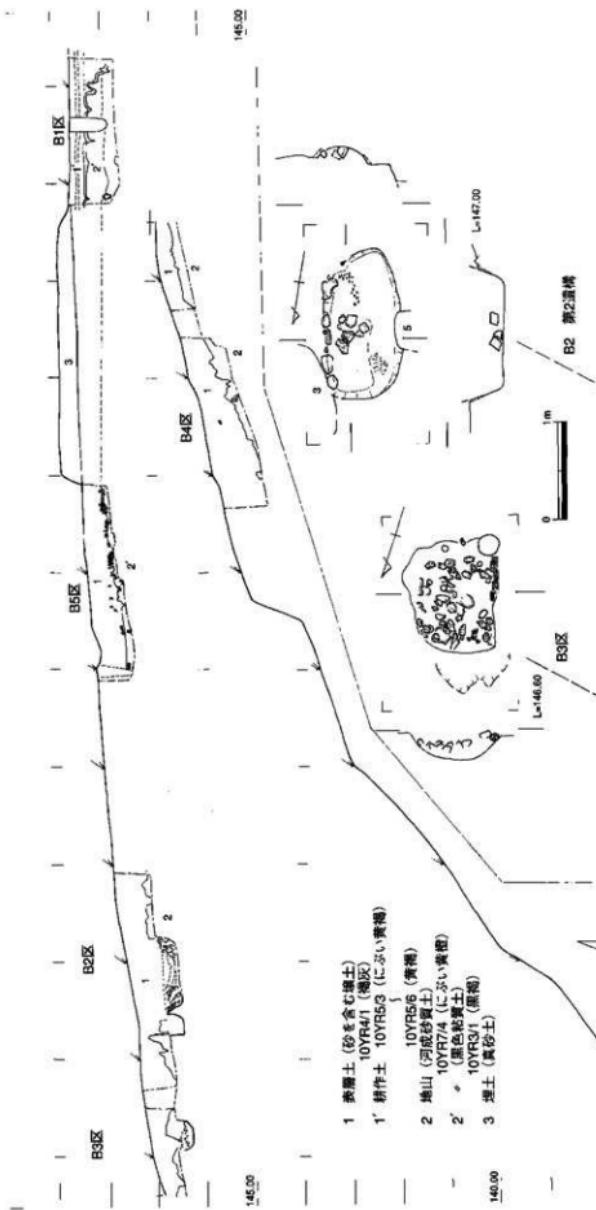


図20 B区土質図及びB2区第2造溝・B3区造溝



水平に近いほどで、口唇は丸く収める。外面には煤が付着している。5は土師器の高台部分で壺であろう。壺内面はベンガラ様赤塗りの痕跡がみられる。高台裏は入念にナデている。また胎土に金雲母や輝石・長石が多く含まれており、当地に普通に見られる土師器のそれとは異なるものである。他からの移入品であろうが産地は不詳である。

6は七製支脚の脚端部で底面は直径13cm程とみられる。この底面には1.5~2mm幅の枝條と思われる圧痕が認められる。

これらの時代観は明瞭ではないが、4はその形状から9世紀代、5はそれよりやや古く推察される。6は不明。

3. B5区の概況と遺物

(1) 概況

B5区は民家宅地の直前で高レベル地点である。トレンチは10×3m深さ約1mでクロボク質下層土と砂を含む黒褐色上層土の単純2層であり、上面が畑耕作されている。此所では土器片等の遺物が最も多く約300点を採取した。そしてその殆どが緩く西に下る表層土下面に集中散布するもので、遺構等は全く認められなかった。この集中散布状況は、極く近い位置から一時に掻き出して土盛りを行った様相と推察された。

(2) 遺物（図21参照）

採取した遺物の大部分は土師器片であり、近世～近代の陶磁片はすべて上面の畑耕土中からであった。

8は花崗岩質略長方体の磨石で、4面とも擦痕や叩痕があり両小口端にも敲打痕がある。重量650g。

9は長さ10.5cm、重さ141g 玄武岩質の石斧で両面打製である。刃先中央に使用時の欠けがあり、使用的擦過痕が明瞭で土掘り具とみられる。この石器2点は縄文後晩期ごろであろうか。

10はやや厚手の縄文土器片で外面に煤の付着がみられ、壺形土器の胴片と思われる。全面太めのR縄文地で横に擦痕がある。縄文晩期にかかるころであろう。

11は須恵器の底部で壺又は盤であろう。短かく外反りの高台で砂摩り面に凹線を巡らせる。高台裏はナデている。MT21並行。

12～15は土師器で壺の口縁部分である。いずれも口縁が強く外反するが12はや立ち気味、口端はすべて丸く収めている。時期は特定し難いが律令期ごろとみている。

このほか流動性を示し製錬滓（たらざ）とみられるもの5点、不定形錫塊状で精錬滓（鍛冶滓）とみられるもの8点を採取した。

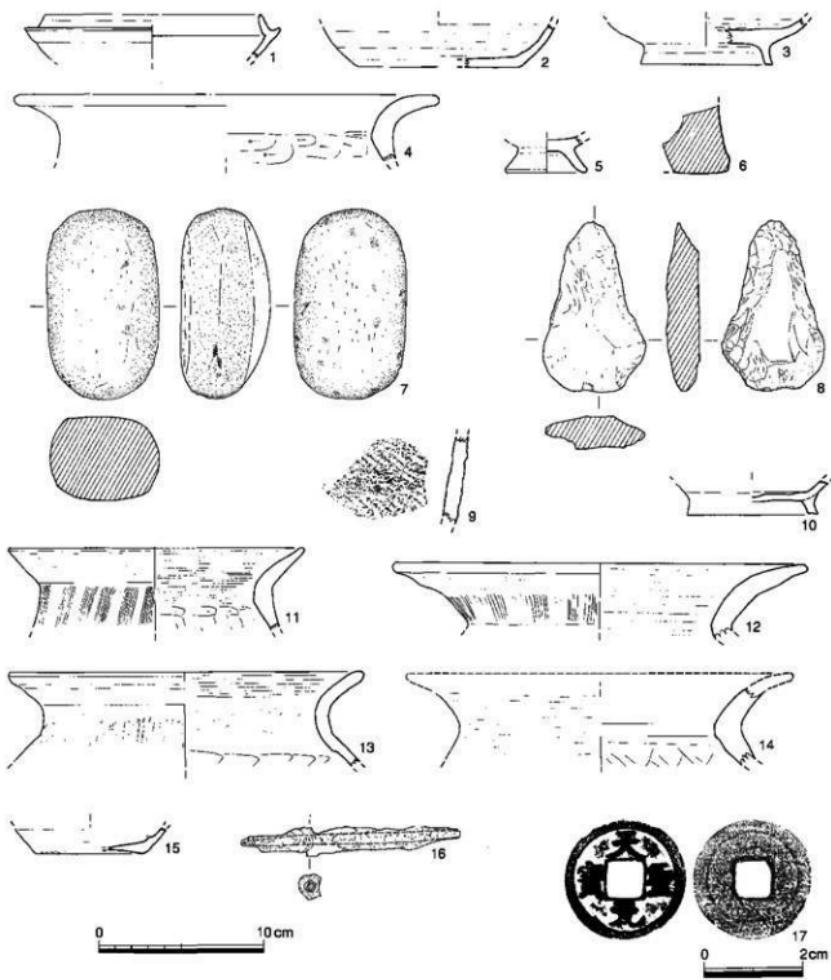


図21 B区出土遺物

4. B2～B4区の造構と遺物（図20・21）

(1)概況

B2区とそれに接するB3区東端付近では砂質地山面に多くの落込みがあり、製鉄炉床そ

の他の遺構（1～7遺構）が認められた。以西の区では土層序は同じであるがすべて自然であり遺構等は認められなかった。検出した遺物は極めて少なくいずれも上層の黒褐色土中である。

1) B2区第1遺構（図22）

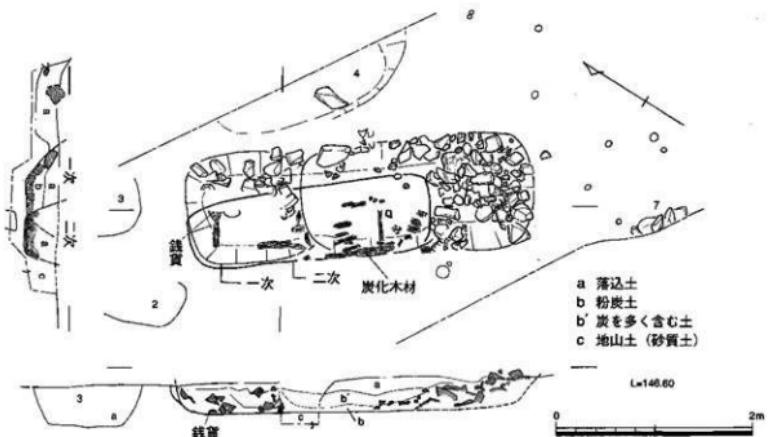
地表下50～60cmの砂質地山面に3.5×1.2m略長方形に濃い炭灰土の落ち込むところである。これは横断によって第1次と第2次の重複したたら炉床下部であることが判った。

第1次遺構：第2次構造によって半分は失われているが、復元的に製作工程に従って記す。

主軸をN33°Wとし長さ3.5m、幅1.2～1.0mで、中央部分1.4mほどは幅をやや狭く、深さ50cmほど舟底形に掘り込み山礫を隙間のあるように投入し、中央1.5m区間は中窪みにする。次に炭灰の多い焼土を詰めて中央区間がたら炉の直下となる。現況ではこれから上方は失われて不明であるが約20cm上方が操業面となるであろう。このように炉体直下にあたる本床状部分と両端各1.0～1.1m区間の湯溜り部のみで小舟状構造はつくられていない。

第2次遺構：上記の1次構造の大半を再び掘り上げ、重複してひと回り小さい2次構造がつくられている。これは1次構造の西端南辺に沿わせ、2.5m×0.75m隅丸方形で堀り底は1次構造のそれと同レベルとし、底面を平坦にしている。堀り方底の中央と東西各85～90cmの間隔で直径約10cm長さ50cmほどの小径木を横断方向に置き、これを枕に同様の松小径木を長さ2.4mの底全面と長辺側壁下部まで敷き詰める。この敷木の上に炭灰土を充填する。なお敷木材は操業の熱により大部分は焼損していた。またこの構造は本床部分と湯溜り部の区分は下底部では判別できなかった。

なお、この敷木の下に堀り方面に接して宋銭1枚が出土した。たら爐構に伴う遺物は



この錢貨1枚のみであり、当然あるべき鉄滓等はほら残っていなかった。

2) B2区第2遺構（図20）

ほぼ南北方向を長軸とする $1.5 \times 0.7\text{m}$ で、やや不整形隅丸長方形断面のやや丸底で深さ35~40cmの堀り方に、壁内に縁石を並べ、坑底には大きめの山礫をひとまとめに入れている。坑壁面は酸化的熱変色し小炭片まじりの炭灰土で埋まり、上方は土砂の多い灰色土となって削平されている。これは第1遺構の築造時に上面が削平されたことによるものであろう。

伴う遺物はほらも見当らないが、その様相は鍛冶炉跡に類似する。^(注4)一見すると近世の麻蒸し炉の構造にも通ずるものもある。^(注5)

3) B2区第3~第7遺構（図20）

第3遺構はたたら炉床の東端あたりに第2遺構とほほ接してみられる落ち込みでやや深く、平面プランは調査区外へ続くため不明。壁面はやや熱変色し炭灰を含む暗灰色土が詰っている。第4遺構も同様に全容は不明であるが、壁面に沿って炭灰が厚く認められる。第5・6遺構もほほ同様で炭灰質土が落ち込むものである。

これら第3~6遺構も伴う遺物は全く無くその上面はたたら築造時に削り取られたもので、先行する遺構であるがその性格は明らかにできなかった。

第7遺構は第1遺構（たたら跡）の南側にありトレンチ壁面に山礫群の一部がみられるものである。これだけで様相を窺うことは無理であるが、直近のたたら遺構（第1次）に類似している。

4) B3区遺構（図20）

上記の西に隣接して落ち込み遺構がある。ほぼ南北に長い $2.2 \times 1.2\text{m}$ 略長方形で堀り方壁面は熱変色し2区第2遺構に類似するが、下底に敷木がみられる点で異なり、手法は2区たたら跡第2次と共通する。しかしこの遺構の同時性や性格は明確でない。

5. 採取鉄滓について

鉄滓はA調査区において最も多く採取されたがB調査区でもわずかに検出した。このうちB区からは2点を供試し金属学的検討がなされた。いずれもB1区で水田下の上層土中から採取したものである。いずれも拳大の小塊で鏽土が固着しており表面は赤味を帯びる。

6. 小結

B調査区はすべてトレンチ調査であり、B5やB2~3区での遺物散布面や遺構の全容を把握するには至っていない。ここには次の点について指摘するに止める。

1) 山裾部であるが地山はすべて河成砂質土で、高位置ではその上にクロボク土の堆積がある。この上の表土層は山腹～裾部の堆積土が流下移動して堆積したものである。B5区

の場合は近い山手（宅地あたり）から掘き出ししその上に盛土した様相と思われる。

- 2) B2区第1遺構のたたら遺構は1次・2次とも操業面は削り取られて下部のみ残存していた。このため構築のすべてが判明したとは言えないが、いずれも小舟を有しない当地の所謂野だたら様式である。また2次炉床の敷木技法は野だたら炉床としては初例であろう。^(B6) 第2次たたら炉床には北宋初鑄の「天聖元寶」が伴出しているが、出土銭は模鋳銭でその通用は中世のみならず近世も「寛永通寶」に混って小数ながら見られることから、これによつて炉床年代を特定することは出来ない。
- 3) 第2次構造に用いた木材（マツ）の炭化片3点について¹⁴C年代の測定結果は、付編収録のようにAD1643～1657年の値を得た。しかし炉床の様式は近世高殿様式ではなく、「野だたら」で明らかに中世様式である。因みにこの測定年代は天秤吹子の始まりとされる元^(B7) 榆期の直前にあたる。このように近世初期のたたら遺構とされる事例は隣接する仁多郡においてみられ、隠地第2・3号炉、下大仙子^(B8) 遺跡などが挙げられる。
- 4) たたら遺構築造時に削平されたため第2～第6遺構の時期や性格は明らかでないが、第2遺構は鍛冶炉床の可能性が高い。
- 5) B1区表層採取の鉄滓は鍛冶滓と判定されたが、その鍛冶跡はこの試掘範囲には検出していない。
- 6) B5区に集中出土した土器片は、その大部分が8世紀を中心とする時期であり、この地点に近いA4区との関連が思われる。

(杉原清一)

註

1. 岩田遼年『土を科学する』NHKテキスト 1989年
2. 日本化学会『土の化学』学会出版センター 1989年
3. 中村浩『須恵器』ニューサイエンス 昭和57年
田辺昭二『陶邑古窯址群』平安学園考古クラブ 1966年
4. 渡見浩『保光たたら』保光たたら調査団 1985年
5. 学術調査事例は寡聞にして知らないが、土坑内にて石を焼きその上に灑らした縊で覆つて蒸気を発生させ、これによって苧麻を蒸す。当地に通有の方法があった。
6. 河瀬正利『たたら吹き製鉄の技術と構造の考古学的研究』淡水社 1995年
7. 坂詰秀・『山土波來銭』ニューサイエンス 昭和61年
8. 「鐵山日記」「杠日記」などの古記録による。「仁多郡誌」もこれを援用す。
9. 広島大学考古学研究室『中国地方製鉄遺跡の研究』1993年所載 等

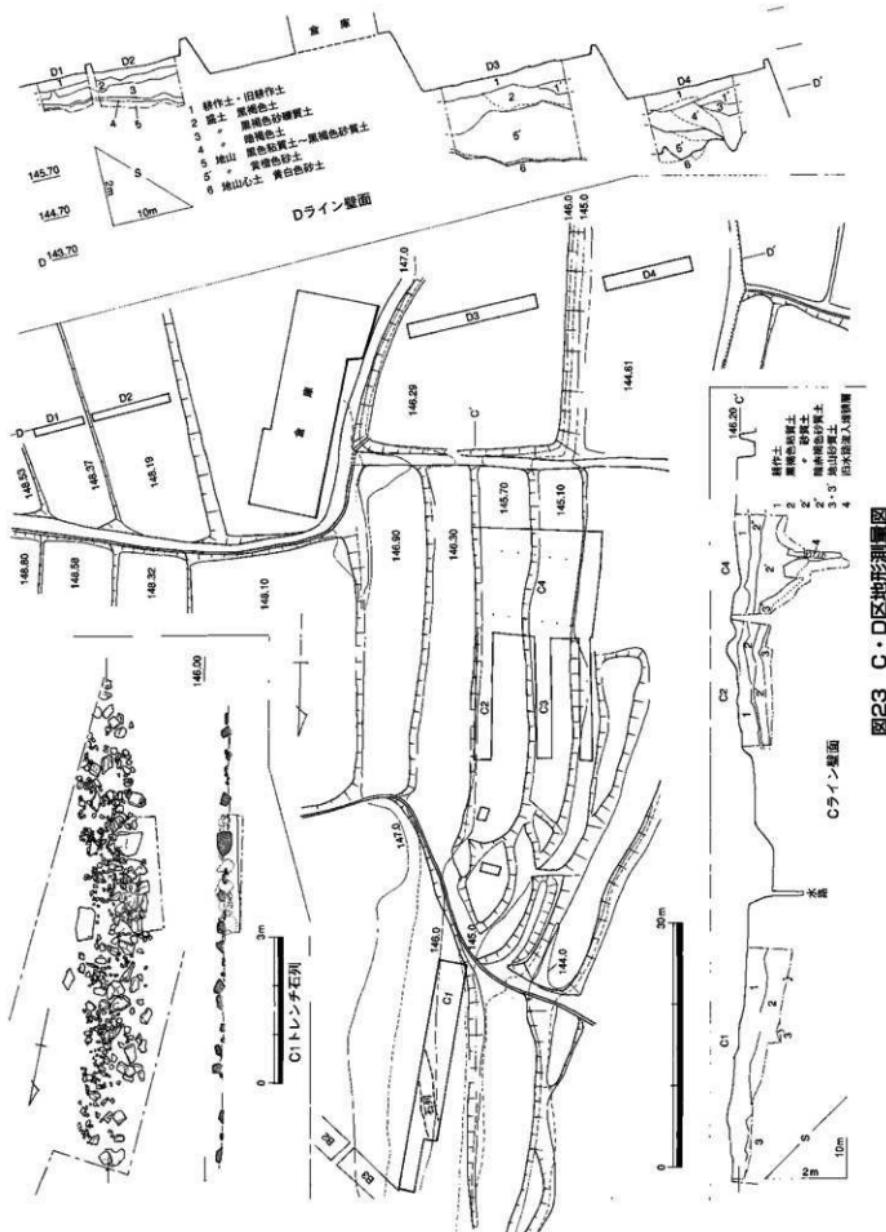


図23 C・D区地形測量図

第4節 C区の調査概要

1. C1区

(1)層序・遺構（図23）

C1区はB4区に隣接する斐伊川沿いの河岸段丘上に位置している。畠地を川に沿って南北に細長くのびた調査区である。標高は約146.0mで斐伊川との比高差は約9.0mである。表土（耕作土）は黒褐色の微細砂質土でおおわれ、B4区寄りはその下層は褐色の砂質土で地山となっている。しかし、南方（斐伊川）に下るほど地山面も降下し、耕作土との間に砂粒、角礫を含む黒褐色粘質土が堆積していた。

この粘質土が堆積を始める地点、耕作土下70cmより幅1.3m、検出時の長さ10mの南北に連なる石列を検出した。この石列はこぶし大から60cm大の花崗岩で不整形に列をなし、石のすき間には陶磁器片がはさまった状態で出土した。この石列は斐伊川に並行して置かれていることから護岸用の石垣の可能性も窺えるが石列の両端は工事計画から今後の調査が可能と判断し、調査区の拡大は行なわず石列下方の地山を確認してC1区の調査を終了した。

(2)遺物（図24）

C1区では黒褐色土層から土師器の壺片、陶磁器片などがわずかに出土した。このうち主な遺物を記す。

1は白磁の染付皿である。淡い緋の二重線に紺の菊花紋が描かれる。色調は灰白色で有田焼と思われる。2は外面が暗赤褐色の鉄釉で酸化鉛焼成された磁器の碗である。1と同様石列中より出土している。内面は貫入の

入った明緑灰色の半透明な釉が施され、内面底部には日跡が一点残る。釉の状態から17世紀ごろのものと思われる。3は内外面とも灰オリーブ色の中国産青磁碗である。外面には蓮弁文の下端が認められる。15~16世紀ごろと思われる。4は土師器壺の口縁で内外面とも丁寧なナデが施される。

2. C2区

(1)層序・遺物（図23・25）

C2区はC1区の南側、湿地部とC4区と間に位置する調査区で近年まで水田として利用されたところである。耕作土下

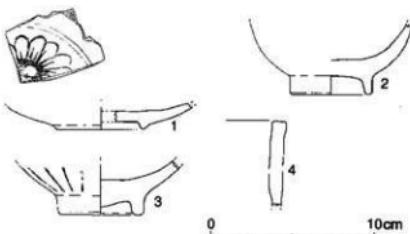


図24 C1区出土遺物

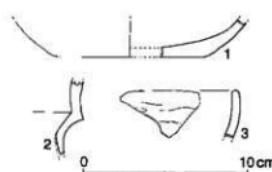
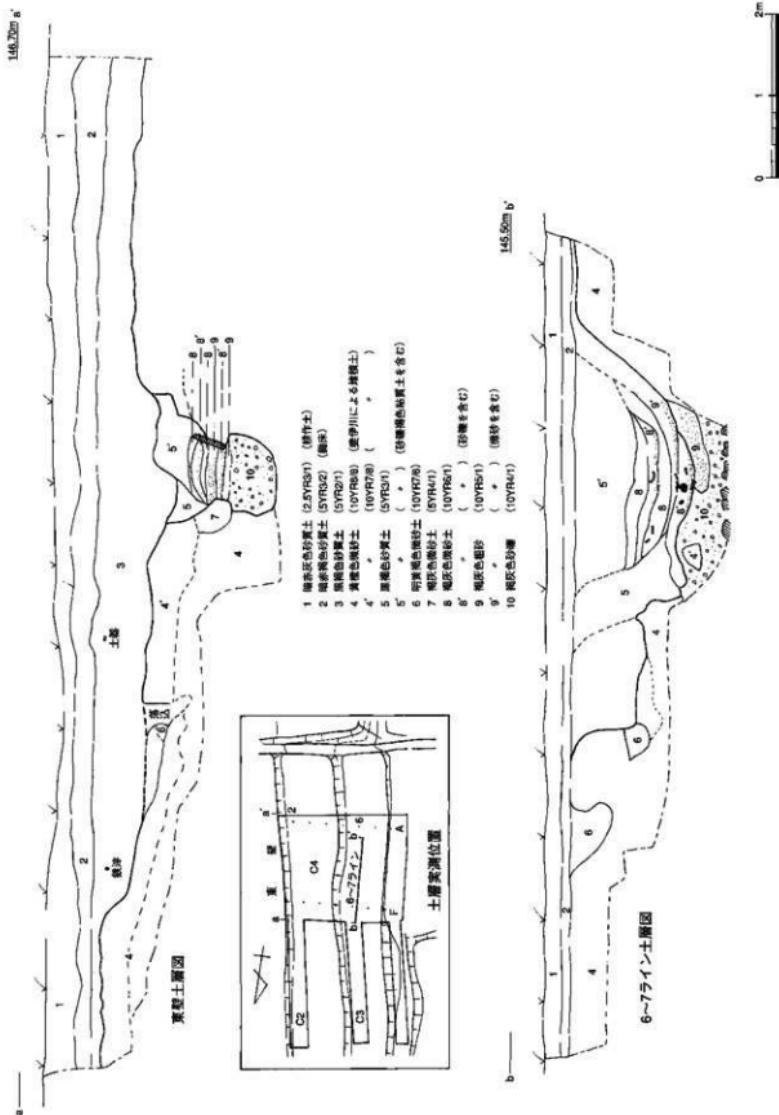


図25 C2区出土遺物

図26 C4区東壁・6~7ライン土層図



層は水田利用の際の酸化層がほぼ水平に堆積し、その下では黒褐色土がやや起伏をもちながら堆積して地山へと続き、C4区につながる。

C2区ではC4区と隣接しているながら遺構は何ら見出せなかった。遺物は若干の土器片が黒色土中から出土したので主な遺物を記す。なおC3区については土層状況も概ねC2区と同じであったが遺構、遺物は皆無であったためトレンチで地山層を確認したに留めた。

1は体部がゆるく立ち上がる須恵器壺である。底部は回転糸切りとなっている。時期は8世紀後葉であろうか。2は複合口縁をもつ土師器の壺である。時期は古墳時代前期ごろと思われる。3は灰白色の胎土に明オリーブ灰色を呈する中国産の青磁で碗の口縁部である。時期は15~16世紀のものと見られる。

3. C4区

(1)層序 (図26)

C4区は本遺跡のほぼ中央西寄りにあたる、調査区の標高は145.10~145.70mであり、西を流れる斐伊川との比高差は約5.0mである。C区の遺物を包含している黒褐色土はC4区において最も厚く堆積しており、かつてはこの区が溝状地形であったことを窺わせる。この黒褐色土の下層では黄橙色の微砂土が厚く堆積していた。調査区西側でさらにこの微砂土を掘り下げたところ、10cmから50cm大の川石を検出したため、この微砂土が地山に相当することを確認した。これはこの地がかつての斐伊川河道であったことを示すものである。またC4区では水路跡を検出したが調査区の東方から流れる水流が徐々にこの地山を浸食して小規模な水路を形成したことが土層状況から窺えた。

(2)遺構と遺物

C4区では耕作土下の黒褐色土中から土器溜りと石組、また石組と並行して東西に流れる水路跡を検出した。以下順を追って遺構、遺物について記すこととする。

1) 土器溜り (図27・28・29)

①検出状況

調査区のほぼ中央から検出した。土器の出土範囲は東西1.7~2.0m、南北1.7mで約80cmに渡って堆積しており8回に渡って精査、取上げを行なった。土層は下になるほど黒褐色土に点々と砂礫が混在しており、また下層になるに従って土器の散布は南側水路跡に移行していた。同一遺物の一部は水路跡内からも出土している。

遺物は須恵器及び土師器を中心であり、中でも須恵器の壺片が大多数であった。土師器はある程度まとまって散布していた。この他鉄器が1点出土している。総じてこれらの土器片は復元の際、完形には至らなかったが接合可能なものが多く、出土状況からこの土器群はこの水路の辺りで破碎したものとみられ、漸次流下堆積したものと考えられる。また

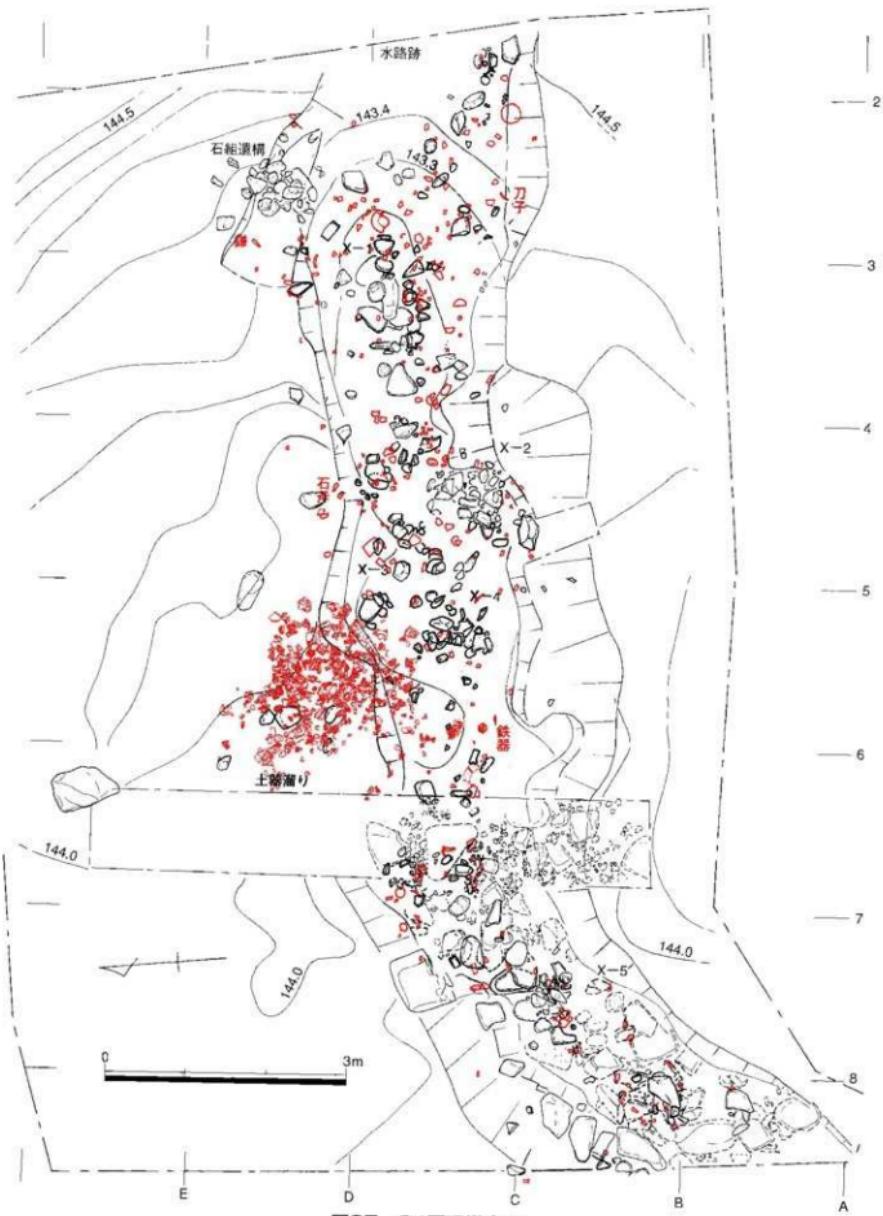


図27 C4区遺構全図

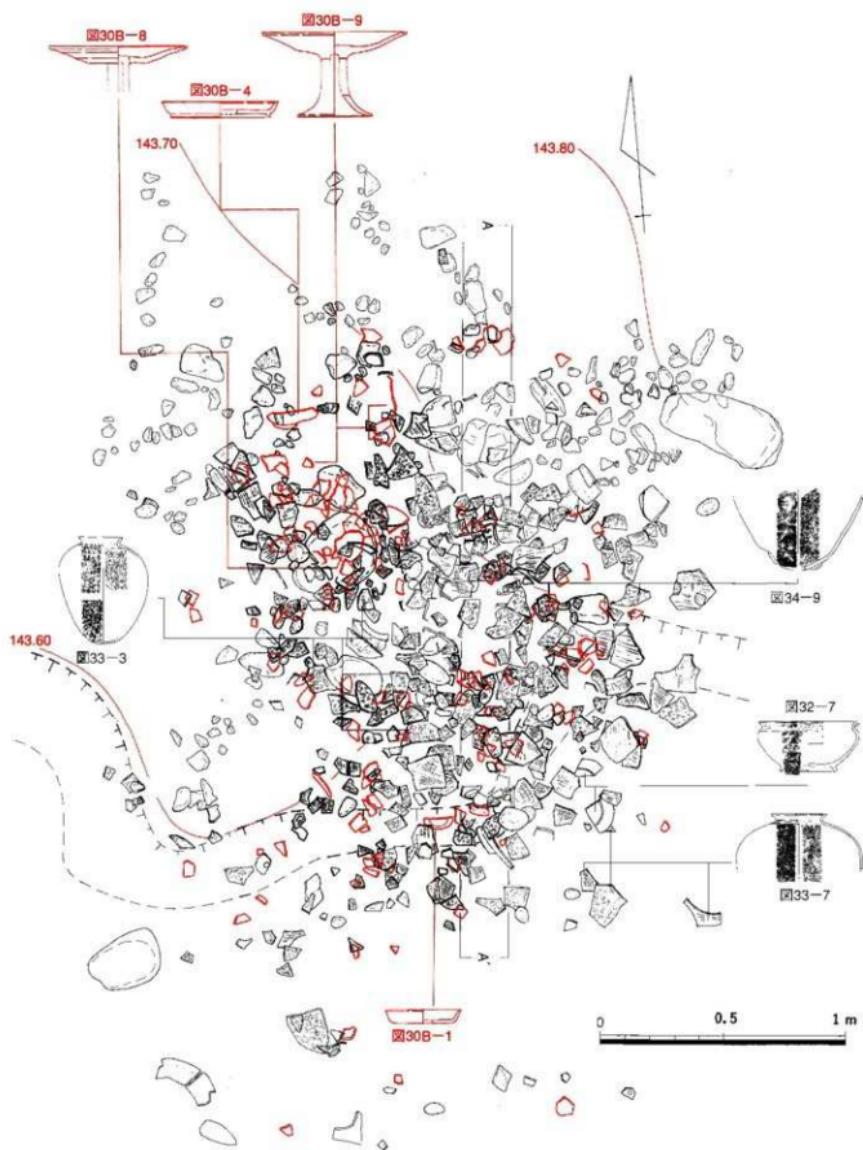


図28 C4区土器溝 (土器は縮尺不同)

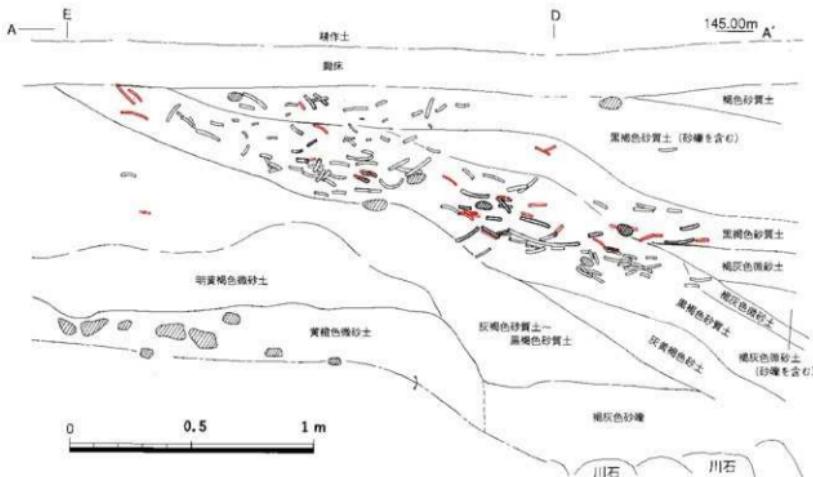


図29 C4区土器満り断面図

土器復元作業の結果、上層取上げ土器と下層から取上げた土器が接合することから、この土器満りの上器群には時間差はないものと思われる。

②遺物

土師器（図30A）

前述したように土器満りからは須恵器壺片を中心に土師器の高杯、盤等が一括して出土したのでまず土師器から概要を記してみたい。

1、2、3は土師器壺である。復元口径はそれぞれ34.7cm、28.9cm、32.7cmを測る。1は口縁がくの字状に外反し、胴部内面はカキ目状のナデあるいは削りで調整される。2はくの字状に外反する口縁内外面ともに明瞭なハケ目が施され、胴部内面は雑な削りとなってい。3は口縁を緩くくの字状に外反させ、端部をハケ目で調整する。また胴部内面は幅1.5cmの板状工具でカキ目が施される。4は器種を確認する部位がなく不明である。内面は胎土が炭化状に黒色化しており、いわゆる黒色土器と呼ばれる。外面は淡色の赤彩が施される。5は小型の短頭壺である。口径は10.3cmで外面と口縁内面をハケ目、胴部内面をナデた後一部にハケ目を入れる。4と同じく内面の胎土が焼されて黒色化する黒色土器A類である。^(注)時期は確証はないが奈良時代と思われる。

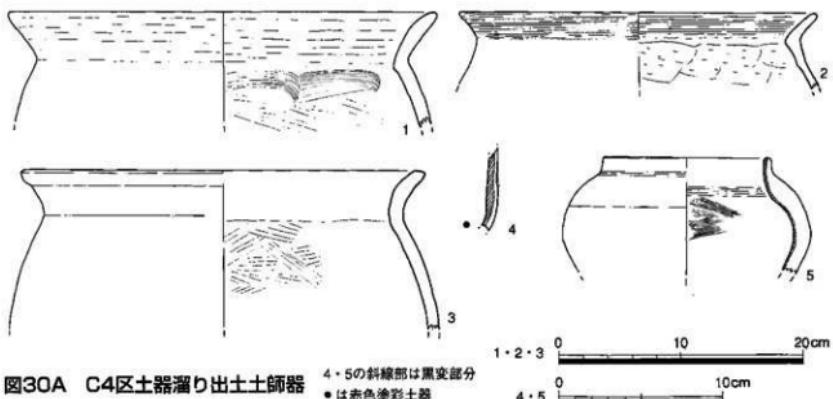


図30A C4区土器溝り出土土師器
4・5の斜線部は黒変部分
●は赤色塗彩土器

土師質須恵器 (図30B)

C4区では器形は須恵器でありながら土器の表面が須恵器に比べて粗く色調は土師器とほとんど変わらない灰白色ないし浅黄橙色を呈する土器が出土した。これらは酸化焰で焼

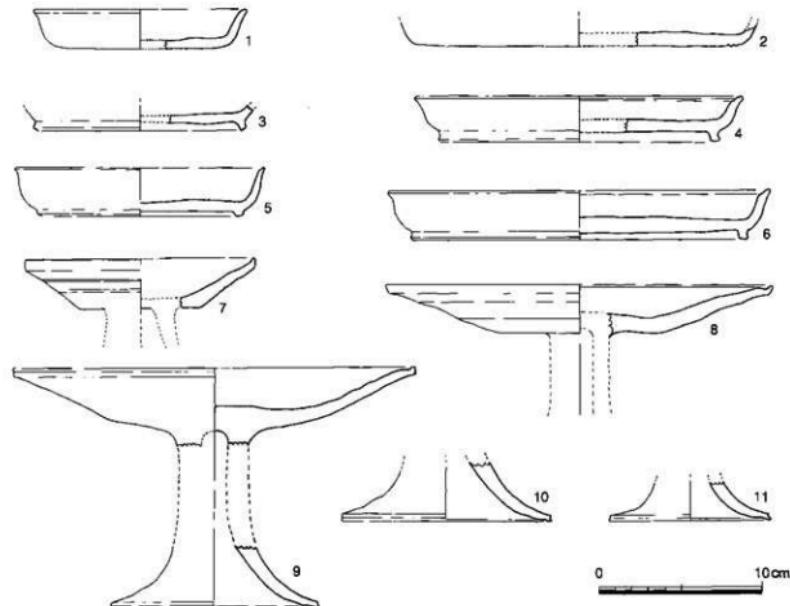


図30B C4区土器溝り出土土師質須恵器

成されたものと考えられ、須恵系土師器とか土師質須恵器と呼ばれている。本書ではとりあえず土師質須恵器として分類した。

1は皿である。胎土には微細石英を多く含む。切離しは回転糸切りで灰白色を呈する。2は盤で底径20cmを測る。底部内面には焼成の際に生じたと思われる橙色の発色が見られ底面外周には高台取付用の浅い沈線が3条認められる。3、4、5、6は盤である。3は復元底径13.0cm、4は復元口径20.0cmでは高台の端部外側に面取りを施す。5、6は復元口径15.2cm、23.1cm、器高は3.0cmである。5は右回転轆轤使用のヘラ削り後ナデ、口縁端部内面をくぼめる。7、8、9、10、11は高坏の坏及び脚部である。7は復元口径14.0cmで体部が直線的に外傾し、沈線を3条施す。3は復元口径23.5cmで内外面は回転ナデ、9は口径24.7cmで内外面とも回転ナデである。

須恵器（1）（図31）

1から8は全て蓋で、宝珠（3、5）ないし擬宝珠をもつ。1は内外面とも回転ナデ調整であるが2は内面が回転ナデ、外面はヘラ削りとなっている。頂部は轆轤による糸切りで平滑にし、擬宝珠つまみをつける。この形態は出雲国庁跡出土の蓋第4形式と類似しており、同遺跡出土土器の時代観からおよそ8世紀後葉ごろと考えられる。3は蓋外面を平坦に削った後ナデ、宝珠つまみをつけている。4、6、7、8は頂部が回転削りとナデでやや陥落し、縁端部は直立する。9、10、11は坏である、口径は12.0cmから13.0cm、体部は直立して立ち上った後口端部がくびれるもので出雲国庁跡などに事例がある。12、13、14、15、16、17は坏である。このうち12、13、14は焼成不良で灰褐色、橙色を呈する。14は糸切りで切離した後、棒状工具のナデ、17は回転ヘラ切りの後ナデとなっているが調整は粗雑である。その他は回転糸切りとなっている。18は皿である。色調は灰白色を呈し、焼成やや不良で底部内面に×のヘラ記号がみられる。底部は回転ヘラ切りである。

須恵器（2）（図32）

1、2、3、4は高台付坏である。1は高台が1.2cmと高く、大きく外傾する。体部も内弯ぎみに外方に大きく広がる。この坏は高広遺跡から蓋とセットで出土した坏に類似しており、他の坏に比べ時期がやや遅るものであろう。2、3、4はそれぞれ口径11.0cm、11.5cm、11.5cm、底径8.2cm、8.6cm、9.2cmである。体部は直線的にやや外傾して立ち上り、口端部もやや外傾させる。底部は3が回転糸切りで2、4は回転ヘラ切りとなっている。5は盤である。底径20.2cm、器高は3.2cm底部切離しは回転糸切りで口端部を面取りする。焼成は不良で橙色を呈する。6は長頸壺である。胴部径23.3cm、残存高は27.5cmで頸部は外方に開き、外面には沈線を1条めぐらす。内面には巻上げ痕が残る。色調は灰黄褐色を呈する。7は片口の鉢である。口径26.7cm、器高は13.6cmで、この破片は土器溜りと水路跡内から出土した。

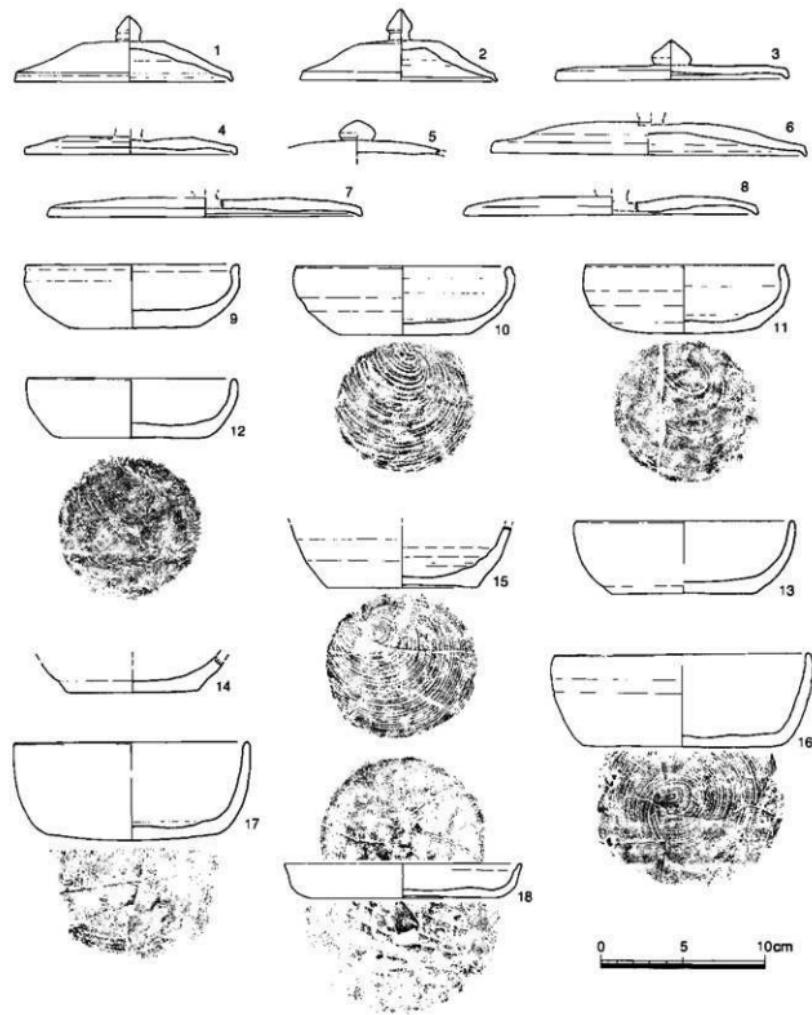


図31 C4区土器溜り出土須恵器（1）

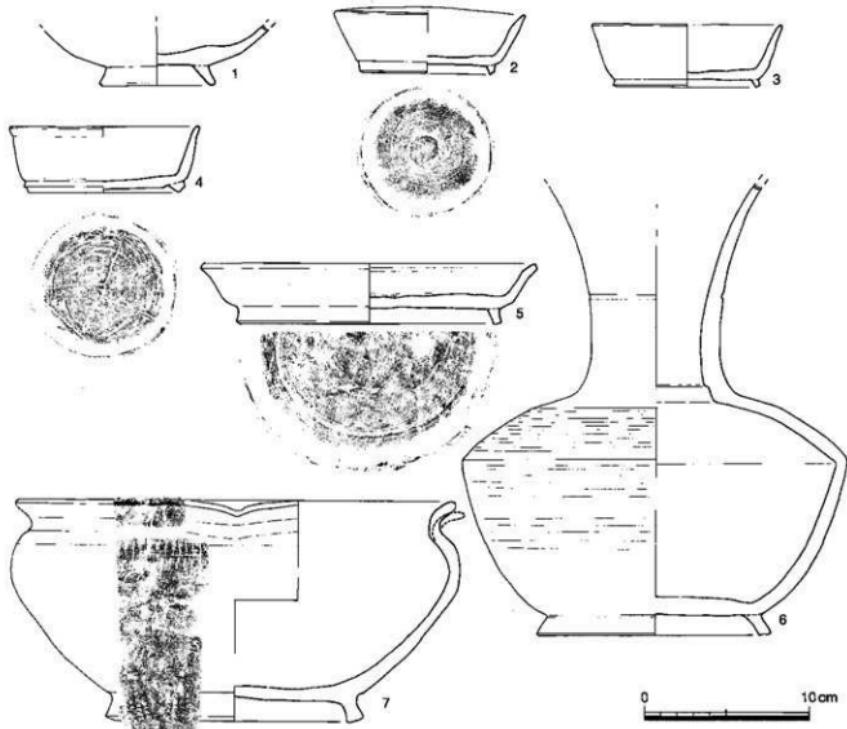


図32 C4区土器窯より出土須恵器（2）

指頭による押圧で片口をつくり、口縁部外面から肩部にかけて縦方向に棒状工具を走らす。この器種は当地方でも出土例が少ないと考えられるが奈良時代末から平安時代前期ごろと考えられる。

須恵器（3）（図33）

図33は全て壺型の須恵器を掲載した。1は胴部最大径49.0cm、口径22.0cmで丸形の壺である。体部外面は縦方向の平行叩き目の後横方向にカキ目を入れる。内面は円形の叩きが施されている。また口縁端部は轆轤引きによって直線的に整形される。2は壺の頸部から口縁にかけてのもので復元口径は41.8cmの壺である。外面には下部から7条、8条、9条の3段の波状紋が描かれる。口唇部ほど器厚は薄くなる。3は器高43.0cm、口径17.5cm、胴部最大径34.5cmの壺で外面は平行叩き、内面は円形状の叩きが施される。4は器高57.5cm、口径19.3cm、胴部最大径45.0cmの壺である。外面は平行叩き、内面は同心円叩きが施される。5

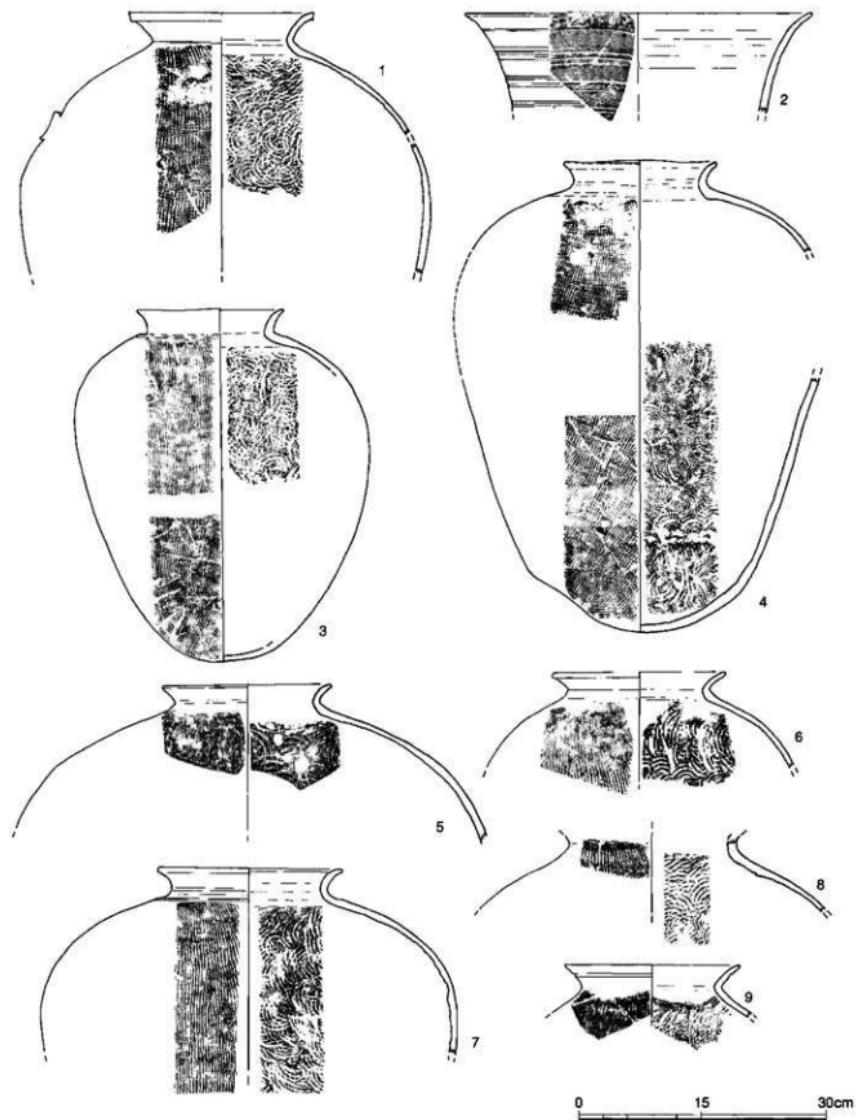


図33 C4区土器類出土須恵器 (3)

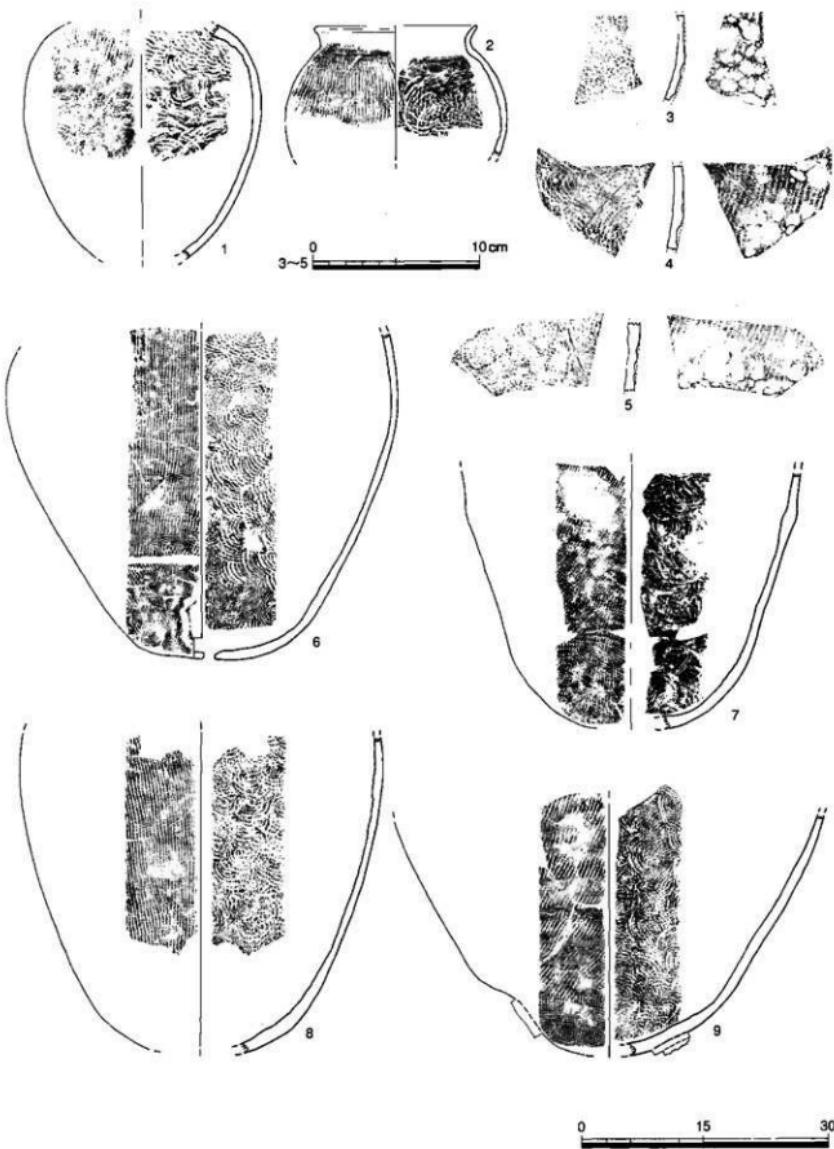


図34 C4区土器灌り出土須恵器（4）

は肩部の残存径57.0cm、口径20.5cmの壺で肩部から口縁にかけてのものである。外面は平行叩き目が施され、肩部は灰被り、内面は極く浅い同心円叩き目が口縁端部には面取りが施される。また5の土器片には内外面ともに直径0.8cmから1.5cmの敲打による剥落の跡がみえ、意図的に破碎されたものとみられる。6は口径21.0cmの壺である。外面と口縁内面には平行叩き目が見えなくなるほど灰が降りかかる。内面はナデ消しと見違えるほど浅い同心円叩き目が施される。7は口径22.3cm、胴部径50.0cmの壺である。外面には丁寧な平行叩き目が施され、内面は同心円叩き目が施される。8は壺の肩部である。9は口径21.0cmの壺口縁部である。肩部外面は平行叩き目で灰釉がかかる。頸部外面には太日の沈線が1条施される。

須恵器 (4) (図34・35)

1は胎土に砂粒、石英のほか暗灰色の礫が含まれる。見ると他の須恵器とは異なる壺である。外面は平行叩き目、内面には太目で浅い円形の叩き目が施される。2は口径19.5cmの壺である。胴部外面には平行叩き日の後、うすいカキ目、内面は円状の叩き目が施される。3、4、5は壺片である。3点とも外面に著しい敲打の痕が見られる。また3、4には内面にも叩かれた痕跡があることからこれらは何らかの目的で破碎され、土器溜りに廃棄された壺の一部である可能性が高い。6、7、8、9はいずれも壺の胴下部である。残存復元胴部径はそれぞれ47.0cm、40.5cm、44.0cm、51.5cmである。6には底部穿孔が認められる。外面は平行叩き目を施した後間隔をおいて横方向のカキ目状の条痕が認められる。内面は同心円叩き目が施されるが7の叩き目はごく浅い。9は胴部外面に暗緑色の釉が垂れ、底部には土器片が固着する。

図35は大壺である。口径50.5cm、肩部から口端までの高さ19.0cmを測る。口端部に段を設け、口縁外面は粗いハケ目の後浅い凹線を2条と3条、さらに細条線を4条から6条施す。また条線間に横描状の波状文が3段施される。この壺片は土器溜りだけでなく水路跡からも細片が数点出土している。加えてこの大壺にA3区から出土した須恵器小片が接合したことは注目される。

鉄器・石器 (図36)

1は鉈であろうか。長さは4.0cm、幅は1.1cmで刀部があり、くの字状を呈する。
2は花崗岩の円礫である。側面は打ち欠き状になっているが上下面は磨面になっている。使途は不明である。

2) 石組遺構 (図37)

①検出状況

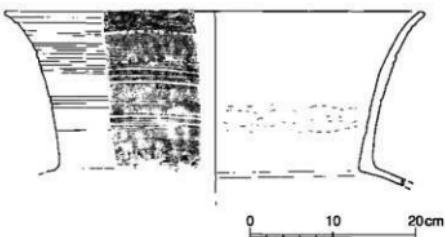


図35 C4区土器溜り遺構出土須恵器 (5)

この石組は土器溜りの東5mの地点で検出した。層位的にはこの遺構のそばから検出した水路跡の底と同程度のレベルにある褐色砂土(斐伊川の堆積砂土、地山)の上層が黒褐色砂質土となって堆積しており、この層中から遺構、遺物を検出した。まとまって出土した石はほぼ全てが花崗岩でこぶし大から25.0cmぐらいの物まで様々である。

この中には焼石と思われるよう赤色を呈した石も含まれる。

前述したようにこの石組の脇からは水路跡を検出した。しかし石組のあった黒褐色砂質土と水路跡では土層状況が明瞭でなく水路寄りでは黄褐色砂土の入り混じった部分も見られた。従ってこの石組が川のそばに掘り込まれて置かれたものか、あるいはこの場所が川の一部であったものか確認したい。しかし、黒褐色土中から石が検出されたことは、川の水流の影響を受けなかったことを示唆するもので、この石組も土器溜りと同様、川の縁に設けられたことも窺われる。

②遺物(図38)

1は土師器の甕で口径18.0cmである。胴部の器厚は0.3cmと薄手で外面はハケ目、内側は削りが施され、外面にわずかに煤が付着する。2は須恵器の高坏である。器高11.7cm、口径は26.4cmで焼成も良好であり、丁寧な作りである。脚部も含めて回転ナデ調整となっており。口端部はわずかに外傾して口縁となる。なお、2は坏部のみ中心からきれいに割れた状態で出土した。また1、2とも石組と川との間から出土している。3は土師器で煮炊用具の一部のようでもあるが器種は不明である。胎土に石英、長石を多く含み器厚は最大2.3cmある。口縁部の厚みは何かを支えるためであろうか。4は須恵器で小型甕の底部である。破断面に穿孔痕が見られる。

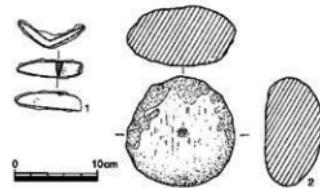


図36 C4区土器溜り出土鉄器・石器

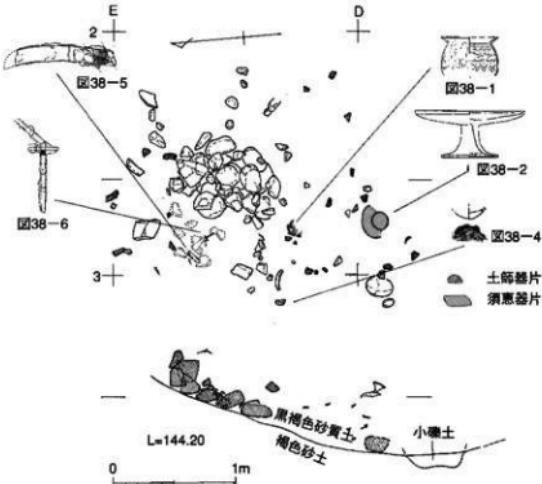


図37 C4区石組遺構 (遺物縮尺は不同)

5、6は鉄器で5は鎌である。石組の下方、堆積砂土から出土した。残存長は17.0cmで刃先は欠損し、基部には柄を固定する返りがつく。柄の固定部分には両面とも木質が残存していた、このことからこの鎌は柄を装着する場合、柄の先を二股上にして基部に差し込み、ひもで縛り付けるなどして固定したものと考えられる。6は紡錘車である。石組の中ほどから出土した。糸車の径は推計5.0cmである。

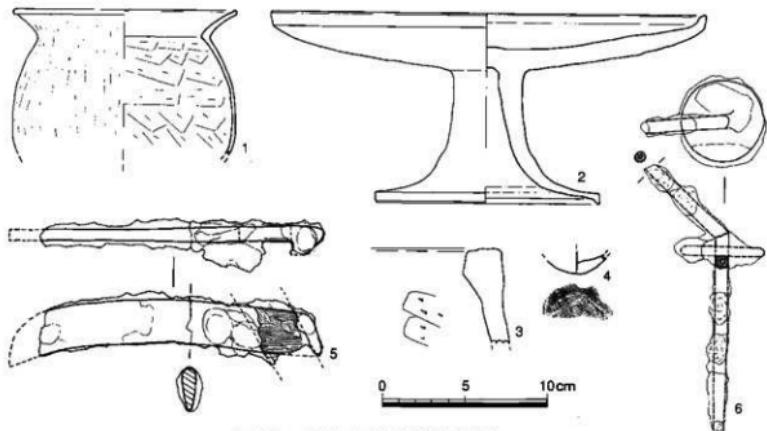


図38 C4区石組遺構出土遺物

3) 水路跡内集石の概況（図27・39・40）

C4区では当初、調査区の北側から精査を行い、まず土器溜りを検出した。この土器溜りを中心に精査を進めると土器群が南側に移行するに伴って黒褐色砂質土に砂礫が入り混じるようになった。また、土器溜り周辺では黒褐色土に加えて褐色粘質土や砂礫が混在し、川流れによる氾濫源の様相であった。このため川の砂礫が東西に帯状に走り、これを水路跡と判断するのに時間がかかる結果となった。

調査区の東壁には水路の断面がはっきりと表れた。壁面では水路の幅がわずか80cmであるがC4区内に入ると幅はおよそ1.5mと急に広くなる。西側では流れを南西に変えるが調査区外のため調査には至っていない。この流れを変えるあたりでは川に沿って50cm大の川石が並んだ状態で検出されたが遺構かどうかは判断しえなかった。

この水路は地山と考えられる斐伊川の堆積砂層が調査区東方からの水流によって浸食されて砂礫が堆積し、水路を形成していたと考えられる。その後水流は弱くなつておよそ3次から4次にわたって褐灰色の微砂と粗砂が交互に堆積する形で水路は埋まり、近世には消滅していたと考えられる。

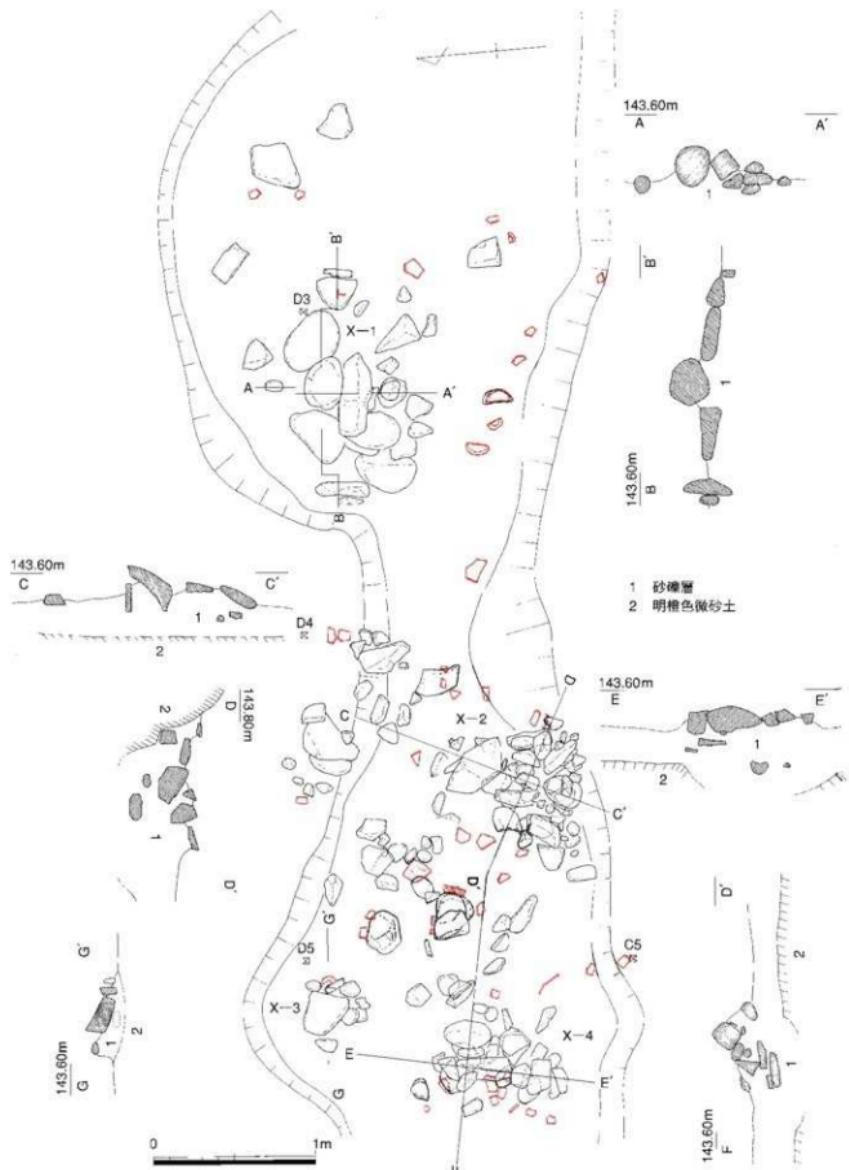
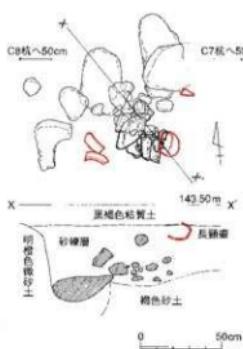


図39 C4区水路跡石組遺構

①遺構 (図39・40)

水路跡からは砂礫層に半ば埋もれた状態で5か所から集石を検出した。これらの石は全



て花崗岩と川石で人頭大のものが多く含まれる。水路の幅や水流の状況を考えると上流からの流出物とは考えにくい。また特に、X-1、X-3は何らかの意図があって石が積み置かれた可能性が高くX-2、4、5も含めて集積と判断した。石下からの出土遺物はなかったもののX-5では集石の直近から長頸壺の胸部が出土しており、集石の内部には円礫も見られた。

このほかX-1では破碎された川石、X-2では断定はできないが焼石と思われる橙色の川石が集石に含まれる。X-3では集石とともに羽口片が出土したが、時期は近世のものと思われ、上方から流出したものと考えられる。

図40 C4区水路跡石組X-5

②遺物

弥生土器・土師器 (図41)

1、2、3、4は弥生土器である。1は壺の胴部であろうか。外面は櫛描波状文と下部にも条線が施される。内面は削りである。2は口唇部を平坦にして浅い凹線を2条いれ、外面には凹線と縱方向に沈線を施す。3は無頸壺である。口端部外面は鋭角に調整され、口唇部に斜行刻目を施す。1、2は中期、3は後期ごろとみられる。4は複合口縁をもち、内外面とも横ナデが施される。無文であり大木椎現山式と思われる。5、6、7、8、9はいずれも土師器壺であろう。5は口縁がくの字状に外傾し、頭部外面はハケ日、肩部外面は粗い条痕の後ナデ、内面は削りである。6は口端をくの字状に外傾し、端口内面を薄手に仕上げる。外面はナデ、内面は削りを施す。外面全体に煤が付着する。7は口縁がゆるやかに外傾する。調整はやや雑で肩部外面は粗いナデ、内面は削りを施す。8は口縁がくの字状に外傾し、外面にハケ日が残る。肩部外面はカキ日、胴部はハケ日で全面に煤が付着する。内面は削りを施す。9は口縁を横に大きく開く。外面は粗いナデ、内面は削りを施す。口径は33.8cmである。10、11、12は壺である。いずれも赤色塗彩が施される。10は体部を直立させた後、口縁を外傾させるやや深めの壺で内外面は横ナデを施す。胎土は微細で色調は明赤褐色である。11は胎土に大粒の疊長石を少量含む。切離しは回転ヘラ切りと思われる。12はX-1の直近砂層から出土した。皿状を呈する壺で体部は横ナデ、底部はヘラ削りを施す。胎土は微細で色調は橙色である。13、14は弥生土器である。13は底径4.6cmで胎土に微砂を多く含む。14はコップ形の土器であろうか。底径4.5cm、胎土に微細な石英、長

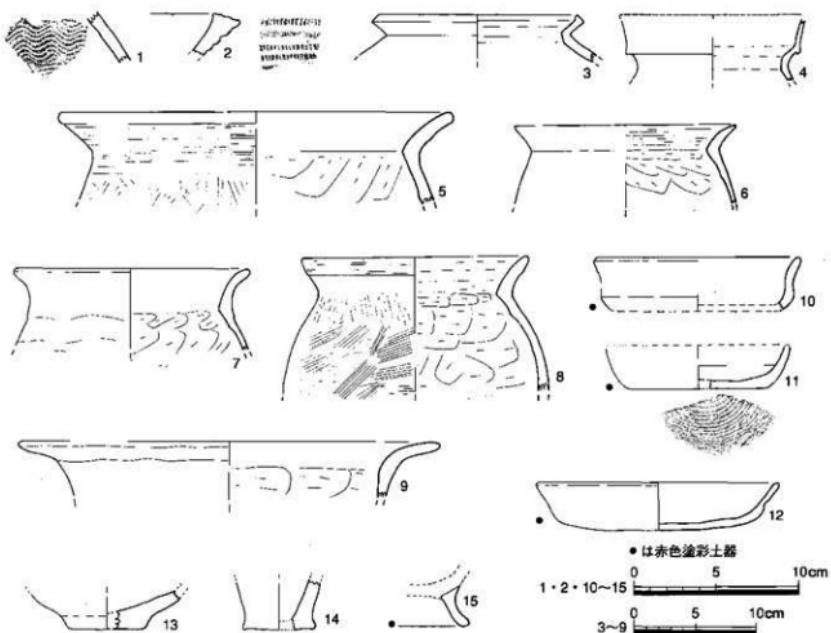


図41 C4区水路跡出土弥生土器・土師器

石を含む。15は土師器で高台付壺の脚部である。赤色塗彩を施す。

須恵器 (1) (図42)

1、2、3、4、5は壺の蓋である。全て浅いかえりをもち輪状つまみがつく (2、5は推定)。調整は若干の違いはあるものの天井部は回転ヘラ削りか静止ヘラ削りで端部は回転ナデを施す。天井部内面はナデである。復元口径はそれぞれ18.0cm、20.0cm、21.1cm、18.1cmである。かえりは浅くできており、かえり付蓋の終末期とすれば7世紀中葉から後葉と考えられる。なお、この蓋と対応する壺身は本調査区ではほとんど見られなかった。6は体部が椀状に斜行するが口縁部は直立して端部がくびれる壺で口径12.8cmである。胎土に酸化鉄・長石を含み、焼成不良で色調は灰白色を呈する。7、8、9、10も無高台の壺である。4点とも底部切離しは回転糸切りで化粧仕上げはなされない。体部は内湾ぎみに直立して立ち上り、口縁部がわずかにくびれる。8世紀中葉であろうか。11、12、13はやや大きめの壺で口径はそれぞれ16.5cm、14.8cm、15.2cmあり、13の器高は7.3cmである。体部はやはり内湾ぎみに立ち上り、外面は回転ナデ、12の底部内面は棒状の工具でナデる。11の底部

外面にはの字状のヘラ記号が見られ、同様の須恵器片が他に1点出土している。14、15、16は高台付坏で体部が内湾ぎみに立ち上る。14は体部2/3が回転ナデ、外面下部はヘラ削りである。底部切り離しもヘラ切りの後ナデを施す。砂礫層中から唯一完形で出土した。15、16とも底部は回転ヘラ切りで底部外面には15が2条の刻線、16には幅0.8cmのヘラ状工具によるナデ痕が見られる。17は復元口径15.3cm、器高4.0cmで体部は直線的に立ち上り、端部を丸くする。18も高台付坏の底部で切り離しは回転糸切りである。

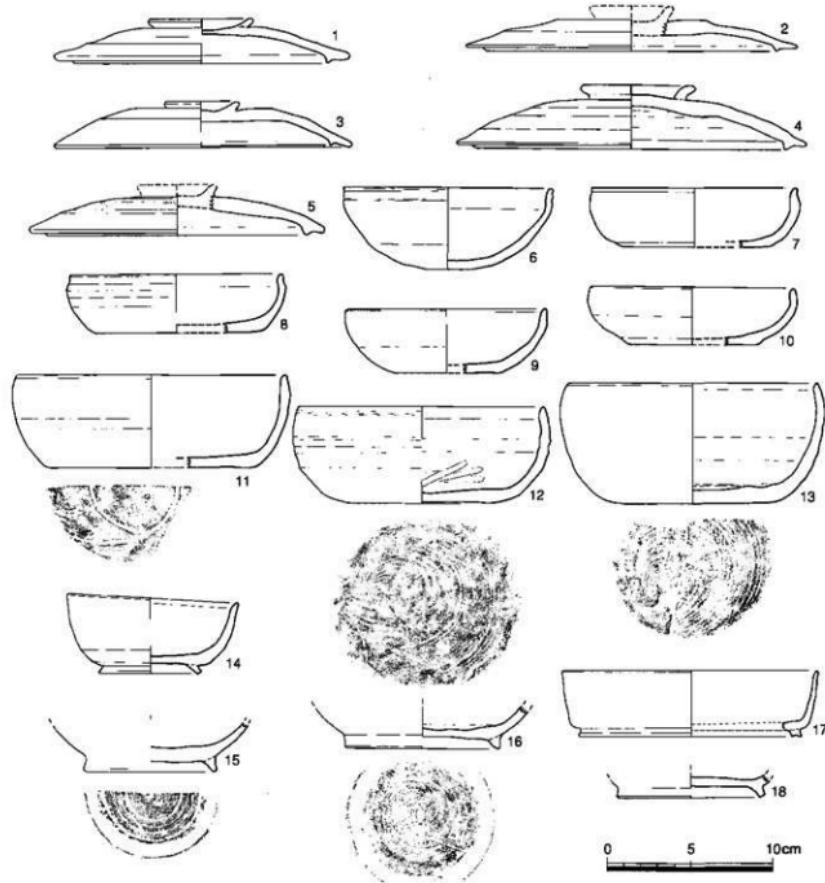


図42 C4区水路跡出土須恵器（1）

須恵器 (2) (図43)

1、2は長頸壺の胴部である。1はX-5の直近から出土した。底部は回転糸切り、高台の内外面にはコケ日、煤が付着する。1、2とも体部は回転ナデである。3は鉢の口縁部であろうか。

口縁に段を設け端部を平坦にする。胴部外面はハケ日、内面は叩き目の後ナデを施す。4は壺下半部である。X-1より1.5m上流の地点で底に置かれた状態で出土した。外面は平行叩き目を施した後横方向に細線のカキ目を施す。5は壺の口縁外面に凹線を3条、擬似波状文を2段施す。薄手のヘラを寝かせて描いた様相である。

その他の土製品 (図44)

1は壺の底部分かと思われる。器厚は最大1.3cmで外面にハケ日を施す。2は土製支脚の頭部である。胎土に3mm前後の長石、酸化鉄を含む。3は土錘で残存長6.1cm、最大径1.6cmで胎土は微細、灰白色を呈する。4は羽口の先端部である。外面の口径は推計9.5cm、内径は3.0cmである。外面には一部に溶蝕が見られる。胎土は砂粒が多く含み、橙色を呈する。

鉄器 (図45)

1は木製の柄を付けた茎部で刃部は残りが少ない。一見すると鉄鎌かと思われるが厚さや太さから刀子様のものかもしれない。2は長さ4.2cm、幅1.5cmで片側を丸め、そこに口径0.4cmの鉄棒を挿入して締めつけた後締めつけ部を糸状のもので巻きつけるので用途は不明であるが鉄鎌とも思われる。3は残存長11.0cm、幅1.0cm、厚さ0.5cmの刀子である。

石器 (図46)

1は水晶の破片である。細かく敲打された痕があり何かの未製品にも見受けられる。2は黒曜石、3は碧玉の破片である。いずれも当地に持込まれたものである。4は花崗閃緑岩の砥石である。5は叩石と思われ、先端には敲打の痕跡が認められる。6は粘板岩で全体に打ち欠いた痕がみられるが用途は不明である。12は磨製石斧である。縄文時代の所産であろう

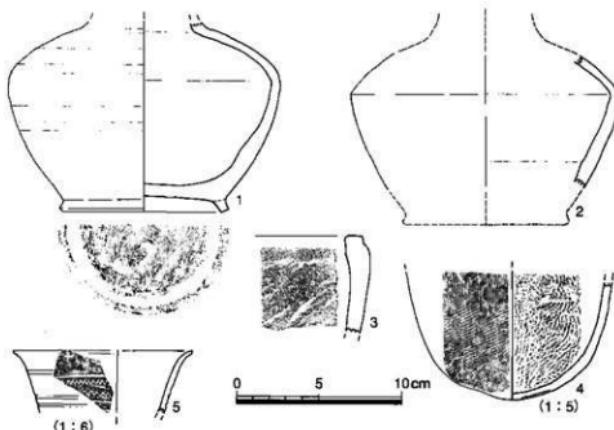


図43 C4区水路跡出土須恵器 (2)

か石材は片磨岩である。7、8、9、10、11は円碟である。水路跡から出土した岩石はほとんどが角碟であり、川石はわずかであった。特にX-5の集石下では7の他にも円碟が集中していた。12には一部に磨面が見られる。

4) 遺構に伴わない遺物

ここでは遺構外から出土した遺物及び黒褐色砂質土の上層から出土した遺物を取上げた。

弥生土器・土師器（図47・48）

1は胸部外面にハケ目後横方向の凹線と斜目凹線を施す。後期と思われる。2は外面を磨きと一枚貝の腹縁刺突を施す。的場式か鍵尾II式で弥生時代後期末葉であろうか。3は二枚貝の腹縁刺突をくの字状に施し内面は削りである。後期で九重式又は鍵尾式と思われる。4は壺の肩部にナデの後細線の櫛描波状文を施す。九重式か鍵尾II式と思われる。5は外面にボタン状の円板を貼付け、斜行細条線を6条施す。中期後葉と思われる。6、7は壺の口縁部である。古墳時代前期と思われる。8は口端部外周に4条の凹線と1条の沈線、口縁平坦面に斜格子文を施す。中期と思われる。9は口端部を外に折り曲げ突帯をつくる。突帶外面にX字状の刻み目、頸部外面に凹線を10条施す。さらにはその下部には三角形の刺突文を施す。弥生時代中期であろうか。10は内外面ともヘラ磨きを施し、口唇部を広く平坦にした後、浅い波状文を3条施す。胎土に砂粒を含む。中期と思われる。11は口縁部内外面にナデを施し、凹線を11条施す。頸部にも凹線が見られる。古墳時代前期とみられる。12は口縁内外面ともナデ後ハケ目を施し、口端部をやや平坦にする變形土器である。13は口縁内外面にナデ、肩部内面に削りを施す。胎土に微砂、石英を含む。古墳時代前期とみられる。なお、復元口径は8が31.7cm、10が32.0cm、11が15.0cmである。

図48の1、2、4、5は高台付坏である。1は高台が高く外方に張り出す。2は体部がやや外傾して立ち上がる盤である。口端内面に窪みを設ける。体部内外面は回転ナデ、底部切離しは回転糸切りである。5は高台部のみで脚部をやや内側に向ける。1、5には赤色塗彩が

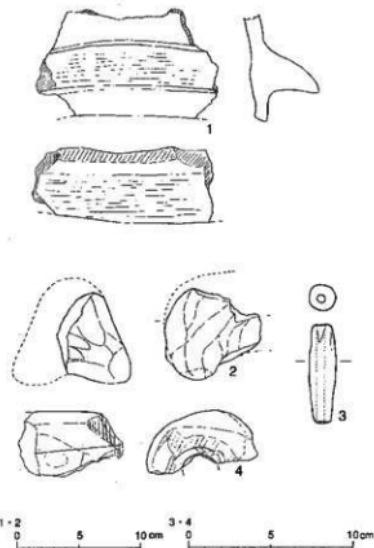


図44 C4区水路跡出土その他の土製品

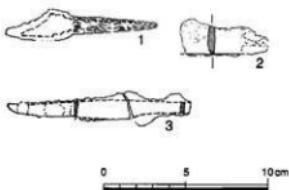


図45 C4区水路跡出土鐵器

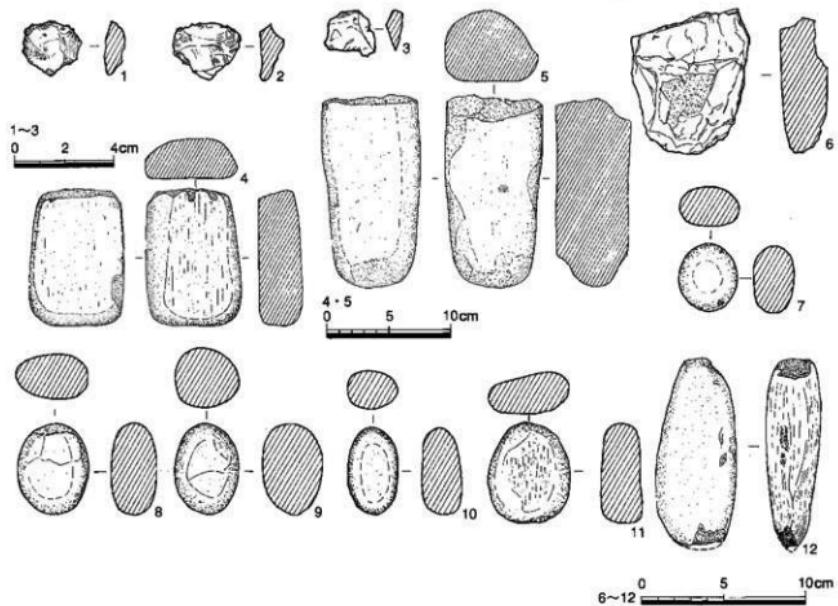


图46 C4区水路跡出土石器

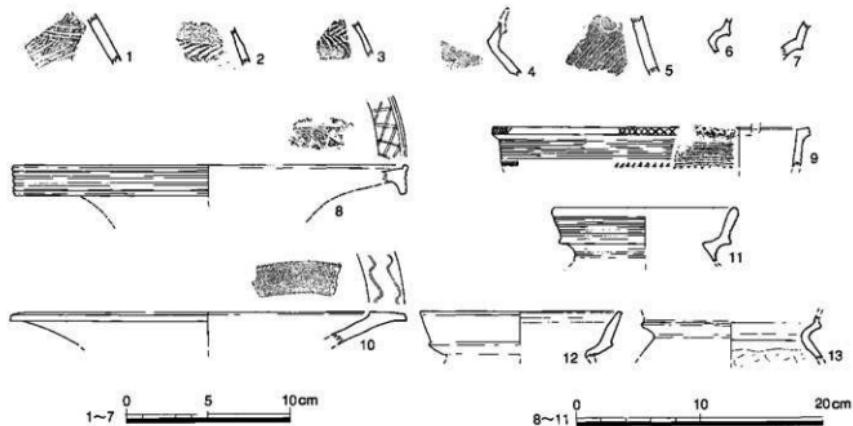


图47 C4区包含層出土弥生土器・土師器

施される。3、6は体部がやや外傾して立ち上がる坏である。胎土は微細で3は酸化鉄を含み、赤色塗彩を施す。6は外面にヘラ磨き、内面はナデを施す。7、8、9は小型の坏底部である。胎土は全て微細で酸化鉄を含み、浅黄橙色を呈する。切離しは7、9が回転糸切り、8は本遺跡では出土が少ない静止糸切りである。10は底径5.5cmの坏で胎土に微細な長石、雲母、石英を含む。底面を平滑にナデる。10は口径30.0cmの甕である。口縁をくの字状に曲げる。外面はハケ目、内面は口縁をナデ、肩部に削りを施す。

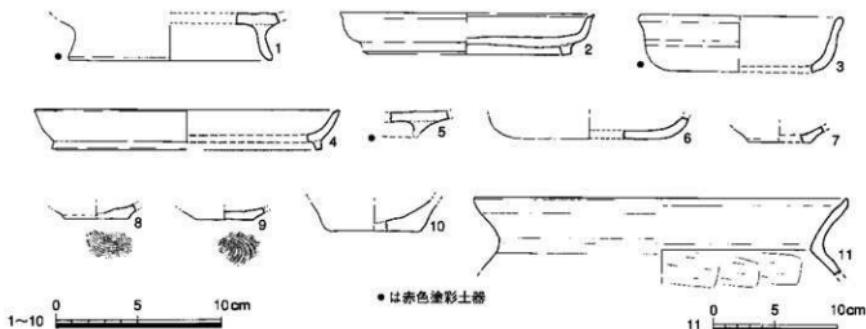


図48 C4区包含層出土土器

須恵器（図49）

1は坏蓋である。天井部外面に回転ヘラ削り、端部と内面はナデを施す。本遺跡出土の須恵器としては最も古く山陰Ⅳ期古段階である。2、3は擬宝珠つまみをもつ坏蓋である。このうち2は口径9.3cmで天井部を高くし、外面は削り後ナデるものである。3は天井部を平坦にする。胎土は磨滅し調整は不明、焼成も不良で灰白色を呈する。4は頂部を削りで平坦にし、宝珠つまみをもつ蓋である。焼成不良で淡灰色を呈する。5は輪状つまみがつく口径16.2cmの蓋である。頂部外面は削り、端部は下方に屈曲する。6、7は体部が内湾ぎみに立ち上り、6は口縁がややくびれる坏でいずれも底部は回転糸切り、口径は12.4cm、15.3cmである。8、9、10、11、12、13は高台付坏である。8は体部を大きく外傾させ、高台を折りまげて八の字状にふんばる。胎土にはぶい橙色を呈する。9は体部下部が円弧状に立ち上る器形である。底面にはA4区から出土した須恵器蓋（図13-19）と同じマークが刻印され、注目される。10はやや厚めの器厚で脚部は大きく外方にふんばる。長頸壺の底部であろうか。胎土に黒褐色を呈する物質が含まれる。11、12は体部がやや外方に直線的に立ち上る低い高台をもつ坏である。11は口径11.1cm、器高5.0cmで口縁端を薄く尖らす。底部は静止糸切りの後ナデを施す。体部外面には灰が付着する。胎土は粗く灰色を呈する。

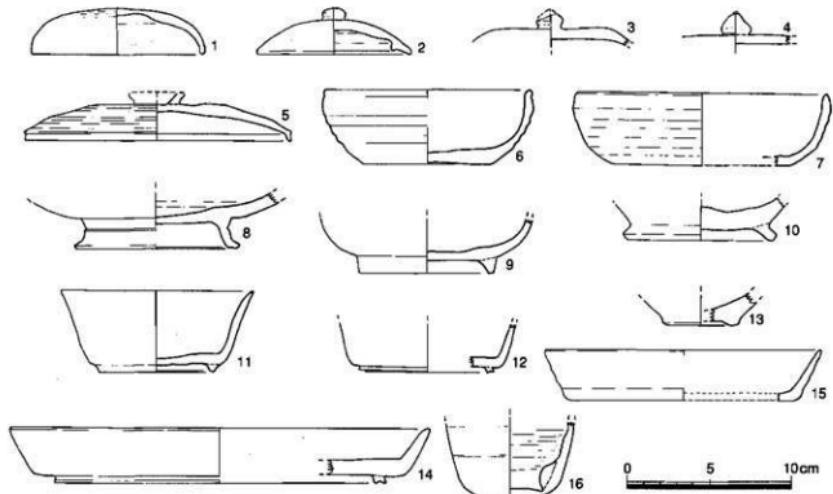


図49 C4区包含層出土須恵器

11、12とも回転ナデを施す。13は低い高台をつける。外面は削りの後ナデ、内面には灰釉が見られる。酸化炎焼成のため橙色を呈する。14は盤である。口径25.4cm、器高3.4cmを測る。底面の高台取付部は溝を付けて接着している。脚端下面に浅い凹線を巡らせる。15は無高台の壺である。口径16.3cm、器高は3.0cmで体部は外方へ直線的に立ち上る。16は鉢形の土器である。底部はヘラ切りの後ナデ、胴部外面は削り後ナデを施す。内面には巻上げ痕と焼成による火膨れが見られる。

その他遺物（図50）

1、2、3は甕形土器の把手である。1は胎土に粗砂、雲母、石英を含む。色調は浅黄橙色。つまみは内へ傾く。2は角形でにぶい黄褐色を呈する。3は突起状を呈する。4は鉄器で残存長は8.2cm、断面は長円形である。用途は不明である。5は鉄環である。外径は長径3.4cm、短径3.0cmで内側に磨減部が認められる。6は水晶である。旧耕土中から6を含め2点出土した。7は煙管である。旧耕土中より出土した。銅製でラオ竹が残存する。近世のものと思われる。8は碗形の磁器である。高台と体部に暗青灰色の帯が一周する。内面に釉はない。内田氏より梅徳利の可能性があるとのご教示を頂いた。9は貫入の入る白磁である。底面と体部下部に青灰色の線が一周、高台外面にも同様の線が二周する。10は中国産青磁である。碗であろうか。外面は明緑灰色、胎土は灰白色を呈する。15～16世紀頃と思われる。11は唐津焼きの碗である。体部内外面と底部内面に釉を施し、明オリーブ灰色を呈する。

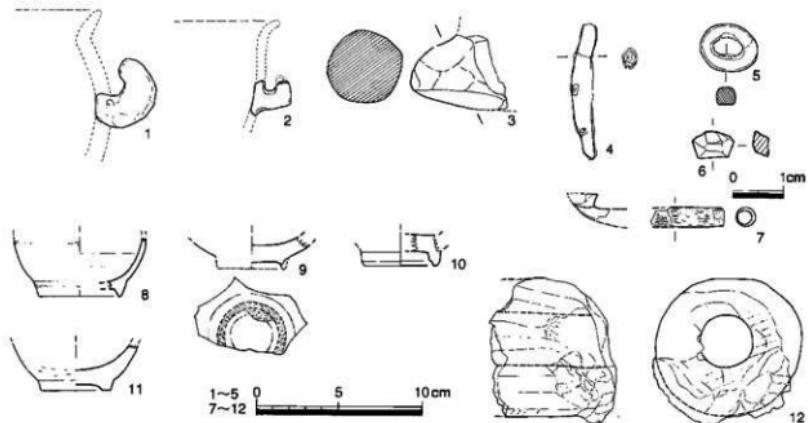


図50 C4区包含層出土その他の遺物

(36)
江戸時代初期のものと思われる。12は羽口の端部である。外径9.0cm、内径は3.0cmである。端部外面は胎土が溶融して光沢のある黒色を呈する。胎土は橙色で砂粒を多く含む。鍛冶操業の遺物である。

4. 小結

C区は斐伊川本流に平行する南北方向に設けた調査区で、川からの比高約5mのほぼ等高線にそったところである。その南端近く、C4区において水路跡を検出し、それにそった厚い堆積土中から多くの土器片等の遺物を検出した。また水路のほとりとみられる位置には石組等や土器滴りが認められた。

- 1) 川跡と石組　　幅1.5mから2mの水路が東上方から西の斐伊川へと流入しており、そのほとりに石組や土器溜りが、水路跡からは集石が所々に検出され、土器片が嵌入していた。

2) 土器出土状況　　北側では顯著な土器の出土は認められず黒褐色土が最も厚く堆積しているC4区の水路跡周辺からまとまって出土した。

3) 須恵器の年代観について　　壺蓋には輪状つまみ、擬宝珠がある。輪状つまみはかえりを持つものが多く主に水路跡から出土している、7世紀後半とみられる。擬宝珠つまみはC4区全体でみられ、かえりのないものが多いが高さのあるものと天井部が平坦で大型のものに大別できる。後者の方が後出するとみられる、8世紀後半であろうか。壺では高台の有無で大別され、概して高台付では体部が直線的に外傾し、高台は底部内側につくも

のが多い。これに対して体部が内湾ぎみに立ち上がるるものもわずかにみられた。出雲国庁跡出土土器の形式では第3形式に該当すると思われ、8世紀前半とみられる。無高台の坏では体部が内湾ぎみに立ち上がった後、口端部がくびれるものが圧倒的に多く、体部が直立するものには大型のものが多い。8世紀中葉から後葉と思われる。石組遺構から出土した坏部が浅く横に張り出す高坏は益田市大溢遺跡で類似の高坏が出土しており、これを参考とすると9世紀初頭と考えられる。

土器溜りから出土した土師質須恵器は高坏と盤が中心で高坏では断定できないが脚部の透し孔はないと思われ、国庁の土器形式の第4形式に当たると考えられる。盤についても同位置から出土していることからほぼ同時期と考えられ、8世紀末葉ごろとみられる。

3) その他の遺物 黒色土器の初現については北九州太宰府で8世紀後半、近畿地方では8世紀末葉からとされている。当地方では安来市陽徳寺遺跡からA類が出土しており、11世紀代と考えられている。これより時期が下るものでは鳥取県伯耆国庁跡出土のものがある。C区出土の短頸壺は8世紀後半から9世紀初頭ごろと考えたい。

この他鉄器として石組遺構から鎌、紡錘車等を検出した。これらは他の事例からして祭祀関連の遺物と考えたい。

これらをまとめるとC区東側で検出された水路跡では石組や集石が認められ、そのほどりでは土器溜りも検出された。出土した土器は概ね7世紀後半から9世紀初頭に至るもので、それらの多くは供献土器又は祭祀用具に用いて故意に破碎したものと見られ、奈良時代を中心にこの水路のほとりに石組して何らかの祭祀が行われたことが窺える。

(坂本謙司)

註

1. 横田町在住、内田寛一氏のご教示による。
2. 島根県教育庁文化財課 守岡正司氏のご教示による。
3. 「日本土器事典」雄山閣 1997年
4. 「出雲国庁跡発掘調査概要」松江市教育委員会 1970年
5. 弥生式土器については杉原清一氏のご教示による
6. 10.11については島根県教育庁文化財課 守岡正司氏のご教示による。
7. 4に同じ
8. 「大益遺跡」「石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書」島根県教育委員会 1992年
高杯の時期については島根県教育庁文化財課西尾克己氏のご教示による。
9. 3に同じ
10. 「徳兄津遺跡・目廻遺跡・陽徳寺遺跡」「一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12」島根県教育委員会 1996年
11. 3に同じ

第5節 D調査区の概要

1. 層序 (図23)

D調査区は斐伊川の東側河岸段丘上に広がる水田で、斐伊川に対して東西方向に細長い調査区である。小調査区は東側から斐伊川に向って4か所に分け、試掘を行った。D1区、D2区では耕作土下層に黒褐色土及び灰白色の山石と思われる角礫を多く含む黒褐色土が堆積し、これらの層中から流れ込みと思われる土器片が少数出土した。その下層では暗褐色の砂質土層が認められたがこれらは全て盛土と思われた。さらにこの下層には黒褐色粘質ないし砂質土が堆積しており、これが地山にあたると考えた。この段階で遺構は存在しなかった。D3・4区でも概ね層序は変わらなかったが盛土の攪乱及び黄橙色砂土の堆積が見られた。なお、D4区では耕作土下1.7mの地点で人頭大から約60cm大までの川石を伴って黄橙色の川砂が現われた。ここはC4調査区の南西80mの地点にある。またこの川砂層と現斐伊川の比高差は約6.5mでかつては斐伊川の水流が大きく東に寄っていたことが判明した。この旧斐伊川堆積砂層を確認したところで調査を打ち切った。なお、遺構、遺物は何ら検出されなかった。

2. 遺物 (図51)

1は直口壺の口縁で口径は7.7cmである。黒褐色土中から出土している。焼成は良好で灰色を呈する。2も同じく黒褐色土中から出土した陶器の皿である。内面には重ね焼きの跡が見られる。施釉はない。高台は底面にさざくれ状の削り痕を残す、いわゆる縮緬高台である。江戸時代初期の唐津焼きと思われる。3、4はD2区の黒褐色砂礫土から出土している。3は土師器の壺で底径5.0cmを測る。切離しは糸切りであるが回転か静止かは判断がつきにくい。4は須恵器の高台付壺である。胎土に長石、石英を多く含む。残存部が少なく調整は不明である。

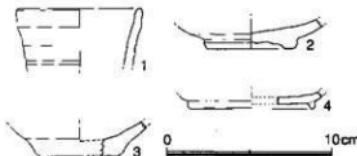


図51 D1・2区出土遺物

(坂本論司)

第6節 A～C区採取鉄滓の検討

A～C区においてはそれぞれ区の項で述べたように鉄滓が出土した。いずれも遺構に伴うものではなく他からの混入ないし転入とみられる。最も多く採取したのはA4区あたりであるが、これは極く近い未調査域からと思われるが、その他区では小数が散らばった状態である。またC4区水路跡などでは吹子羽口片も出土している。B2区では重複して二次にわたる製錬炉床が検出されたが、伴う鉄滓は全くなかった。

このように調査区のほぼ全域にわたって鉄滓は分布していたが、その出所を特定するこ^(註)とは出来なかった。

これら鉄滓の外貌は大まかに4区分出来る。なおすべて鉄錆で土砂が固着し赤褐色を呈している。

- 1) 比較的比重感があり、表面凹凸著しく、溝を流れたような形状で気孔は小さく、断面には光沢がないもの…分析試料1、2、7
- 2) 重量感があり表面やや大きく凹凸し、塊状をなして気孔少なく破面やや青味の微光沢があるもの…分析試料3、5
- 3) 比較的軽く、表面は細かく凹凸して砂粒が半ば嵌り込んでおり、破面は細気孔が多く、光沢のないもの…分析試料4
- 4) 赤褐色の錆が著しく、やや重く表面は気孔で痘状をなし、破面に気孔やや多くまれに木炭の嗜み込みがある…分析試料6、8

このように肉眼観察によつても多種があることから、これらは複数の製鐵遺構によると思われ、またその原位置も単一ではないと思われた。

上記によって試料を選び依頼して分析検討を行つた。その成果報告は付編に収録した。

- これによると
- 1) 鍛冶滓…試料1、2、4
 - 2) 製錬滓…試料3、5、8 但し3は炉温が低目の操業か。
 - 3) 製錬滓の可能性…試料6、7

今回の金属学的検討は組織顕鏡とFe項目のみの化学分析によって鍛冶か製錬かの判別を目途としたため、それ以外の操業内容や原料砂鉄等に関する検討には至っていない。

以上の結果を概括すると、年代の特定されたB2区のたら炉床（AD1650±19）に伴うものは特定されなかつたが、それを含む製錬操業のほか、吹子羽口の採取からも判るよう複数又は複次に複次に鍛冶操業が行なわれたことが判つた。しかしその年代は特定されていない。

（杉原清一）

参考文献 窪田藏郎：『製鐵遺跡』ニューサイエンス社 昭和58年

第7節 総括

家の上遺跡は調査区外に当たるA区東側の山裾部分でも遺物が表採されている。今回の調査で住居跡は検出されなかった、従って付近の山裾の畠及び宅地付近に住居跡が存在するかどうかは未確認である。

B区で検出した野たら跡をはじめ、調査区全域から製・精鍊滓が検出されたことは中～近世にこの地で数次にわたる製鉄が営まれたことを示唆しているといえよう。

本遺跡から出土した土器の胎土分析によると約8割の須恵器が出雲産であり、しかもこのうちの半数近くが大井窯群の分布領域に対応することが判明した。(この中には押印のある須恵器も含まれる) またA4区から出土した土師質土器内面に布目の圧痕を残す製塩土器は事例では飯石郡頓原町森遺跡の古墳時代末期から奈良時代の住居跡からも出土している。^(註1) 製塩土器は古墳時代には瀬戸内から兵庫、広島、愛媛地方に広がったとされることからこの土器が山陽方面からもたらされた可能性も考えられる。なおこれが祭祀に用いられたものかどうかは定かではない。

A区では手捏土器や土馬など祭祀に関わる遺物を含む多くの土器等が出土した。特に土馬は水に関わる祭祀遺物とされており、井泉の近くから検出されたことは、これを裏づけるものであろう。ここから検出された配石群は、耕作による攪乱があるものの現地で一見するとコの字形に組んだもののようにも見られ中央に置かれた石は大きく平坦であることから祭壇に用いられたとも思われる。またこの石の脇から低脚の高壇も出土している。

祭祀関係遺跡といわれる大田市大家八反田遺跡や隱岐島兵庫遺跡などから検出された集石の検出状況は、水路あるいは湧水(水)を伴うという点でC4区の遺構と類似性がある。そして土器溜りの須恵器の一部が水路跡から検出されること、土器溜り遺構と石組遺構とは出土レベルに大差ではなく堆積土も黒褐色砂質土と共通していることなどから、両者に時間的な隔たりはみられず、ほぼ同時期に営まれたと考えられる。

今回の調査は工事の内容から遺跡全体の発掘調査には至らなかったため、A4区とC4区の間は未調査である。しかしA3、4区出土の須恵器とC4区出土の須恵器片(図31-15の壺、図35の大甕)が接合するなど両地区には同時性、関連性が認められ、土器の時代観からA4区の井泉のひとりで古墳時代末期に始まったと思われる祭祀はやがてC4区の水路のひとりでも行われたことが推定された。そして平安時代前期にはこの地点での祭祀は行われなくなっている。

この井泉は、中世この地を領した地頭の三澤氏が元朝の若水として汲む慣しであったと古記録は記しており、中世においてはすでに聖水として認識されていたものである。^(註2)

なお「出雲国風土記」仁多郡の条によれば当地の属する三澤郷には澤(津)があり、こ

れを国造が朝廷へ神賀詞奏上に向かう際の禊ぎに用いたことは著名であるが、必ずしもその池が特定されているとは言いがたい。

この調査により奈良時代において当地には石壺社と水辺の祭場が祭祀の場として同時に存在していたことが窺えた。人々は祈りの対象ごとにそれぞれ祭祀を行なったことも考えられるが現在の石壺神社は後背の亀山に対せずやや斜方の真北を拝する方向に建てられており、これを延長するとちょうど井泉に当たるのは興味深いところである。

このように本遺跡では斐伊川のほとりにおいて古代の人々にとって身に及ぶ様々な災禍を神祀りによって克服しようとした人々の精神世界の一端が窺われた。

今後、祭祀関係に伴う集石状あるいは配石状の遺構についてさらに多くの事例を待ちたい。

(坂本謙司)

A3区・A4区・C4区出土土器・土製品数量比較表

(数量は枚片数を表わす。土師質須恵器は須恵器に含め、弥生上器・陶磁器は除く)

	A3	A4	A3+A4	C4	合計
須 恵 器	环(身)	22	101	123	117
	环	10	49	59	201
	高台付坏	3	17	20	69
	低脚环・高环	7	8	15	39
	短柄壺・長柄壺	2	9	11	58
	皿・盤				57
土 器	甕・甌(鉢)	37	11	48	630
	不明・その他	9	3	12	6
	坏	103	207	310	89
	赤色塗彩	24	174	198	113
	高台付杯	4	8	12	18
	高杯	0	0	0	1
舞 器	皿・盤	3	1	4	40
	甕・甌(鉢)	135	1889	2024	692
	黒色土器	1	3	4	8
	手握上器	4	2	6	0
	勾口土器		23	23	0
	不明・その他	35	140	175	178
土 製 品	土馬		1	1	0
	土製文御		30	30	10
	土鏡・土玉		1	1	1
	甕		3	3	4
	羽口	2	12	14	2
	その他	1	3	4	3
小計		406	2696	3102	2344
					5446

註

- 柳浦俊一「森遺跡・板屜I遺跡・森脇山城跡・阿丹谷辻堂跡」島根県教育委員会 平成6年
- 瀬見 浩「図解技術の考古学」有斐閣選書 1988年
- 遠藤浩己「大家八反田遺跡の概要」島根考古学会例会紙 1996年
- 勝部 昭・西尾克己「西ノ島・兵庫遺跡」「島根県埋蔵文化財調査報告書」第IX集 1982年
- 本書周辺の遺跡（前の舞の古井）を参照のこと。

参考文献

- 「原ノ前遺跡」「朝駒川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 1995年
- 「古代の土器4 烹炊具（近畿編）」古代の土器研究会編 1996年
- 「出雲国庁跡発掘調査概報」 松江市教育委員会 1970年
- 第2回東日本埋蔵文化財研究会「古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－」（抜粋）東日本埋蔵文化財研究会 1993年
- 大谷亮二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』 第11集 島根考古学会 1994年
- 「高広遺跡発掘調査報告書」 島根県教育委員会 1984年
- 玉口時雄「土師器・須恵器の知識」 東京美術考古学シリーズ17 1991年
- 中村 浩「研究入門須恵器」 柏書房 1990年
- 蓮岡法暉・西尾克己「仁多・カネツキ免遺跡」『島根県埋蔵文化財調査報告書』 第XI集 1985年
- 「出雲国分寺跡発掘調査報告書」 松江市文化財調査報告書 第61集 1995年

第4章 石壙地区の調査

第1節 石壙遺跡の調査概要

1. 遺跡発見の経緯

木次町教育委員会保管の遺跡カード（昭和48年作製）や『木次町誌』（昭和47年）によると、亀山氏宅地の裏手部分拡張（昭和42年頃）に伴って山石を多く混じた粘質土中から石斧1点が採取されたことにより「石壙石斧出土地」とされ、のちに「石壙遺跡」と改称されたところである。またこのカードの注記によると昭和2年頃家の後山が崩れたことがありその時の土中から出土したか、とある。現地の状況からすると山腹ではなく狭小で急な小谷の下端にあたることから、山崩れとあるのはこの谷を流下した土石の堆積であった。

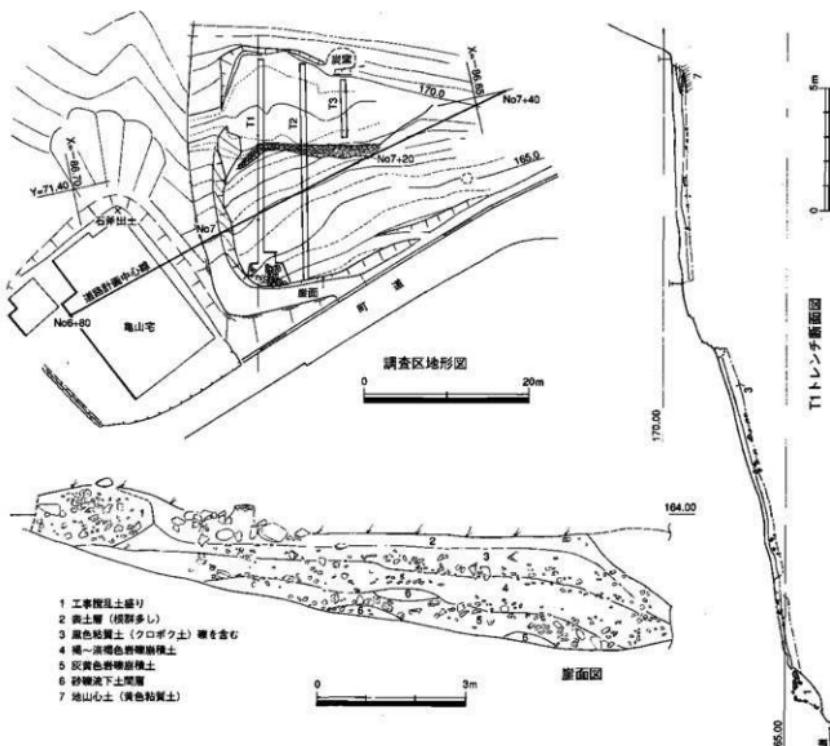


図52 石壙地点地形測量図

と思われる。なお、遺跡カードには遺跡範囲の記載がない。また出土した石斧は近年まで現存したが、今日所在が不明であり実見していない。

2. 調査の概要（図52）

調査は先ず遺跡の範囲と性格を把握することとし、地形測量ののちトレンチ試掘を行った。かつて遺物の採取された地点は建物（民家）であるため、その上手後背丘腹の緩斜地を調査対象とし、ダム工事用作業道路敷設予定中心線にそって限定した。等高線に直交する3本のトレンチと上方山腹部との境をなす切崖面及び現林道によって切られた前方崖面も観察した。（T1トレンチ図のみ示し、他は省略した。）

最上部は山裾をカットして削平した10×25mほどの旧宅地で、前面は石垣積みである。この平面の半ばまでは地山を強く削り出し前半部はその土で盛土してあった。これより下方は自然地形緩斜面で林地である。この斜面前端の崖面で土層序をみると、下部基層は厚さ2m以上岩礫でさらに深く続く崩積疊層で、その上面に山礫を含む黒色土が50～70cm堆積しており、その黒色土層上面が風化の進んだ表土となっている。

また前端崖上部分に2×2.5mほどの範囲に入頭大の川石の集積部があった。これはすべて現地表土に置かれたもので地面は単なる自然面であった。聴取りにより、この石群はかつて林道敷設時に中～近世墓と覺しきあたりのものを採取し、それを一括してここに置いたことが判った。

トレンチは黒色土層を石礫の多くなるあたりまで下げたが、遺物は全くなく人工的な面も認められなかった。

3. 遺跡地の判定

以上の結果から、試掘地点は遺跡の範囲には該当せず、かつて発見された石斧も、その上方狭い谷間を流した崩土中に包含していたものであろう。従って本来はもっと山腹上方に由来するものと推察される。

（杉原清一）

第2節 下垣内地区の調査（図53・54）

下垣内地区は斐伊川を東に見降ろす山腹にあり、この平坦地周辺を調査区として平成9年10月7日より試掘と地形測量を開始した。上段部の平坦面と下段部の緩斜面について掘削を行なったところ、いずれの地点も手が加えられた形跡ではなく、遺物も存在しなかった。近世の畠地であろうと思われたため、12月12日最終の測量を行ない調査を終了した。

（坂本諭司）

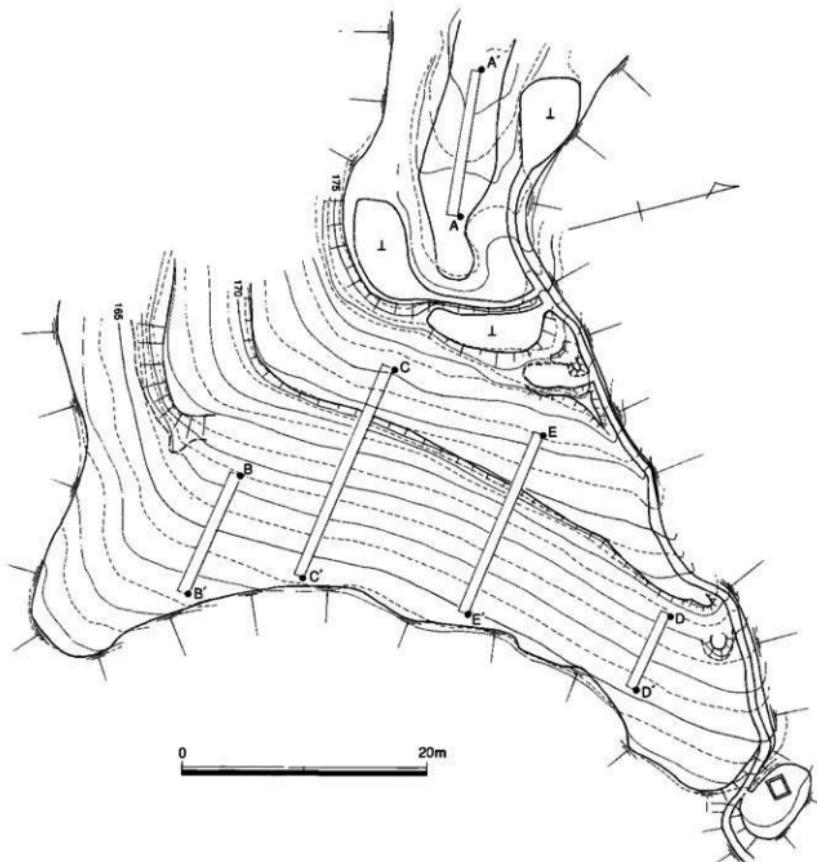


図53 下垣内地区地形測量図

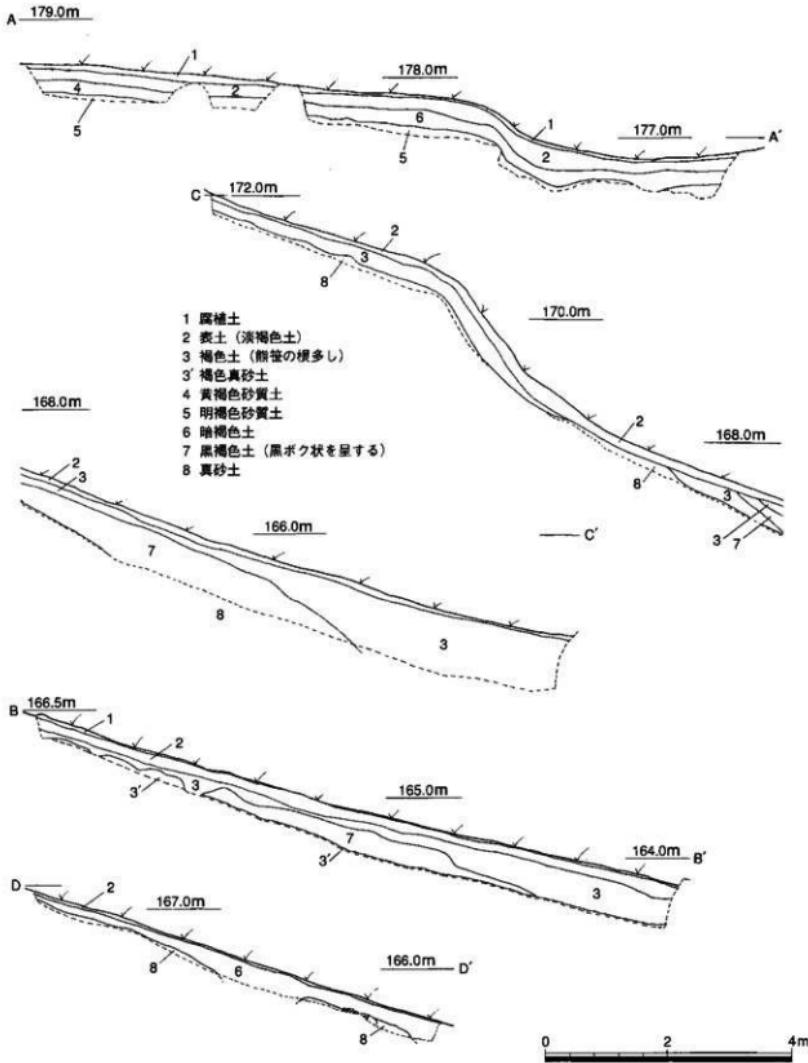


図54 下垣内地区土層図

付編 I

家の上遺跡出土鉄滓の調査

日立金属株式会社冶金研究所

和鋼博物館 佐藤 豊

家の上遺跡は島根県大原郡木次町大字平田に所在し、尾原ダム建設の敷地内に位置するため木次町教育委員会が事前発掘調査を行ったものである。遺跡は斐伊川の中流域に当たる標高270mの山岳に囲まれた盆地状の河岸段丘にあって7世紀末～8世紀の祭祀遺跡といわれ、一部の砂質畠地で深さ約80cmから近世のものと思われる炉床の一部が検出された。付近から採取された鉄滓について分析調査の依頼があったので金属学的調査を行った。その結果と若干の考察を加えたので併せて報告する。

1. 資 料

資料の明細および外観をそれぞれ表1、写真1～8に示す。

表1 資料の明細

番号	資料名	明細	重量(g)
No.1	木次町家の上遺跡 B 2 鉄滓	幅約90mm、長さ約80mm、厚み約40mm、表面やや赤味があり緻密で重たい感じ、底面側はやや平坦。	670
No.2	木次町家の上遺跡 B 2 鉄滓	幅約90mm、長さ約60mm、厚み約45mm、表面やや赤味を帯び凹凸状なるも重たい感じの鉄滓、幅90mmの溝を流れた感じのもの。	420
No.3	木次町家の上遺跡 C4黒褐色土上層鉄滓	幅約50mm、長さ約40mm、厚み約30mm、表面やや赤味を帯びる。 幅50mmの溝を流出した感じ断面緻密で重たい感じ。	110
No.4	木次町家の上遺跡 C 4 鉄滓	幅約75mm、長さ約45mm、厚み約25mm、表面やや赤味を帯び 幅75mmの溝状を流れ出た感じのもので緻密で重たい感じ。	140
No.5	木次町家の上遺跡 C 4 N o . 3 3 鉄滓	幅約50mm、長さ約30mm、厚み約50mm、断面緻密でやや黒味。 幅50mm、高さ50mmの羊カン状の鉄滓。	170
No.6	木次町家の上遺跡 A 4 鉄滓	幅約50mm、長さ約40mm、厚み約40mm、表面やや赤味を帯び断面緻密。重たい感じの鉄滓。幅50mm、深さ40mmの溝を流出した感じ。	145
No.7	木次町家の上遺跡 A4黒褐色土中鉄滓	幅約70mm、長さ約50mm、厚み約50mm、断面緻密で重たい感じ、表面やや赤味を帯びる。幅70mmの溝を流出した感じ。	220
No.8	木次町家の上遺跡 A4 3次No.7鉄滓	幅約70mm、長さ約50mm、厚み約40mmのもので、表面黒色で光沢あるもようやく流れ出た感じの鉄滓で表面凹凸状。	240

2. 化学組成

各資料から分析試料を採取し化学分析を行った。各資料の化学組成を表2に示す。化学分析は溶液発光分光分析法（ICP分析）により行った。

表2 家の上鉄滓の化学組成(重量 %)

資料 化学組成	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8
T.Fe	58.45	63.25	59.54	62.48	46.92	56.58	53.87	41.58
FeO	58.29	62.64	18.55	57.22	46.89	55.18	52.57	42.35
Fe ₂ O ₃	18.11	20.16	58.05	25.08	14.37	18.94	17.69	12.01
M.Fe	0.47	0.46	4.52	0.46	0.42	0.44	0.64	0.26

3. 顕微鏡組織

各資料の顕微鏡組織を写真9~16に示す。

資料No.1はヴスタイト+ファイヤライト組織が主体である。

資料No.2はヴスタイト+ファイヤライト組織が主体である。

資料No.3はヴスタイト+ファイヤライト+ゲーサイトそれに僅かのウルボスピネル組織が主体である。

資料No.4はヴスタイト+ファイヤライト組織が主体である。

資料No.5はヴスタイト+ウルボスピネルが主体である。

資料No.6はヴスタイト+ファイヤライトそれに僅かのウルボスピネル組織が主体である。

資料No.7はヴスタイト+ファイヤライトそれに僅かのウルボスピネル組織が主体である。

資料No.8はウルボスピネル+ファイヤライト組織が主体である。

4. 考 察

本資料鉄滓が製鍊滓か鍛冶滓かのみの判断を早急にとの分析を依頼を受けたので、とりあえず鉄分と顕微鏡組織から考察を行ってみる。

(1) 製鍊滓か鍛冶滓か

鍛冶滓に対する製鍊滓の特徴を列挙すると次ぎの通りである。

①全鉄分が低目である。

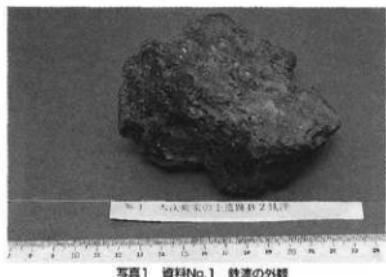
②ヴスタイト(FeO)の生成が少ない。

③赤目系砂鉄使用の場合ウルボスピネル組織の晶出が多い。

④形状については製鍊滓が流動性のよい滑らかな面を持つのに対し、鍛冶滓は凹凸状である。

(2) 資料No.1、No.2、No.4鉄滓について

鉄分58.45%~63.25%と高く、写真9、10、12の顕微鏡組織では鍛冶滓の特徴であるよく発達したヴスタイト+ファイヤライト組織であることから鍛冶滓と判断される。



No.1 本次町家の上道路B 2號鉄滓

写真1 資料No.1 鉄滓の外観



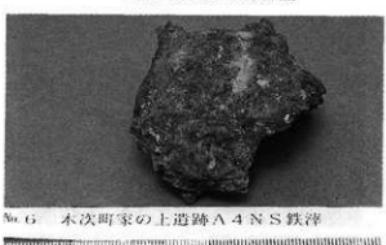
No.5 本次町家の上道路C-4 6.33鉄滓

写真5 資料No.5 鉄滓の外観



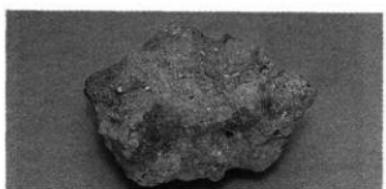
No.2 本次町家の上道路B 2號鉄滓

写真2 資料No.2 鉄滓の外観



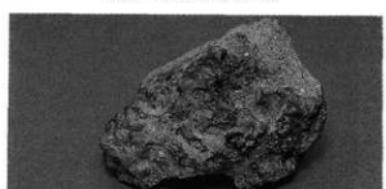
No.6 本次町家の上道路A-4 N S 鉄滓

写真6 資料No.6 鉄滓の外観



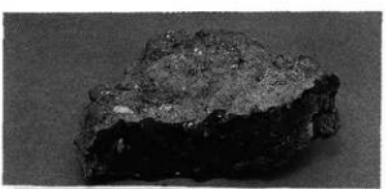
No.3 本次町家の上道路C-4 黒土層鉄滓

写真3 資料No.3 鉄滓の外観



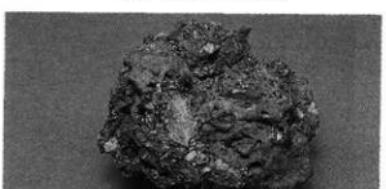
No.7 本次町家の上道路A-4 0.4-0.5 鉄滓

写真7 資料No.7 鉄滓の外観



No.4 本次町家の上道路C-4 鉄滓

写真4 資料No.4 鉄滓の外観



No.8 本次町家の上道路A-4 3次塗アスファルト

写真8 資料No.8 鉄滓の外観

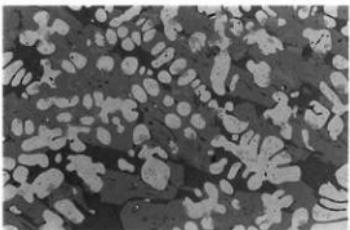
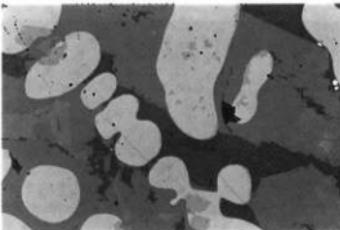


写真9 資料No.1 鉄滓



(×400)

白色結晶はグスタイト
淡灰色の板状結晶はファイアライト

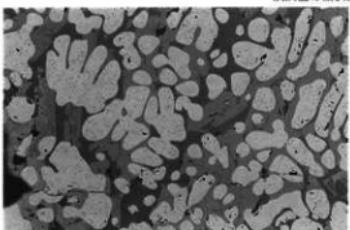
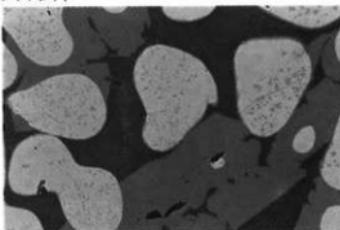


写真10 資料No.2 鉄滓



(×400)

白色結晶はグスタイト
淡灰色の板状結晶はファイアライト

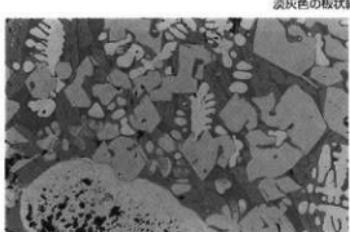


写真11 資料No.3 鉄滓



(×400)

白色結晶はグスタイト
淡灰色の板状結晶はファイアライト
やや白色結晶はウルボスピニエル

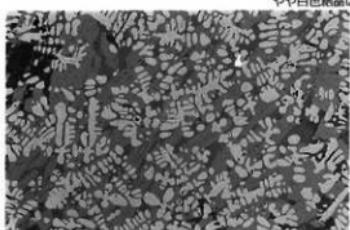
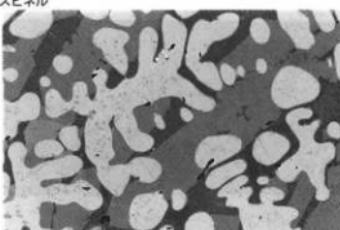


写真12 資料No.4 鉄滓



(×400)

白色結晶はグスタイト
淡灰色の板状結晶はファイアライト

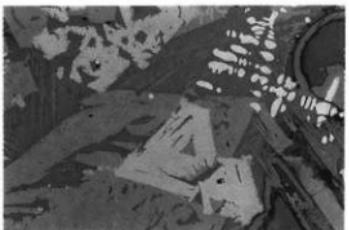
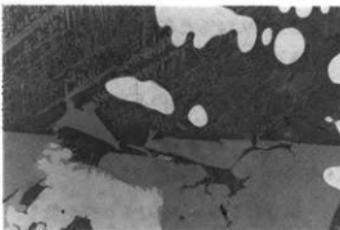


写真13 資料No.5 鉄滓

(×100)



(×400)

小さな白色結晶はウスタイト
淡白色の角形結晶はウルボスピニル
淡灰色の板状結晶はファイヤライト

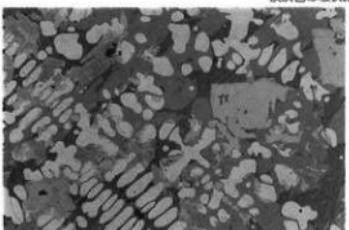


写真14 資料No.6 鉄滓

(×100)



(×400)

白色結晶はウスタイト
淡灰色の板状結晶はファイヤライト
やや白色の角形結晶はウルボスピニル

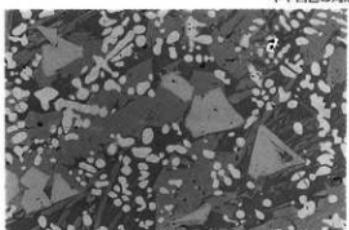
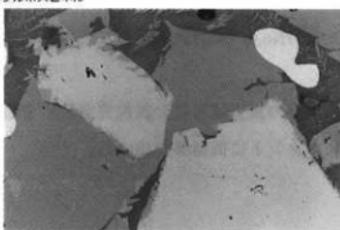


写真15 資料No.7 鉄滓

(×100)



(×400)

白色結晶はウスタイト
淡灰色の板状結晶はファイヤライト
やや白色の角形結晶はウルボスピニル

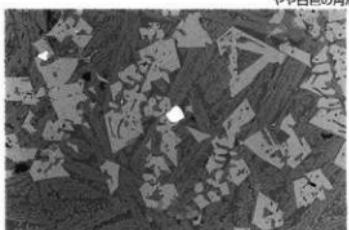
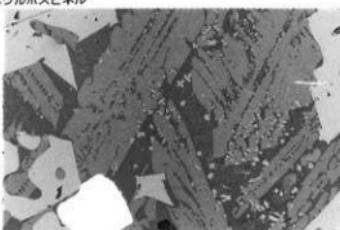


写真16 資料No.8 鉄滓

(×100)



(×400)

やや白色の角形結晶はウルボスピニル
淡灰色の板状結晶はファイヤライト

(3)資料No.3について

鉄分59.54%と高いが、写真11の顕微鏡組織ではヴスタイト組織が少ないと、ウルボスピネル組織が認められることから製鍊滓と判断される。また金属鉄が4.52%と高いが、写真11の下方に大きな結晶が見られるがこれはFeの酸化物であり、炉温がやや低目の操業で鉄分離がやや悪かったのではないかろうか。

(4)資料No.5、No.8鉄滓について

鉄分41.58%～46.92%とやや低く、写真13、16の顕微鏡組織をみるとウルボスピネル+ファイヤライト組織であることから鍛冶滓ではなく製鍊滓と判断される。

(5)資料No.6、No.7鉄滓について

鉄分53.87%～56.5%とやや高いが、写真15の顕微鏡組織をみるとウルボスピネル組織があることと、ヴスタイト結晶がやや少ないこともあって製鍊滓の可能性が高い。

5. 結 言

本次町家の上遺跡からの出土鉄滓について調査を行った。結果を要約すると次の通りである。

- (1)資料No.1、No.2、No.4鉄滓は鍛冶滓と推定した。
- (2)資料No.3、No.5、No.8鉄滓は製鍊滓と推定した。
- (3)資料No.6、No.7鉄滓は製鍊滓の可能性が高い。

以上の調査は日立金属株式会社冶金研究所で実施し、日立金属テクノス清永主管コンサルタントに御指導を頂いた。

付編Ⅱ

家の上たら跡より発掘された 木炭の¹⁴C年代測定

大阪府立大学先端科学研究所アイソトープ総合研究センター

川野 瑛子・柴田せつ子

1. はじめに

島根県大原郡木次町教育委員会より測定依頼を受けた家の上遺跡たら跡より出土した木炭の¹⁴C年代測定結果について報告する。

2. ¹⁴C年代測定法の原理（略）

3. 測定方法

試料は炭化物とし、燃焼させて生じる炭酸ガスをメタノールへ導く。このメタノールの¹⁴C放射能を液体シンチレーション法により測定し、試料の年代を計算する。^{(1),(2)}

1) 試料の前処理

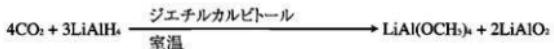
提供された試料は下記のような前処理を行った。

- ①試料に付着している土及びひげ根などの夾雑物は除去する。試料は、小片に碎く
- ②試料は1N-塩酸で、数時間加熱処理する。処理後、洗浄液が中性になるまで十分水洗を行う
- ③乾燥させた試料は、電気炉で600℃、6時間蒸焼き処理し炭化物とする

2) 炭化物試料からメタノールの合成

試料を燃焼管中で燃焼させ炭酸ガス(CO₂)とし、このCO₂をリチウムアルミニウムハイドライド(LiAlH₄)と反応させメタノールを合成する。方法としては直接法と分離法がある。直接法とはCO₂をLiAlH₄のジエチルカルビトール懸濁液に直接導く方法である。分離法は試料量が少ない場合に適用する。今回は直接法を採用し、同一試料の3点抽出とすることでサンプリングに際してさらに細かく碎き均質にして反応に供した。合成したメタノールは精留塔を用いて反応溶液から蒸留により取り出し、再び蒸留することにより精製した。

CO₂からメタノール合成の化学反応式は次のとおりである。



3) 液シンチレーションカウンターによるメタノールの¹⁴C放射能測定

液体シンチレーションカウンターとしてはパッカード社製のトライカーブ2260XL型を使用、測定領域は18.4～84.0KeVに設定。シンチレーターとしてはButyl-BPDの30 g、bis-MBSの0.45 gをキシレン1mℓに溶かしたもの用いた。各試料から合成、精製したメタノールの約7 gを市販の20mℓ−低カリガラス製パイアルに入れ、全量が11.0 gになるように上記キシレンシンチレーターを加え測定用の試料カクテルとした。なお、バックグラウンド計数値は市販の天然ガスから合成されたスペクトル用メタノール(DeadCarbon)を用いて、試料と同じ組成のカクテルをつくり、そのカクテルを測定することにより求めた。測定は試料カクテルとバックグラウンドカクテルを100分ずつ交互に行い、必要な時間繰り返し測定した。なお、年代計算に必要な標準シュウ酸から合成したメタノール試料についても同じ方法により液シン測定を行った。

4. ¹⁴C年代値の算出と結果

前項の液シン測定で得られた標準シュウ酸、試料及びバックグラウンドの測定値(dpm/gC)を用いて試料の年代値を計算することができる。ここでは新しいNISTシュウ酸(SRM4990C)を用いたので、1.2933で除した値の95%をAo(13.540 ± 0.027 dpm/gC)とした。(SRM4990CとSRM4990の¹⁴C濃度の比は1.2933と報告されている。)なお、計算に際して¹⁴Cの半減期としてはLibbyの提唱している5568年を使用した。また、¹⁴C年代値の表示法としては、1950年を起点としてこの年より幾年前であるかで示しており、年代値の後にB.P.なる文字を添えるのが慣例である。¹⁴C年代値には必ず測定誤差が伴い、その相対誤差1%は80年となる。誤差は、通常1標準誤差で表示、繰り返し測定を行った場合、測定値が誤差の範囲に入るものが全測定の68%であることを意味する。2標準誤差をとる場合は誤差の範囲は2倍になるが95%がその範囲に入る。最後にCALIBrev.3.03の較正曲線を用いて¹⁴C年代から暦年代(範囲と確率)を算出した。

以下に測定結果を示す。¹⁴C年代、暦年代とともに1標準誤差で表示。

試料名	当方コード	¹⁴ C年代値 y.B.P.	較正年代(暦年代)		
			範囲	確率(%)	
①サンプリング1	OR-129	280±30	AD 1525-1558	39	
			AD 1631-1662	61	
②サンプリング2	OR-130	270±30	AD 1529-1546	15	
			AD 1634-1668	77	
③サンプリング3	OR-131	270±35	AD 1787-1792	0.05	
			AD 1949-1952	0.03	
3点平均値		272±19	AD 1527-1553	23	
			AD 1633-1669	68	
			AD 1786-1792	0.05	
			AD 1949-1953	0.04	
3点平均値			AD 1643-1657	100	

参考文献

1. W.F.Libby;Radiocarbon Dating,2nd Ed.,the Univ.of Chicago Press,Chicago(1950)
2. S.Shibata,E.Kawano,T.Nakabayashi,S.Kawamura and O.Yamada,Ann.Rep.Rad.Ctr.Osaka 27,99(1986/1987)
3. CALIBrev3.03,Stuiver,M.and Reimer,P.J.,1993,Radiocarbon,35,p.215-230

付編Ⅲ

家の上遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学

三辻 利一

遺跡出土須恵器の产地問題は窯跡に結び付けることによって解決できる訳であるが、実際に、特定の遺跡から出土した須恵器を、仮りに100点分析し、その产地を決めようとすると、分析値から機械的に产地を推定できる訳ではない。まだまだ、整備しなければならない点が多くある。その場合、100点の試料をK、Ca、Rb、Srの4因子を使って、機械的にコンピュータを使って計算し、クラスター分類することも可能である。しかし、近年、K-Ca、Rb-Sr分布図の分布の違いがよく見えるようになってきたので両分布図上で分類を試みることにした。

まず、今回分析した試料の分析値を表1にまとめてある。全分析値は同時に測定した岩石標準試料、J G -1による標準化値で示されている。このうちのK、Ca、Rb、Srの分析データを使い、K-Ca、Rb-Srの両分布図を作成した。この場合、100点の試料を一度にプロットすると、点が込み入るので、分けて分布図を作成した。No.1~34を図1に、No.35~68を図2に、そして、No.69~100を図3に示してある。

図1をみると、大きく、A、B、Cの3群に分類できることがわかる。A群とB群が主成分であり、C群は家の上遺跡にとっては小数派グループである。そこで、主成分の土器であるA群とB群に分類された試料群を包含するようにして、A群領域とB群領域をつくり、比較対照のため基準領域とすることにした。A、B群領域に対し、C群の試料は明らかに別胎土であることがわかる。

分類結果は表1にも示してあるが、A、B両群領域に入った試料はそれぞれ、A群、B群としたが、A、B領域を多少ずれるものは一応、A'、B'としておいた。A、B領域は任意に長方形に描かれただけで、その領界についてはとくに定量性はない。試験研究の段階では、厳密な定量性をもつ領域を描くよりも、多少、含みのある定性的な領域を描いておく方が分析データの取扱いは容易である。例えば、C群と分類されたNo.12、14、17、23、33の5点の試料はK-Ca分布図ではよくまとまって分布しているが、Rb-Sr分布図ではNo.12のみが少しづれて分布する。一見、C群ではないようにみえるが、図5のNa因子をみると、C群に含める方が妥当であることがわかる。

図2には、No.35~68の試料の両分布図を示してある。この図では両分布図でA、B群領に分布する試料は少ない。Rb-Sr分布図をみると、No.43、48、50、57の4点はまとまって

分布しており、1群を形成する可能性がある。そこで、K-Ca分布図をみると、これら4点はA、B両群の中間領域にまとまって分布することがわかる。そこで、これらを新たにD群とした。D群は図4のFe因子、図5のNa因子でもまとまって分布しており、D群の形成が妥当であることを示している。

この結果、図2でA群領域に分布するのはNo.51、58、60、61、62、65、68の7点であり、No.45、46、54、55、56、63の6点がA群的であるとして、A' と分類された。B群に分類されたのはNo.36、59、66、67の4点であり、D群に分類されたのはNo.43、48、50、57の4点である。他のものは不明品となった。

図3には、No.69~100の試料の両分布図を示す。A、A' 群に分類されたのはNo.69、70、71、72、73、78、79、86、89、91、94の11点であり、B、B' 群に分類されたのはNo.75、76、77、80、81、82、83、85、88、92、93の11点である。C群はNo.74、84、87、90の4点で土製支脚など須恵器でないものは不明となった。この中にたたら炉壁も含まれている。このように、家の上遺跡の土器試料はA、B、C、Dの4群に分類できた。この分類の妥当性をみるため、まず、図4にはFe因子を比較してある。もし、この分類が正しければ、Fe因子でも、いくつかの群に分かれるはずである。図4をみると、A群、C群、D群はFe因子でもよくまとまって1群を形成していることがわかる。B群はD群とともにFe量の多い須恵器であることがわかる。図2の分布からも推察されるように、小数派のD群はB群に近い胎土である。不明品はFe因子でも大きくばらついており、幾種類かの胎土が混合していることを示唆している。

図5には、Na因子を比較してある。C群はNa量の多い胎土であり、逆にD群はNa量の少ない胎土で、両者はそれぞれ、よくまとまっていることがわかる。こうして、C、D群の分類は正しかったことが裏付けられる。不明品はNa因子でも大きくばらついており、幾種類もの胎土が混合していることは明らかである。

かくして、家の上遺跡の土器製品はA、B、C、Dの4群に分類できることがわかる。

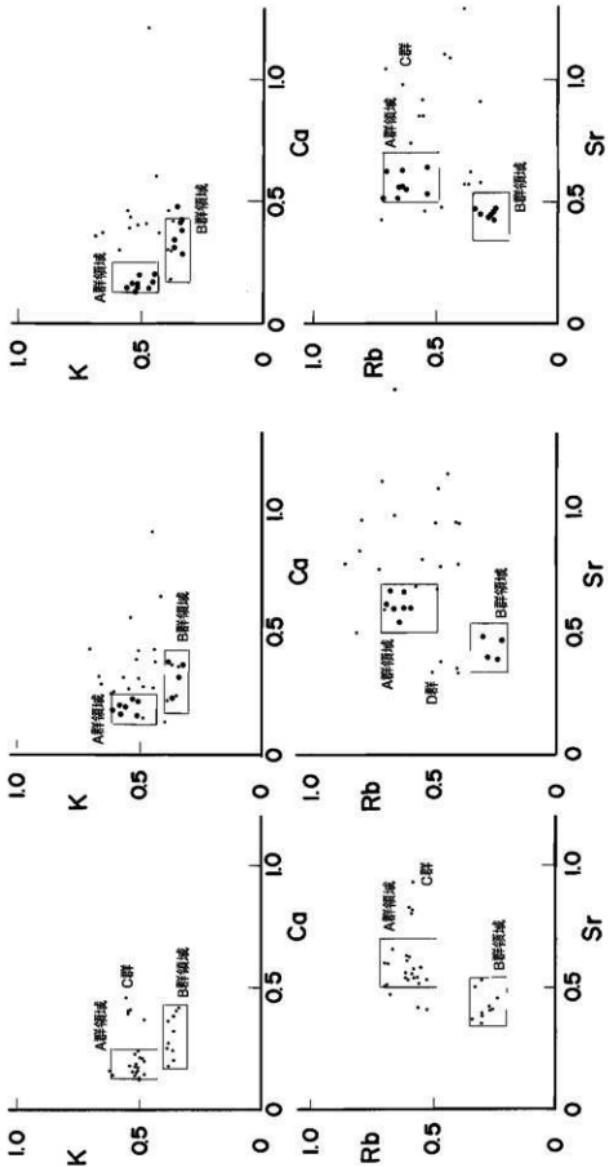
A群は43点、B群が25点、C群が9点、D群が4点で、不明品は19点であった。

A群領域は松江市周辺にある大井窯群の須恵器の分布領域にはほぼ対応する。地元、出雲地域産の須恵器と推定される。ところが、出雲地域にはもう一つ別胎土の須恵器があることがわかっている。それがB群に対応する。Fe量が多く、K、Rb量が少ない胎土であり、坏類の胎土が多い。表1をみると、B群と分類された試料もやはり、坏類が多い。B群の胎土もまた、地元、出雲地域産と推定される。したがって、今回分析した試料の中の約7割が在地産であったことになる。実際、100点の試料の中にはたたら炉壁とか、土製支脚

などの須恵器以外のものが不明品の中に含まれているから、このことを考慮に入れると、8割以上もの須恵器が在地産であったということになる。

少数派のC群、D群は外部からの搬入品である可能性もある。

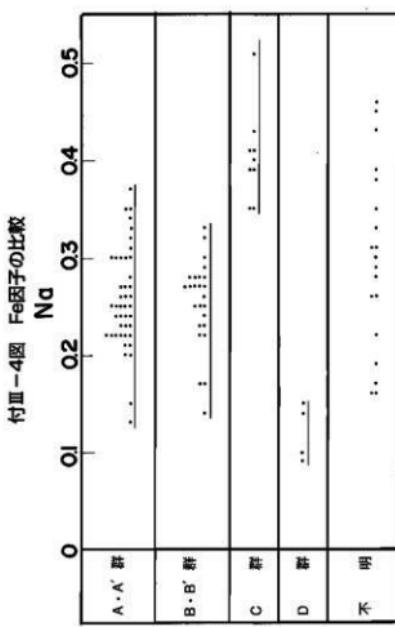
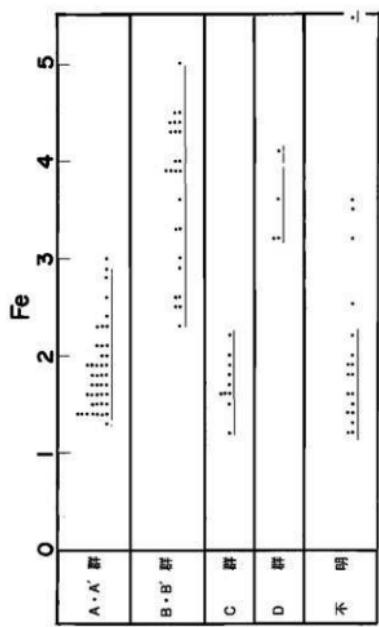
雲母を含む、丹塗りの土器にはCa、Sr量が多く、異常な胎土であった。外部からの搬入品と推定されるが、比較資料がないのが残念である。



付Ⅲ-1図 第1グループの両分布図

付Ⅲ-2図 第2グループの両分布図

付Ⅲ-3図 第3グループの両分布図



直径		外周長		内周長		外径		内径		壁厚		セイの割合	
No.	寸法	K	C _b	P _b	1.65	1.65	1.65	1.65	1.65	1.65	1.65	1.65	1.65
10-1906	1.44	0.510	0.161	0.541	0.575	0.575	0.575	0.575	0.575	0.575	0.575	0.575	0.575
1907	2	0.508	0.214	2.10	0.643	0.606	0.534	0.534	0.534	0.534	0.534	0.534	0.534
1908	3	0.507	0.142	2.10	0.532	0.534	0.534	0.534	0.534	0.534	0.534	0.534	0.534
1909	4	0.515	0.185	2.31	0.610	0.524	0.524	0.524	0.524	0.524	0.524	0.524	0.524
1910	5	0.385	0.233	3.97	0.275	0.408	0.275	0.275	0.275	0.275	0.275	0.275	0.275
1911	6 A3	0.544	0.236	4.38	0.304	0.366	0.342	0.342	0.342	0.342	0.342	0.342	0.342
1912	7 A4	0.513	0.169	1.76	0.618	0.562	0.526	0.526	0.526	0.526	0.526	0.526	0.526
1913	8 + -15	0.345	0.405	2.95	0.297	0.529	0.210	0.210	0.210	0.210	0.210	0.210	0.210
1914	9 +	0.523	0.178	1.78	0.691	0.597	0.255	0.255	0.255	0.255	0.255	0.255	0.255
1915	10 + -8	0.499	0.227	2.99	0.422	0.422	0.254	0.254	0.254	0.254	0.254	0.254	0.254
1916	11 + -25	0.344	0.411	4.13	0.237	0.462	0.152	0.152	0.152	0.152	0.152	0.152	0.152
1917	12 + -K	0.481	0.356	2.94	0.667	0.667	0.313	0.313	0.313	0.313	0.313	0.313	0.313
1918	13 +	0.507	0.238	1.90	0.596	0.561	0.235	0.235	0.235	0.235	0.235	0.235	0.235
1919	14 +	0.545	0.465	1.53	0.599	0.616	0.407	0.407	0.407	0.407	0.407	0.407	0.407
1920	15 + -14	0.523	0.339	1.36	0.681	0.543	0.235	0.235	0.235	0.235	0.235	0.235	0.235
1921	16 + -20	0.477	0.280	2.31	0.549	0.576	0.249	0.249	0.249	0.249	0.249	0.249	0.249
1922	17 + -14	0.546	0.470	1.60	0.597	0.529	0.393	0.393	0.393	0.393	0.393	0.393	0.393
1923	18 +	0.384	0.270	5.00	0.302	0.351	0.266	0.266	0.266	0.266	0.266	0.266	0.266
1924	19 +	0.614	0.140	1.54	0.687	0.514	0.295	0.295	0.295	0.295	0.295	0.295	0.295
1925	20 + -10	0.497	0.125	2.76	0.558	0.413	0.198	0.198	0.198	0.198	0.198	0.198	0.198
1926	21 + -5	0.528	0.151	1.68	0.700	0.697	0.244	0.244	0.244	0.244	0.244	0.244	0.244
1927	22 +	0.529	0.144	1.59	0.578	0.541	0.215	0.215	0.215	0.215	0.215	0.215	0.215
1928	23 +	0.535	0.444	2.10	0.584	0.534	0.310	0.310	0.310	0.310	0.310	0.310	0.310
1929	24 +	0.522	0.230	2.14	0.564	0.520	0.235	0.235	0.235	0.235	0.235	0.235	0.235
1930	25 +	0.581	0.189	4.11	0.296	0.348	0.173	0.173	0.173	0.173	0.173	0.173	0.173
1931	26 +	0.529	0.184	1.88	0.580	0.473	0.235	0.235	0.235	0.235	0.235	0.235	0.235
1932	27 A3	0.381	0.178	2.48	0.340	0.373	0.219	0.219	0.219	0.219	0.219	0.219	0.219
1933	28 A4	0.381	0.177	2.92	0.279	0.360	0.224	0.224	0.224	0.224	0.224	0.224	0.224
1934	29 +	0.540	0.180	1.41	0.690	0.625	0.263	0.263	0.263	0.263	0.263	0.263	0.263
1935	30 + -5	0.497	0.216	2.04	0.658	0.637	0.237	0.237	0.237	0.237	0.237	0.237	0.237
1936	31 + -5	0.355	0.323	1.91	0.526	0.434	0.207	0.207	0.207	0.207	0.207	0.207	0.207
1937	32 + 55	0.547	0.282	4.50	0.261	0.406	0.169	0.169	0.169	0.169	0.169	0.169	0.169
1938	33 +	0.545	0.405	1.65	0.593	0.510	0.255	0.255	0.255	0.255	0.255	0.255	0.255
1939	34 +	0.516	0.151	1.89	0.566	0.535	0.223	0.223	0.223	0.223	0.223	0.223	0.223
1940	35 +	0.663	0.291	1.29	0.666	0.723	0.391	0.391	0.391	0.391	0.391	0.391	0.391
1941	36 +	0.366	0.229	2.58	0.334	0.474	0.266	0.266	0.266	0.266	0.266	0.266	0.266
1942	37 +	0.620	0.253	1.59	0.618	0.626	0.254	0.254	0.254	0.254	0.254	0.254	0.254
1943	38 + -54	0.538	0.559	1.90	0.645	0.511	0.363	0.363	0.363	0.363	0.363	0.363	0.363
1944	39 + 17	0.446	0.912	3.49	0.489	0.499	0.331	0.331	0.331	0.331	0.331	0.331	0.331
1945	40 +	0.569	0.434	3.21	0.413	0.494	0.318	0.318	0.318	0.318	0.318	0.318	0.318
1946	41 + -28	0.585	0.385	2.20	0.411	0.473	0.167	0.167	0.167	0.167	0.167	0.167	0.167
1947	42 +	0.624	0.320	1.42	0.600	0.743	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361
1948	43 +	0.349	0.240	3.19	0.447	0.357	0.093	0.093	0.093	0.093	0.093	0.093	0.093
1949	44 + KK	0.522	0.592	1.89	0.517	0.424	0.254	0.254	0.254	0.254	0.254	0.254	0.254
1950	45 + -14	0.605	0.255	1.52	0.763	0.221	0.163	0.163	0.163	0.163	0.163	0.163	0.163
1951	46 +	0.446	0.275	2.30	0.489	0.449	0.221	0.221	0.221	0.221	0.221	0.221	0.221
1952	47 + -KS	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1953	48 +	0.335	0.359	1.77	0.629	0.654	0.162	0.162	0.162	0.162	0.162	0.162	0.162
1954	49 + -26	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1955	50 +	0.397	0.127	4.11	0.541	0.441	0.161	0.161	0.161	0.161	0.161	0.161	0.161

分析一タ
表Ⅲ付

図 版

図版1



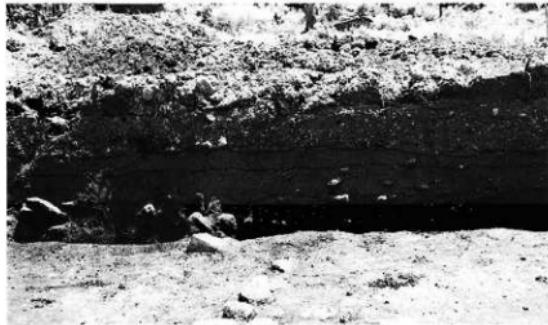
家の上遺跡全景 南より



A区近景 北より



A2区東壁土層状況 南より



A4区土層状況 西より



A4区配石状況 南より
(矢印は上馬出土か所)

A4区配石状況



図版3



A4区配石・土器検出状況 北より

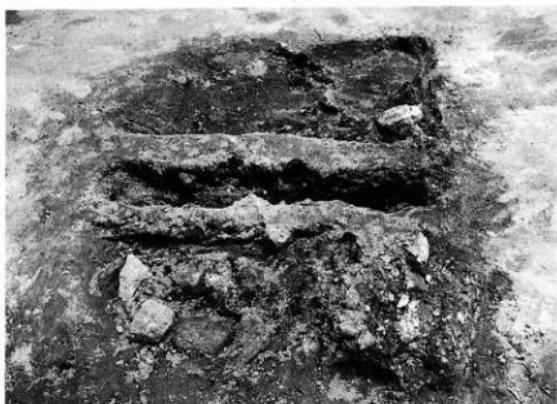


A4区土馬出土状況 東より



A4区配石・土器検出状況 東より

図版4





宋錢天聖元寶



22-15



22-13



B2区 たたら炉床全景（立体視用）

図版6



C4区東壁土層状況 西より



C4区土器漏り（中層）検出状況
南より



C4区土器漏り（下層）検出状況
西より



C4区石組造構検出状況 東より



C4区石組遺物出土状況 南より



C4区石組・鎌出土状況 東より

図版8





C4区水路跡遺物出土状況 北より



C4区水路跡石組X-1検出状況
南より



D4区土層状況 北より



石壙遺跡調査地全景 北より
(民家右後ろが石斧出土地)

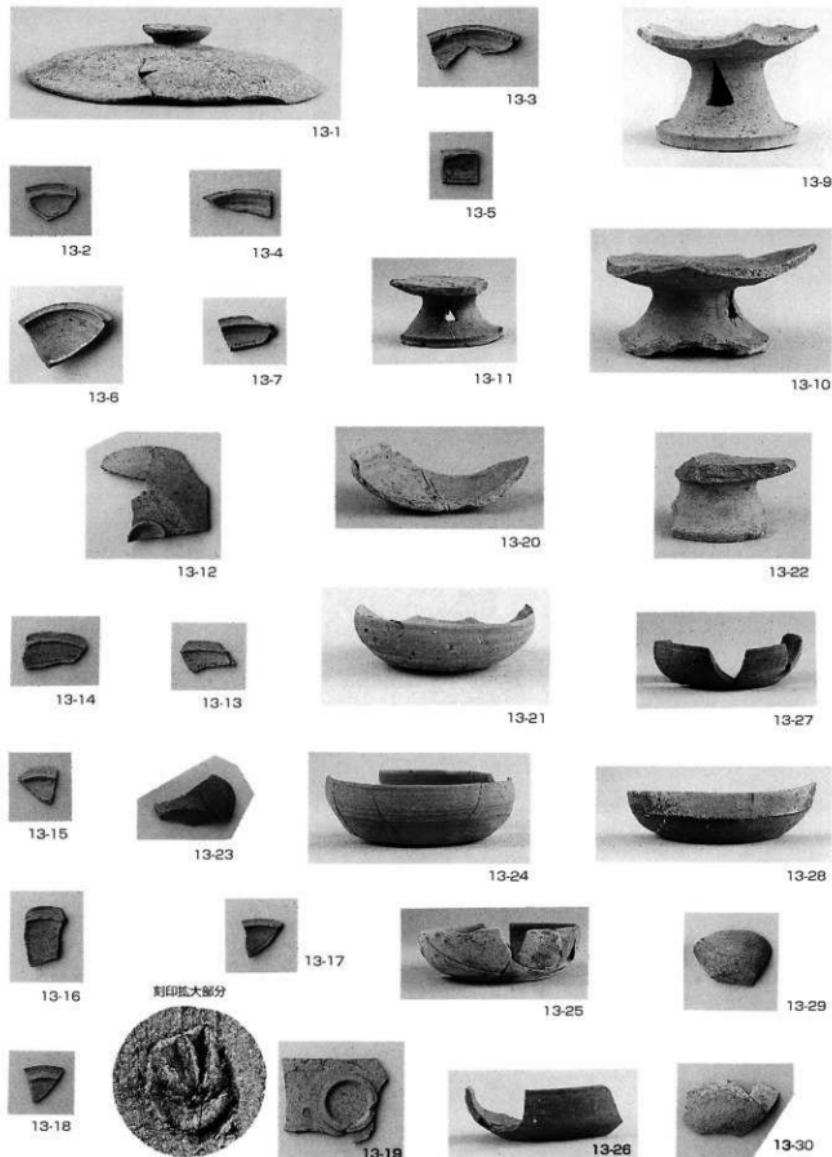


前端部壁面土層状況 東より



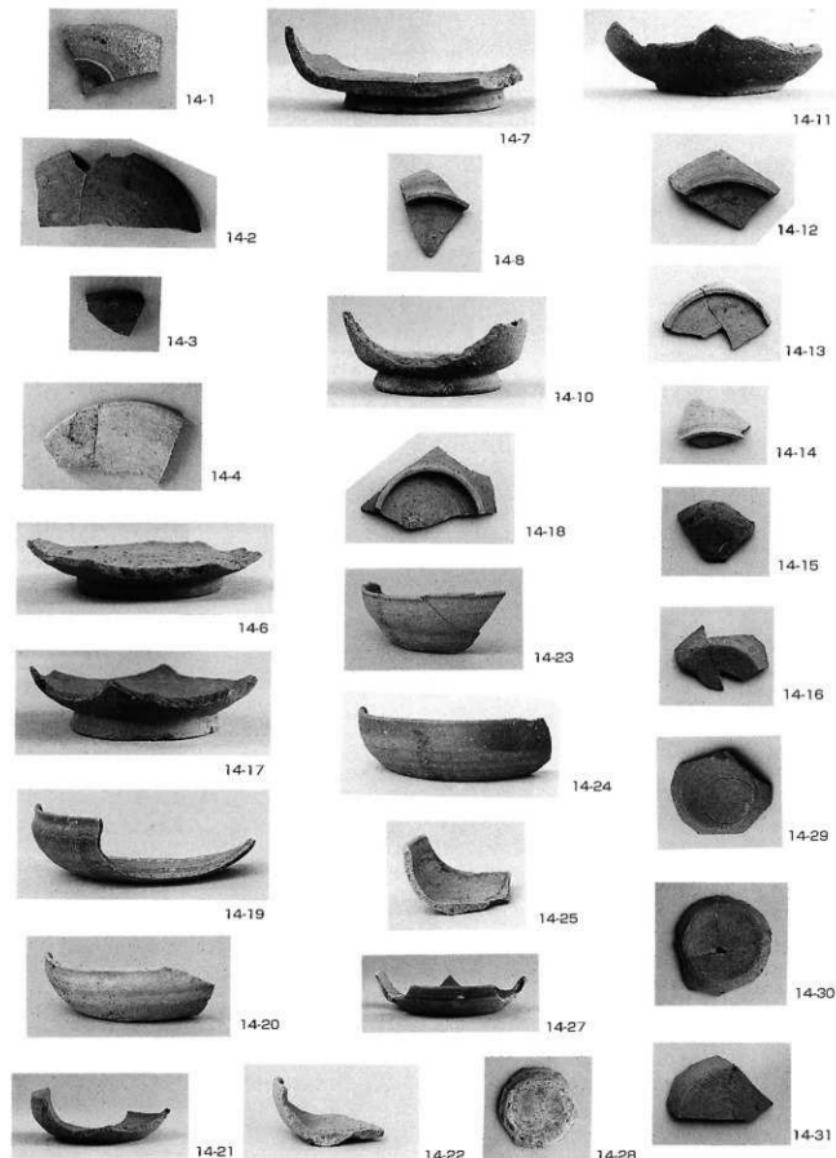
下段全景 西より

図版11



A4区出土土器（須恵器）

図版12



A4区出土土器（須恵器）

図版13



15-1



15-2



15-3



15-4



15-7



製塙土器及び拡大図 (15-18)



15-6



15-9



16-1



16-2



16-3



15-8



16-4



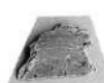
16-5



16-6



16-7



16-8



16-9



16-10



16-11



16-12



16-13



16-15



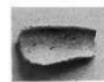
16-16



17-1



17-2



17-3



17-4



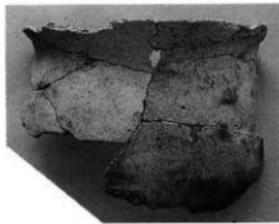
17-5



17-7



17-6



17-8



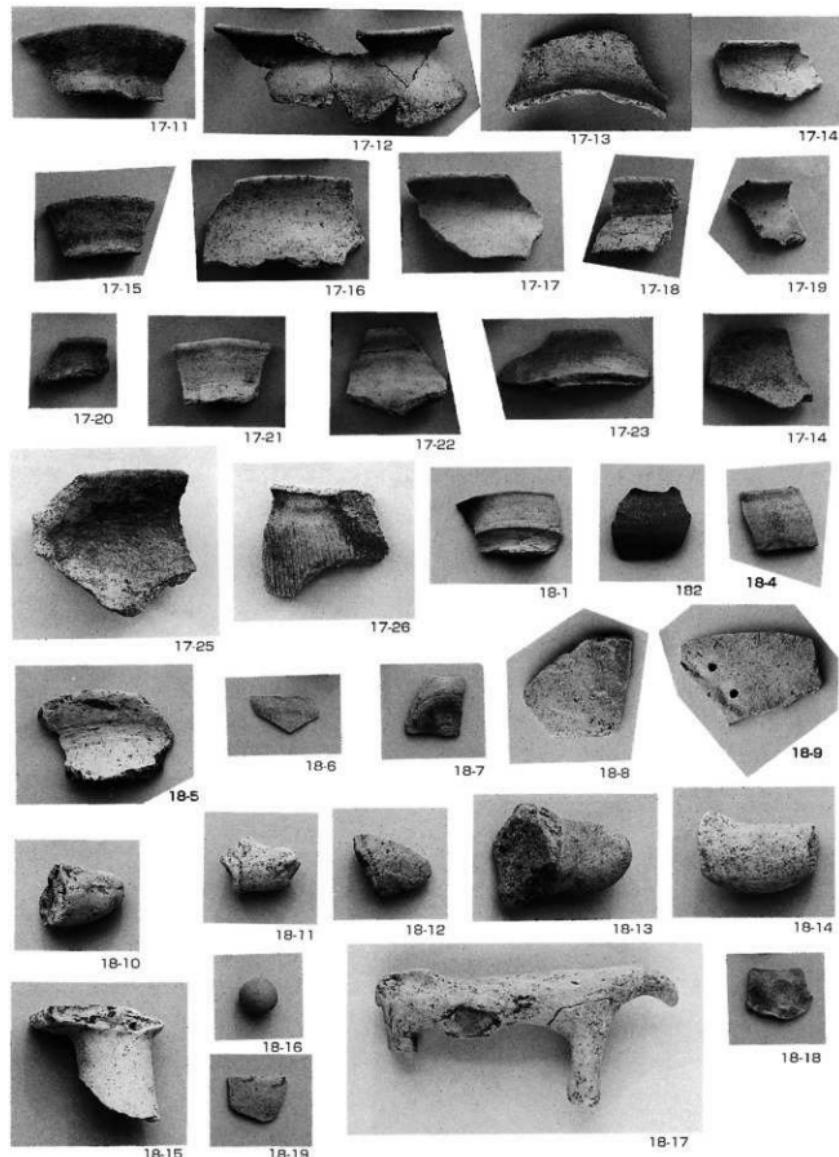
17-9



17-10

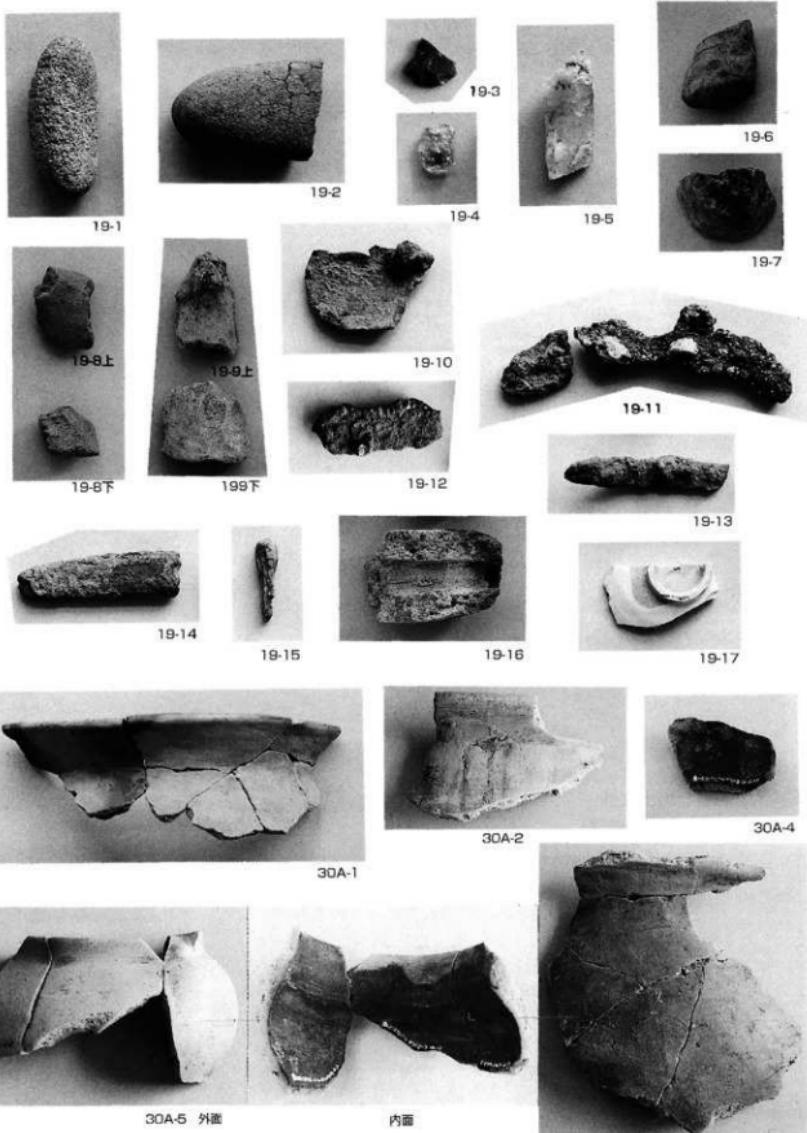
A4区他出土土器（須恵器・土師器）

図版14



A3・A4区出土遺物（土師器・土馬等）

図版15



A3・A4区出土遺物

C4区土器溜り出土土器（土師器）

図版16



30B-1



30B-2



30B-5



30B-4



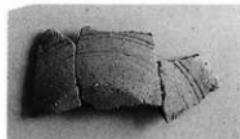
30B-6



30B-8



30B-3



30B-7



30B-11

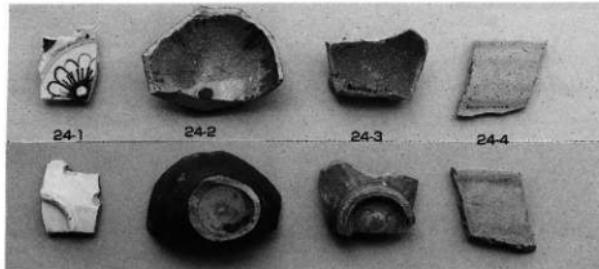


30B-10

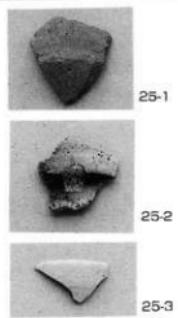


30B-9

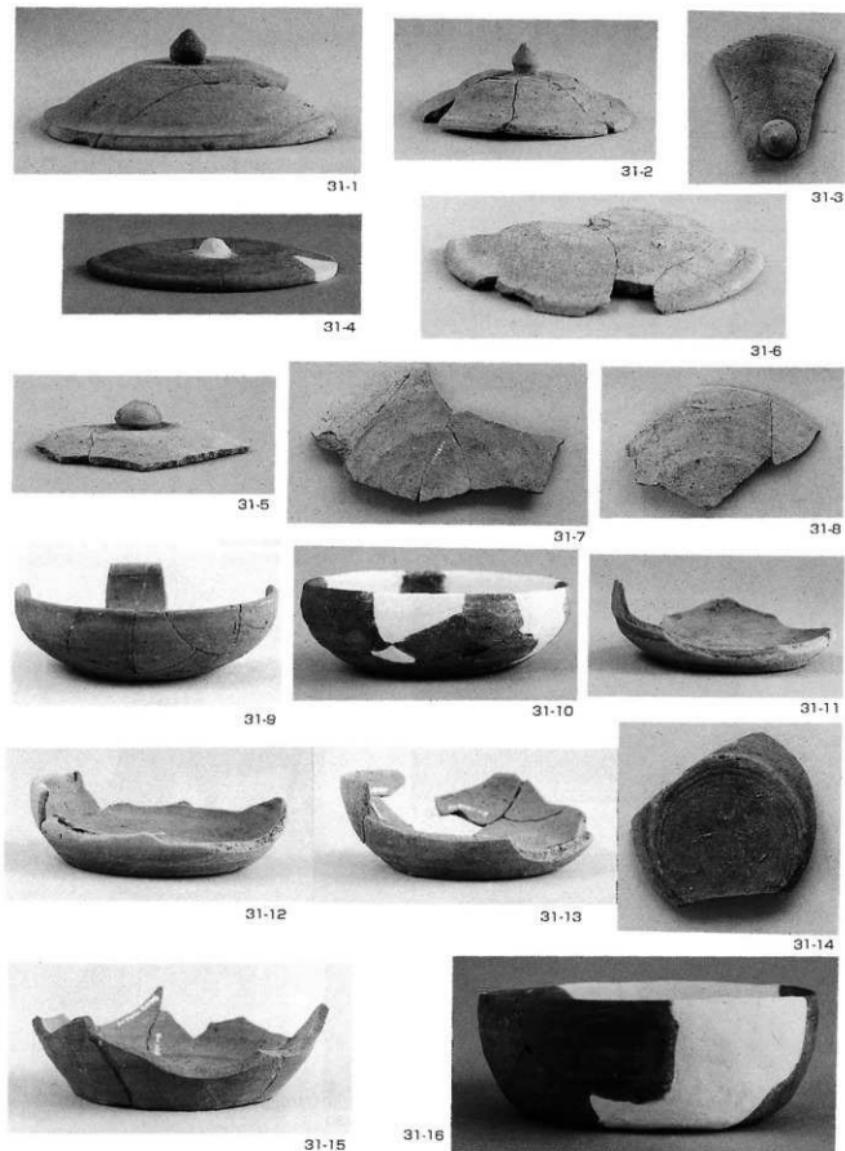
C4区土器溜り出土土器
(土師質須恵器)



C1区出土遺物



C2区出土遺物



C4区土器溜り出土土器（須恵器）

図版18



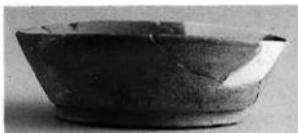
31-17



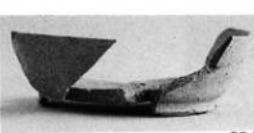
31-18



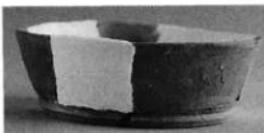
32-1



32-2



32-3



32-4



32-5



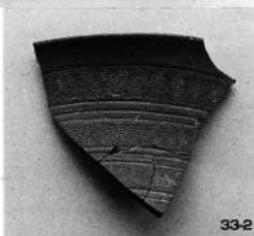
32-7



32-6



33-1



33-2

C4区土器溜り出土土器（須恵器）



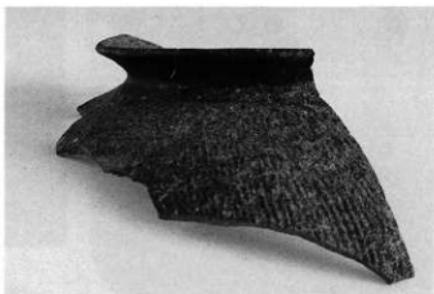
33-3



33-4



33-5



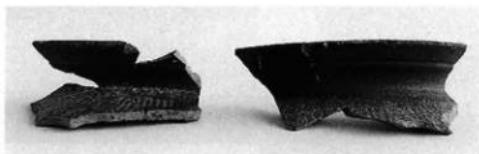
33-6



33-7

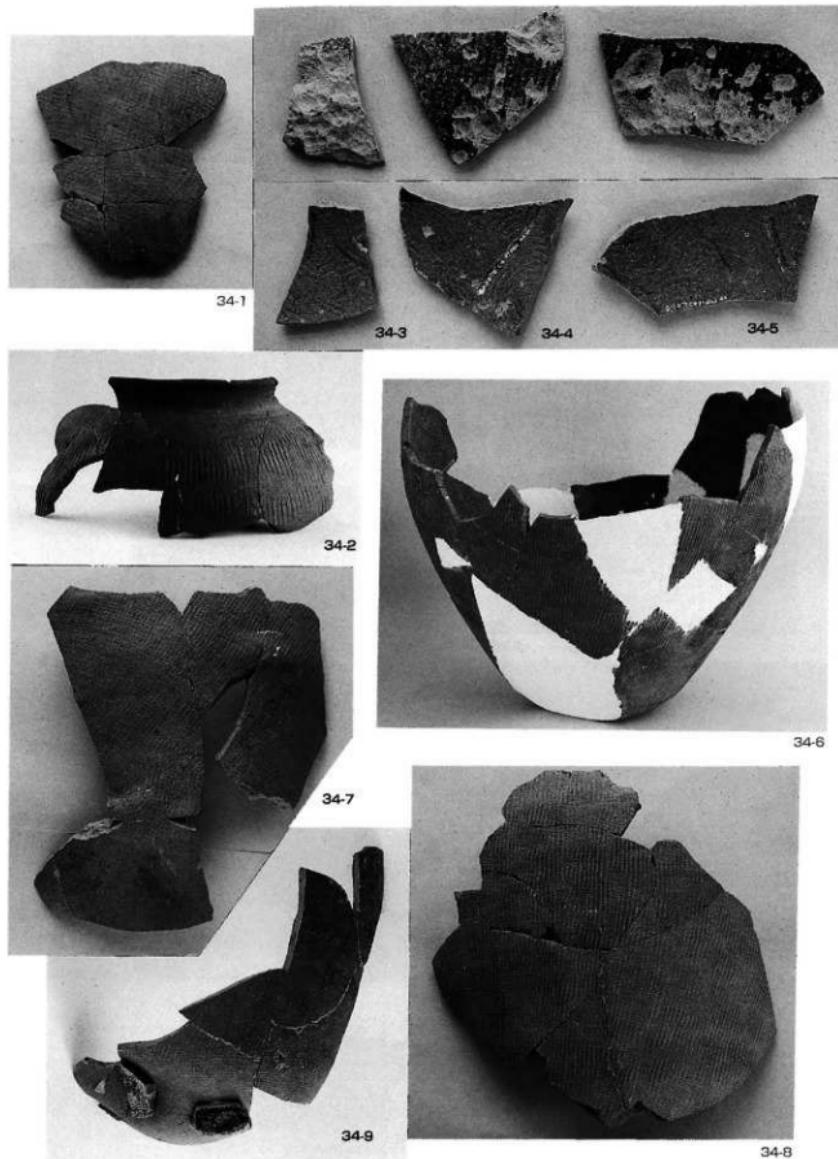


33-8

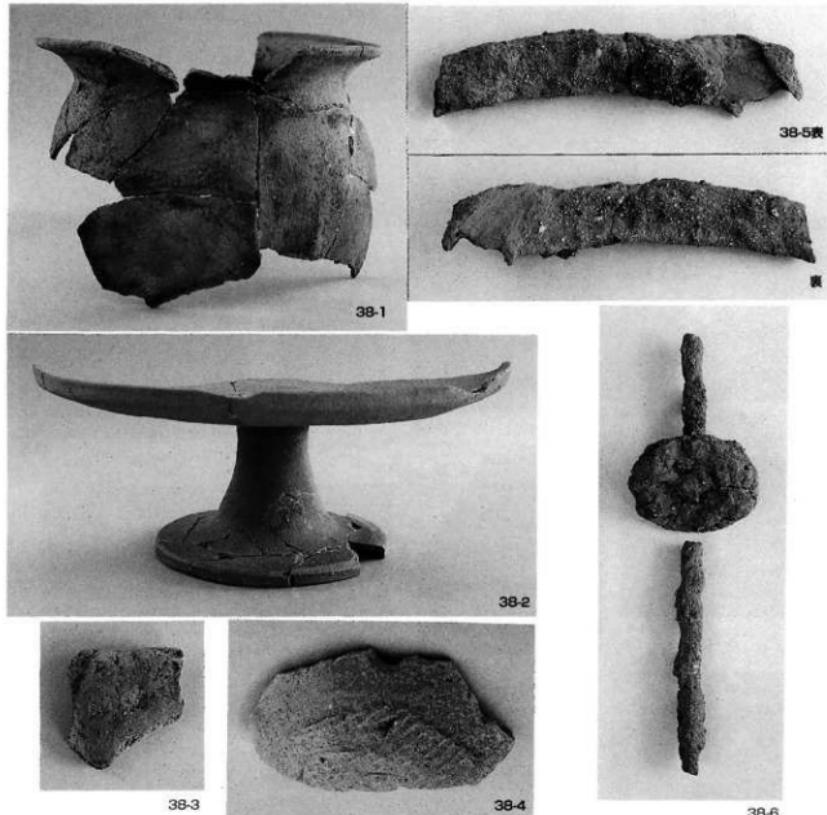


33-9

C4区土器溜り出土土器（須恵器）



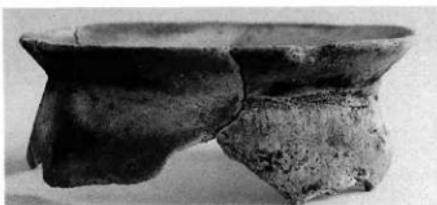
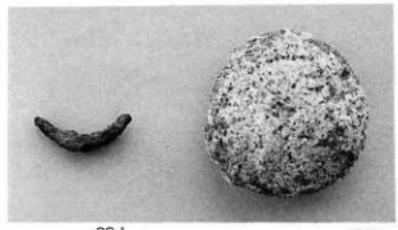
C4区土器溜り出土土器（須恵器）



C4区石組遺構出土遺物



C4区包含層出土土器（弥生土器）



C4区土器溜り出土遺物



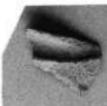
41-1



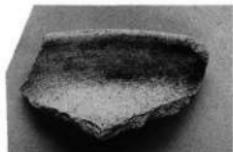
41-2



41-3



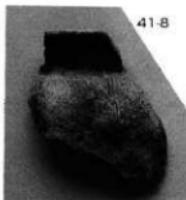
41-4



41-5



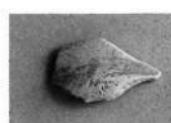
41-7



41-8



41-9



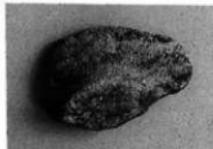
41-10



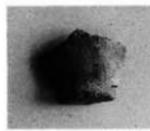
41-11



41-12



41-13



41-14

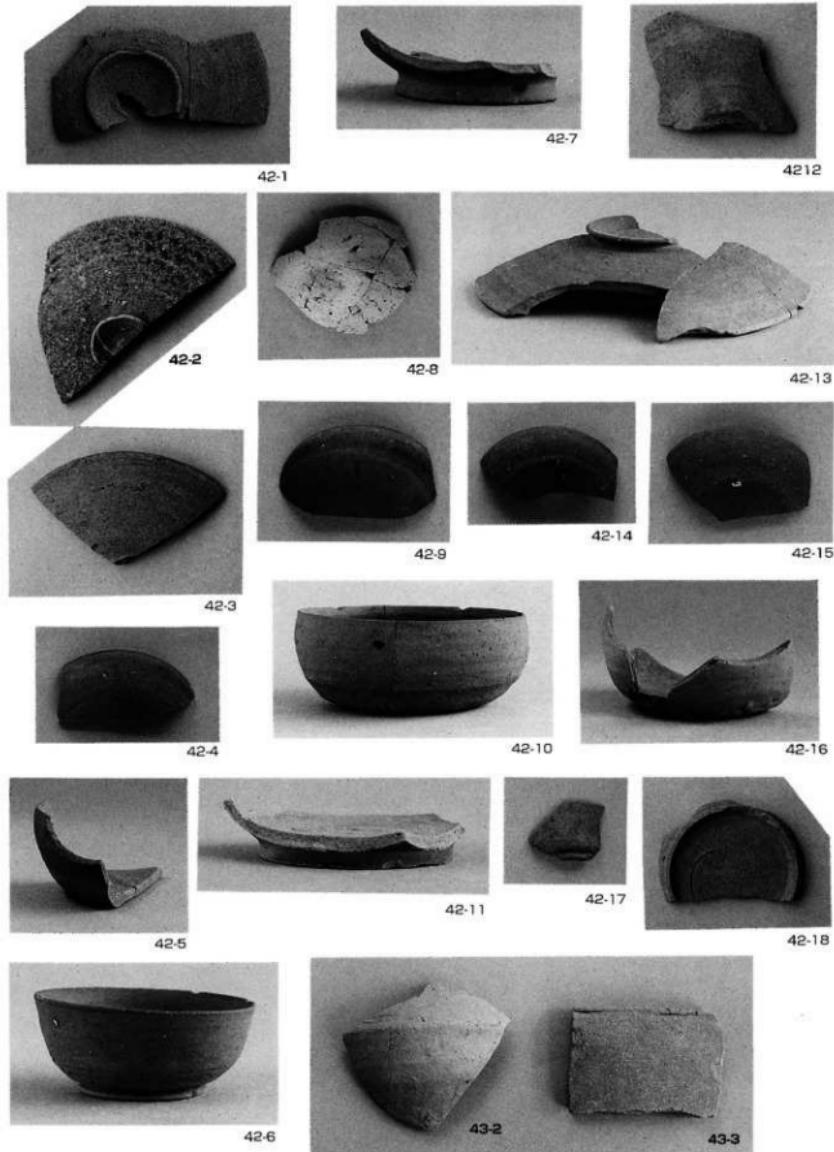


41-15

C4区水路跡出土土器（土師器）



図版23



C4区水路跡出土土器（須恵器）

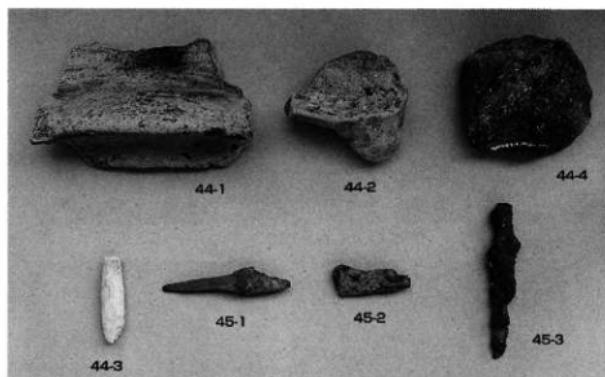
図版24



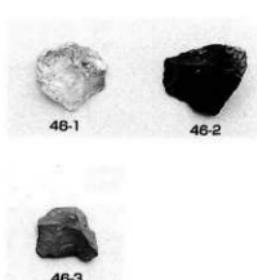
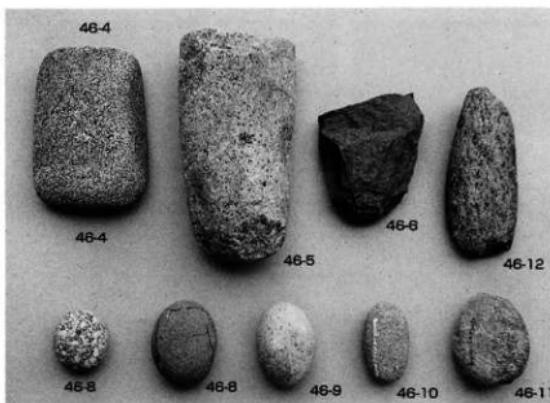
43-1



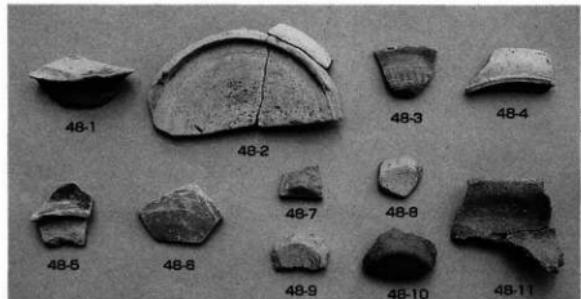
43-2



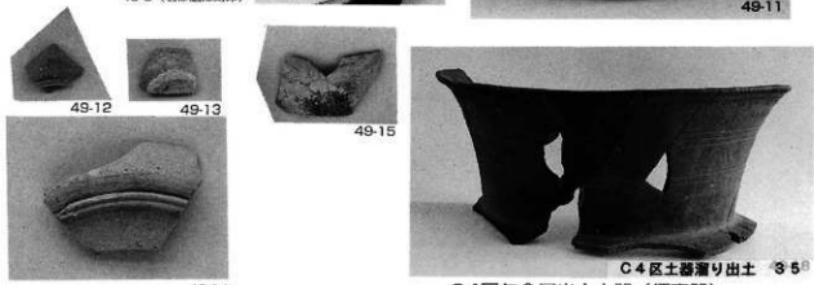
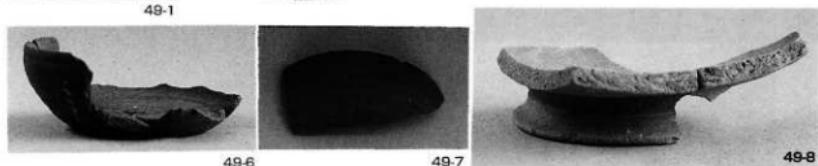
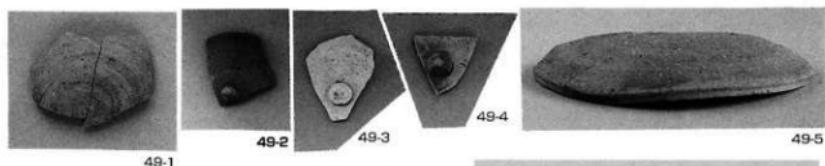
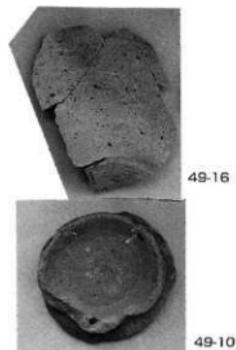
43-5



C4区水路跡出土遺物

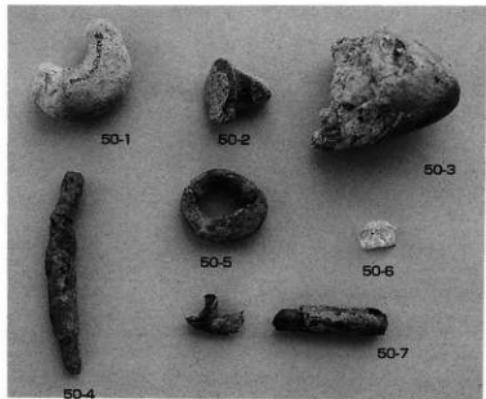


C4区包含層出土土器（土師器）

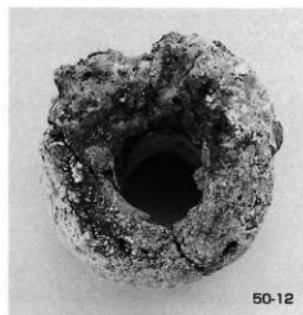


C4区包含層出土土器（須惠器）
C4区土器滿り出土
35

図版26



C4区包含層出土遺物



50-12



C4区包含層出土陶磁器

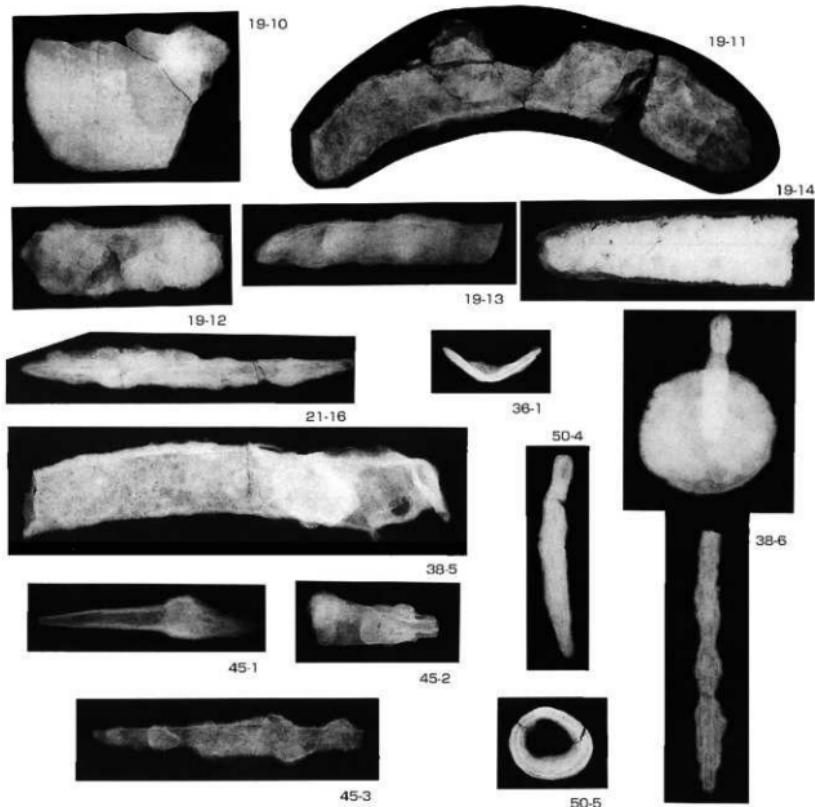


D1・2区出土土器



家の上遺跡遠景 北より
(中央左の小山が龜山)

図版27



家の上遺跡出土鉄器X線写真

報告書抄録

ふりがな	いえのうえいせき・いわっぽいせき				
書名	家の上遺跡・石壺遺跡				
副書名	尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書				
卷次	1				
シリーズ名	尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書				
シリーズ番号	1				
編集者	坂本 諭司・蓮間 法暉・杉原 清一・藤原 友子				
編集機関	木次町教育委員会				
所在地	島根県大原郡木次町大字木次1013番地			TEL 0852 (42) 1925	
発行年月	1998年3月				
所収遺跡	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経
家の上遺跡	島根県大原郡木次町大字平田	32363	35°12'59"	132°57'11"	4,300m ²
石壺遺跡	(同上)		35°12'57"	132°57'04"	1,800m ²
調査原因	尾原ダム建設				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	調査年月日
家の上遺跡	祭祀関係遺跡	奈良	配石・水路跡 土器満り・石組	土馬・手程土器 錆・紡錘車 須恵器・七輪器	1997.5.26 1997.11.19
	たたら跡	近世	たたら遺構	宋銭、木炭	1997.6.13 1997.8.19

1998年3月 印刷・発行

家の上遺跡・石壺遺跡

尾原ダム建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書1

発行

木次町教育委員会
〒699-1392 島根県大原郡木次町木次1013-1
TEL(0854)42-1925

印刷
松栄印刷有限会社